

蒼閃の軌跡

衝動エンジョイ勢

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

きつと帝国を探せば20人くらいに一人は居るだろうちよつと辛い過去を持った17歳の少年。紡いだ縁を辿って、彼らは激動の時代に呑み込まれながらも戦うお話。

目次

使わないという逃避

始まり

オリエンテーリング

リンク／眼

幕間1 日常

使うという妥協

自由行動日

ケルデイツク1

ケルデイツク2

ケルデイツク3

ケルデイツク終

縁 氷の乙女

107 89 74 57 43 29 21 11 6 1

紺碧の欲望／蒼の邂逅

自由行動日

オルデイス1

オルデイス2

オルデイス3

オルデイス4

Exceed!!

幕間2 選定／独白1

224 207 190 173 158 139 122

使わないという逃避

始まり

——ねえ貴方、その目どうしたの？そんなに包帯で巻いてちや周りが見えないでしょう。え？…そう、見ていると頭が痛むのね。うーん…あ、そうだわ！この眼鏡をこうして…よし！これでどうかしら？良かった！見えてるのね。それじゃあ私はこれ…え、名前？ふふ、私はね——

あれは何年前だったか。未だ、焼けた肉の匂いと灰が混ざった風が吹く村の片隅で、数少ない青々とした葉をつけた木の下に座り込んだ俺を助けてくれた彼女の名前はなんと叫びたか。あの亜麻色、なのに光を通すと瑠璃色に見える髪の毛、それと特徴的な花のような匂いだけを、今でも覚えてる。俺は彼女に感謝を伝えたい。その思いだけで旅に出た。

——七耀曆1204年3月下旬——

トリスタ駅を出て少し強い風が吹いた。ライノの花びらが舞い散る。とても綺麗だが今はそんなことで立ち止まっている場合ではない。予定の電車より二本もあとの電車に乗ったのだからもう時間に猶予はない。急いで走り学院の校門までたどり着いた。いくら道が直線だからってこの坂はかなりキツくないか？これからほぼ毎日この坂の相手をすると思うと若干うんざりする。

校門の辺にいる男女の生徒が声をかけてきた。この時間帯に未だここにいるということは先輩方なのだろう。背が低い女生徒がそうだとはわかに信じがたいが…。

「入学おめでとー！ようこそ、トールズ士官学院へ！私は、なんて自己紹介してる場合じゃないよね。間に合ってくれてよかったよー。さき、急いで！入学式はあつちの講堂だよ！」

「先に登録してもらった物を預からせてもらおうよ。安心してくれ、後でちゃんと返させてもらおうよ」

生活用具はちやうど今日学生寮の方に到着するので、今日の手荷物は財布と申請した物と、それから学校から持つてくるように言われていたオーブメントだけだ。物を渡して急いで講堂に入る。

入つてみて驚いたのは二つ。まず壇上に掲げられているトールズの獅子が刻まれた校旗の荘嚴さだ。あれを前にするだけで背筋が伸びる気分になる。なにより二つ目、赤い制服を着た生徒が全くと言つてもいいほど見当たらない。ぼつぼつと点在しているが、どうしても自分は間違つた制服を着てきたんじゃないかと不安になる。後ろの方で空いている席を見つげられた。急いで着席しないと。

まもなく、式が始まる。

「——この学院の創立者にしてかの獅子心皇帝、ドライケルス帝の言葉を君たちに授けて式を終わるとしよう。『若者よ、世の礎たれ』 それでは君たちの学生生活が充実したものになることを願っているよ」

受けた言葉を考えているうちに学院長以外の諸々が終わつてしまつていた。そうしている胸元をかなり開けた女性が手を叩いて視線を促した。

「はいはい、赤い制服を着た子たちはこれから移動ね！楽しいオリエンテーションの始まりよ♪」

旧校舎に連れられた自分を含む十人は不安げに、しきりに周りを見渡していた。様々な人が見える。金髪だが色合いの違う男女にオレンジ色で身長が少し低い男子、浅黒い肌でかなり高い身長の子。それから青い長い髪の堂々とした雰囲気の子に紺色とも言える黒髪の男子、緑髪で眼鏡をかけた男子。眼鏡でいえば少し赤みがかつた亜麻色の彼女もそうか。それに：あんなに小さい子までいるのか。銀髪で自分たちより二、三歳年下に見える女の子までいる。共通点が全く見当たらない：

あの大胆な格好をした女性は教官だったみたいだ。鮮やかな赤色の髪をした教官が自己紹介と共に説明をし始める。

「改めて、ようこそ！君たちが所属するクラスはⅦ組よ。このクラスは身分に関わらず選抜されたメンバーで構成されているの。私はⅦ組の担任のサラ・バレストインよ！よろしくね♪」

「ちよつと待つてください！身分に関わらずだつて？貴族と同じクラスになれつて言うんですか!？」

噛み付いた緑髪の男子を教官が、同世代だから仲良くしなさいと諫めるも彼の言葉は止まらない。そんな彼に金髪の男子があしらうように鼻を鳴らす。彼は四大名門の一角、アルバレアの者であることを自己紹介で明かしたがそれでもなお緑髪の彼は噛み付き続ける。それを教官が手を叩き言い争いを止める。

「はいはい、そこら辺にしてもらつていいかしら？ 文句なら後で聞いわ。それじゃあオリエンテーリングを開始するわよ！」

静まったのもつかの間ざわつき始める。教官が後ろに下がり柱の辺りを押すと足元がぐらついた。地面が開いている。トラップだって？ 旧校舎にどうしてそんなものか!? 急いで体制を立て直し床にへばりつくが、他の生徒たちが落ちていく。同様に床にへばりついていた黒髪の男子と目が合い、頷きあつた。

急いで飛び込み手を伸ばして、そして——

オリエンテーリング

「うっ!!むぐっ!!」

「きゃっ!!」

「ぐっ!!……ふう……君、大丈夫か?その……勝手に抱き寄せて申し訳ない」

「い、いえ、ありがとうございます——…っ!!すみません恥ずかしいので退きますねごめんなさい!!」

眼鏡の女子を何とか抱き寄せ着地を庇ったものの、落ちていた穴は暗く上手く着地するのは難しいと判断した結果、背中で何とか受け止めたが……さすがにこれは痛い……。皆が底に落ちたころには設置されていたランプが着いていた。……そういえば一緒に飛び込んだ彼は、と思いい大丈夫か?と言いながら隣を見れば。なんと、気まずいものか、あの真面目そうな彼が金髪の女子の胸に顔を埋めていた。

彼の頬には立派な手形ができていた。まあ不幸な事故と言うしかないが、少しでも早く彼女の機嫌が治ることを祈ろう。

オーブメントに教官から通信が入る。校門で預けたものがそれぞれ台座に置いてあ

るようなので各々装備を整え、指示通りマスタークオーツをセットする。使用者との同期を終了させ、皆準備万端になったようだ。ようやく行動開始だ。

銀髪の彼女といがみ合いコンビは単独で突入してしまった。本当はメンバーをある程度分けておきたかったが、金髪の彼女は気まづいようでそれに他の女子たちがついて行ったため結果的に男女で別れてしまった。眼鏡の彼女もいそいそと行ってしまったが、気を遣わせてしまったかな…。

残った男子で自己紹介をして、お互いに武器を紹介しあつた。

「僕は魔導杖オールドスタッフについていうんだって。開発途中で試験運用のテストユーザーに選ばれたみたいだけど…：実感は湧かないや。それより、ラインの剣綺麗だね〜！でもそんなに細くて大丈夫なの？」

「ああ、俺の剣は東方で使われている刀というものなんだ。帝国で主流の剣術と違つてかなり技術が必要なんだが、引き出した時の力はかなりのものだよ。俺としては二人の武器の方が気になるな…：杖に、変わった形の槍か。それに君の武器は一体？」

「俺の槍は十字槍と言つて、ノルドの集落でよく使われているんだ。馬の上で使いやすく、慣れれば地上でも十分扱えて面白いぞ」

「俺はガントレットだよ。片腕だけだけどな。完全我流で戦いのセオリーとかは分からないけど、それなりに経験はあるから信じてもらつていいぞ。」

改めて、ジェイル・アールライトだ、よろしく」

厳しいガントレットの見た目に目を輝かせた三人の反応を満足気に眺め、彼らも動き始めた。

「疾ッ！」

「えいつ！」

「はあッ！」

「ぜええいッ！」

順調に突き進んでいく。飛び猫を殴り、突き刺し、グラスドローメをリインやエリオットがアーツで倒す。意外と苦戦せず先に進むことが出来たが広間に出た。緑髪の彼が虫型の魔獣に囲まれているのを見た瞬間、リインが突貫する。俺達もそれに合わせる。

「大丈夫か!？」

「君たちは!?!くっ…悪いが手を貸してくれ！」

「リイン、単独突撃は!…ああもう、行くぞ2人とも！」

「エリオット、解析は任せた」

「うん……解析完了！コインビートルだ、外殻が硬いから気をつけて。僕もアーツで支援するよ！」

コインビートルを順調に倒し勢いづいてきた時、突然リインとジェイルのARCSが光を帯びる。

「紅葉斬り！……崩したッ！ジェイル！」

「任せろっ！はあッ！」

「ふう……疲れたあ」

「よく頑張ったな、エリオット。それにしても二人とも、見事な連携だったな。強烈な風を感じた。本当に初対面かと疑ったよ」

「いや、本当に初対面さ。でもジェイルの動きが手に取るように分かったんだ。なんとなくか繋がった感じだ」

「今のは……まあいいか。それよりええと……大丈夫か？」

「すまない、助かったよ。僕はマキアス、マキアス・レーグニッツだ」

「レーグニッツ!?あの都知事の？四大名門にあんなに小さい子、それに都知事の息子さんかあ……このクラスって本当に凄いなあ……」

「それで、その……助けて貰って悪いんだが……君たちの身分を、聞いてもいいだろうか？」

各々が身分を答えていく。平民、高貴な血は流れていない、身分とは縁遠かった：
ラインの言い方はどことなく抱えているものがあるようだった。

「ジェイル君、君は？」

「俺もガイウスと同じだ。俺の故郷は身分とは縁遠いエレボニアの辺境も辺境だったかな。でもそれなりに裕福だったかな。帝国を見て回ったけどおおよそ男爵家よりも少し劣るくらいだから貴族と大差はなかったと思う」

マキアスは微妙な顔を浮かべていたが、やはり都知事の息子というだけあって親の対立関係を自分に落とし込んでいるつもりなのだろうか。そんなことをしたら自分の視野が狭まるのは言うまでもないことなのに。

その後狭い道を五人で通るにはさすがに無理があると言つてメンバーを抜けさせてもらった。自分は元より一人で駆け回つて調べる方が性に合っている。

中を走っている間、ふと何年か前に悩んだ問を思い浮かべた。自己のために財産を蓄え人情を捨てた裕福な平民と、民のために財産を使い質素な生活を過ごす善き貴族と。そこに一体どんな差異があるのだろうか。マキアスはこれにどう返すのだろうか、と思ひながら走り出した。

リンク／眼

駆ける。

一度引き返しては行き止まりを探し回り、確かめる。満足すれば先へ進む。先に進んで分かれ道があればしつかりとそれぞれ行き止まりにたどり着くまで走る。その途中で最初に別れた白髪の女の子とすれ違う。驚いたような顔でこっちを見ていた。彼女今奥から来なかつたか？あの小さい身体でもこんなに早く踏破できるのか…

粗方調べ終わったジェルは日頃利用しているマツピング用の手帳に書き込んでいた。旅を始めた時から続けていることだ、今となつては癖になっている。書き終えてようやく歩き始めたその時ARCSがひとりでに光を帯びた。

「これはさっきのラインの時と同じ…？」

戦闘音が頭に響き始める。

広間に集結した、ジェイルを除く九人はイグルートガラムと言われる暗黒時代の産物と対峙していた。

「くっ…ジェイルはいつ来るんだ!？」

「ふっ…彼なら、やあっさつき…すれ違ったよ。せいっ」

「本当か、ファイー!それなら…皆!ジェイルがここに到達した時驚かせてやるんだ!こんなやつ俺達で倒してやる!」

『応ッ!』

ラインの激励によって皆の士気が上がる。彼の求心力が皆を繋げ、それぞれが取る行動を直ぐに理解し連携を図る。ガーゴイルの攻撃を避け隙のない連撃をぶつけ、少しずつ弱らせていく。

「ファイー!」

「分かっている。クリアランス。えい」

「マキアス!」

「ああ!今なんだな!？」

多人数戦、しかも近接使いがいる中でフレンドリーファイアの可能性が高い乱射系や散弾銃を二人が放ちそれを察知したラウラ、ユーシス、ガイウスは即座に離れる。次の行動を繋がりにより理解したユーシスは剣からアーツに切り替え、エリオットが攻撃

アーツを止め離脱に合わせてティアで前衛を回復。それまでアーツとアイテムによる補助寄りの立ち回りをしていたアリサも、前衛の交代とエマのARCSのエネルギー補充に合わせて弓で足止めを行う。

その場で行われている連携、戦闘はベテランまでは行かなくとも2、3年共に歩んできたものと見紛うほどだった。お互いの声かけもわずかとしながらお互いの一挙手一投足を理解し、彼らが今出せる最高のパフォーマンスを発揮していた。

銃撃により体制を崩したガーゴイルにラインとラウラが一気に詰寄り、フィーと合流した。最後の詰めに取り掛かる。

「フィー、ラウラ！決めるぞ！」

「うん、脚だよね？しっ！」

フィーが持ち前の小柄さを活かしガーゴイルの足元に潜り込む。

「……今ツ、紅葉斬りッ！行け、ラウラ！」

「おおおおお！奥義・洗刃乱舞ッ！」

それに合わせたラインがガーゴイルの体制を崩し、ラウラが必殺スクラフトの一撃を叩き込んだ。イグルートガラムの頭を切り落とし沈黙させる。ガーゴイルの身体は青銅に戻っていった。

「……終わったか……」

「……………やったあ!!!」

「ふう…こんなものがただの学校の地下にあるなんてな。さすがは帝国だ」

「いやガイウス、はあ…はあ…帝国にこんなのが沢山あるなんて…思わないで欲しいな

…ふう…」

「……………フン……………」

「もー無理！早く寮に戻ってシャワー浴びたいわ…はあ…」

「本当にそうですね…それに、こんなに短時間で疲れたのは初めてです…明日は筋肉痛かも…ですねえ…」

「同感。今日はもう帰って寝たいな」

「ふう…世の中にはまだまだこんなに不思議なものがあるのだな…私も精進せねば…！」

————パチパチパチパチ————

各々がその日一番の大物を倒し達成感に浸っていた時、見計らっていたかのようにちやうど階段の先から教官が降りてきながら拍手をしていた。

「お見事！その連携は君たちが渡されたラインフォルトとエプスタインが共同開発した戦術オペメント、AROUSによるものが大きいでしょうね。あなた達はAROUSに搭載されたリンクシステムの可能性を最大限引き出してくれた。お姉さん驚い

ちやつた♪——え？」

演技臭いリアクションを取っていた教官が突如間の抜けた声を上げた。目の前で佇んでいた、青銅色に戻ったガーゴイルが胴体のみで色を取り戻し動き始めたためだ。エマがそんなはずは無い、首は落としたのにどうして、とうわ言のように呟いていた。なんとか立ち上がるうとする生徒たちを教官が止めた。

「大丈夫よ、お姉さんに任せなさい！あなた達がこんなに頑張ったんだもの。私だってちよつといいとこ見せないとね！」

かなり変わった、いかつい形のブレードと導力銃を取り出した教官に、ただ一人座り込んだまま光るARCCUSを握っていたリインが声をかける。

「——いや、その必要はなさそうです」

次の瞬間ガーゴイルは砕け散った。

ARCCUSの光が皆の声を届けてくれる。皆が最奥で頑張っているようだ。なぜか分からないがリインと連携した時と同様に皆の動きが頭に流れ込んでくる。青髪の少女が敵の首を落としたのが見える。緩やかにARCCUSの光は収まっていき、伝わってきていた戦闘の緊張感もなりを潜める。

マッピングのおかげでかなり早く着けたなど思いながら走るのを止めゆつたりと歩

く。たどり着き、扉が開いた瞬間目に入ったのは首なしの敵を前にして、腰が抜けている風でもなくただ純粹に動く必要がないからと言わんばかりに座り込んだリインだった。他のものは力を振り絞って立ち上がろうとしているように見える。

——ジエイル、任せた——

声が聞こえ、気づけばガントレットで敵を殴り飛ばしていた。

馬鹿かこいつは。あの距離で再起動した敵を目の前に、座り込んだまま今日初めて会ったやつに全幅の信頼を置くアホがどこにいるというのか。

「遅くなつてすみません。ジエイル・アークライト、到着致しました」

力任せに拳を振り抜き着地、二、三步足踏みし勢いを殺す。他のみんなの顔が驚きに染つていてなんだか小気味いい。リインと目が合う。こんなにも自然に笑い合っている相手が今日初対面だなんて不思議な気分だ。

これがⅦ組：あのリユート弾き皇子、全く説明してくれなかったじゃないか。心に火が灯る。身を焦がす程の熱、それほどの期待が全身を駆け巡っている。

「ふう…仕切り直して。このⅦ組は特別なクラスよ。参加は強制しない。参加しなかった場合は元の予定通りのクラスに入ってもらふことになる。まだ初日なんだし馴染む

のにそう苦勞はしないでしょね。」

彼女は続ける。ジェイルは見えていないが、先程のおちやらけた空気とは一転した真面目な雰囲気少し息が詰まる。

「——君たちはARCCUSの適性があつたがために選ばれた。戦場で互いに連携し生き残るために最善を尽くせるこの機能……本学院はその可能性に意義を見出し、若い世代に協力してもらうことにした。それこそ最初に言つた通り、一切の身分に関わらずね。……これから自分が歩む道なんだから。親にだって、もちろん私たち教官にだって決められない。あなた達自身が決めるのよ、これからどうしたいか」

「ちよつとジェイル！聞いてるの？見た目に依らず不良なのかしら!?全く……あなたが最後よ。君がARCCUSの適正とは別に特別な事情でこのクラスに来たのは、一応、話に聞いているわ。だけど私はあなたの意思を尊重する。あなたが離脱する場合は私も何とかに掛け合うわ。——どうするの？」

「——ハハ、まさか！こんな所を自ら離れる？あるわけないだろうそんなこと。ジェイル・アーライト、参加させてもらいますよ。当然ですとも！」

笑顔で教官に返事をし笑い返す。

眼鏡の赤いフレームの外でひしめくどす黒い線と点を視界に入れないようにするかの如く、ただひたすらに正面を向いていた。

オリエンテーリングが終わり、Ⅶ組は第三学生寮というⅦ組に当てられた専用の学生寮を利用することになった。本来ならジェイルも二階の男子フロアを利用する予定だったが、リフォームが間に合わなかったせいも床の一部は軋み、水道も未整備。この状態で机やベッドを運び込めば床抜けの心配もあり、念の為にリフォームが完了するまで喫茶店キルシェの一部屋を学院が借り、それを貸与する形を取ろうとしていたらしい。

しかし第三学生寮に着き説明を受けたジェイルは階段の裏にあったスペースの奥、物置部屋を見つめる。サラにこの部屋でいい、むしろこの部屋が良いと強く主張したため、ジェイルの部屋はその他Ⅶ組メンバーとしては不本意ながら一階のフロアより若干降りた場所の物置部屋に決まったのだった。

物置部屋とは言っても随分綺麗だったな。前の利用者が退去した際に片付けたままだったのだろうな…物置に洗面台があったのは不思議だが。しかも水もしっかり綺麗なものが流れている。どうして男子フロアの一角のあそこがああなるまで放置されていたのかは謎だ…。前の住民に俺と同じ部屋の趣味をした人がいたのかと思うと少しくすぐりたい。

俺の性格なら本当に最悪の場合入らない可能性もあっただろうに…あの殿下にはⅦ

組に入ることは決定事項だったのだろうか。手紙がとつくのとうに届いてるっていうのはなんとも微妙な気分になる。果たしてあの殿下が焚き付けたのか他の方たちもグルだったのか…。

バルフレイム宮から一通、アストライアから一通……は？宛先すら書いてない、直接投函？殿下!?あのバカホント何やってんだ…今度ミユラーさんに言うしかないぞ。…これなら若しかすると直接見てたのかもかもしれないな。返信を書くのは…明日にしようかな。今日はもう疲れた。洗面台に行き顔を洗う。

「あ」

迂闊だった。そうか、ここは鏡があつたんだつたな。辺り一面に線が走る。ちらほらと点が浮き出る。——それは当然、鏡に映る俺自身の姿にも。頭に鋭い刺すような鈍い殴りつけるような痛みが生まれる。

この鏡に映る線は鏡の線なのだろうか、俺の線なのか。分からない／分かっている。

——俺の輪郭を境にして線と点が濃くなる——違う、これは鏡が脆いだけだ／違う、これは俺の——

身体が冷たい

苦しそうな声

冷やかな言葉

飛ぶ怒号

飛び交う銃声

身体が弾けた

「ベッド、せつかく置いたんだけどな」
いつも通りの朝だ。

幕間1 日常

身体が冷たい

苦しそうな声

冷ややかな言葉

飛ぶ怒号

飛び交う銃声

身体が弾けた

穏やかな朝を迎える。ゆっくりと起き上がり、部屋を出る。階段を上がり自分より必ず早く起きているラインの部屋に行き、シャワールームでシャワーを浴びる。

「おはよう、ライン。毎日毎日朝世話になっちゃって悪いな」

「おはようジェイル。元気そうでなによりだ。あの部屋で不便はないか？困ったことがあつたら直ぐに学院側に言うんだぞ？キルシエの店主さんもとてもいい人だったし、きつと今からでも——」

「ああもう…大丈夫だつて！あれからもう一週間経つたんだぞ？文句が出るならもつと早くに言ってるさ。それよりこつちこそ毎朝来て…本当は鍛錬でもしたかつたんじゃないか？」

「それは…まあしなくもないけど。けど鍛錬はちゃんと午後にやつてるし瞑想だつてジェイルが来る前に毎朝やつてるよ。何も問題ないから気にしなくていいぞ」

話す内容も一週間経っているというのにあまり変わり映えしない。俺は世話になっている側だから気を使うのも当たり前だが、ラインはあまりに人が…というかⅦ組のメンバーは皆が人がいい。人に騙されなにか心配になるくらいだ。今後も毎日このやり取りをする訳にも行くまい。男子フロアの改修に合わせてシャワー室の設置くらいはねだるべきかな、これは。

二人で中身のない会話をしつつ階段を降り、ダイニングへ向かう。キッチンを見れば

眼鏡をかけた二人が忙しなく動いている。

「おはよう！マキアス、エマ。今日の当番は二人だったか。任せたぞ」

「おはよう、二人とも。ああ、皆に渾身のコーヒーを振舞つてやるとも！」

「おはようございます、リインさん、ジエ、イルさん……」

あれから一週間が経過して、予想外の問題が発生した。正直、リインとアリサが少しピリつくのはあの場面を見た全員が分かつていたことだろう。ユースとマキアスの口撃は言わずもがなだ。

だが、あの場でさらりと流された俺とエマのあれは、エマにとっては未だに恥ずかしいようで、話すこと自体は可能なのだが……。如何せんエマの声が尻すぼみになってしまつて意外と聞き取るのに耳をすませる必要がある。これは慣れてもらうまで長そうかな……ま、会話できるだけアリサ達よりはマシだな。

「そ、そうだエマ。今更気づいたんだが朝、かなり早いんだな？俺が起きて少しした時にはもう下に居たみたいだけ……」

「えマジ？俺がお前の部屋行つた時でも気づかなかつたな……」

「あ、あははは……えっと、私元々いた場所でもずつとこうだったんです。朝早くに起きて勉強して、昼に息抜き。夕方頃からまた集中すれば効率よく学習できるので……その名残だと思いません」

自分の地元のことをあまり教えてくれないエマがこういう話をしてくれるのもちよつとした進歩と捉えよう。こうして他愛のない会話を紡いでいるうちにメンバーが続々と集まってくる。

教官が朝食の音頭を取る。最初の数日こそ皆が苦笑し撥ったそうにしていたが、一週間もすれば慣れたものだ。何せ突如始まったオリエンテーリングを違和感も無く踏破に集中できる集団だ、伊達じやない。

こうしてⅦ組の一日は緩やかに始まっていく。

まだ始まってから一週間ということもあり、今のところこれまでの復習に補足を入れていくくらいだ。大して辛くはないんだが：軍事学と政経理論に関しては教官が教官なだけにかかなりの勢いで進む。本人たちが言うに一応緩めだそうで、本格始動しているだろう来週が楽しみだ。

放課後になり各自で自由行動を開始する。荷解きが終わっていない者もいれば、とうに終わり雑貨を買ったり本を買ったり：自身の楽しみに時間を費やす者もいる。かくいう俺も荷解きを初日に終わらせたおかげで後者側だ。

必要な分しか荷物を持ってきていないから、雑貨を集めるのが楽しいのだ。それに参考書も買わないとああいやいくら落ち着いた色がいいとはいえ部屋に彩りは欲しいし花でも買ってみるか？そういえばミヒユトさんの質屋にいいものは流れて来てないか

……楽しみが湧いてくるって言うのはいいなあ。

……うん。もう夕方の五時、あともう少し待てば寮で飯を食べるんだが、ちよつと小腹も空いたしキルシエでパンでもかじろうかな。

——起きて。ジエイルってば……もうそろそろ夕ご飯だよ。早くもどろ。

「う……ん……んん？……ファイ？……どうし——」

——あれ？ここは、中央の公園……？今の時間は六時半だ。でも腹は減ってる。キルシエに行った訳では無い。俺は一時間半もここで寝てた、のか？

「……ファイ、俺がいつ頃からここで寝てたか分かるか？」

「ううん、放課後からずつとここで寝てて、さつき起きたとこだからさすがにわかんないかな」

「そっか……まいつか！起こしてくれてありがとな。さ、戻ろう。俺腹減ったよ」

私も。そう言い合つてやり取りし寮に戻る。空白の一時間半は気になるが……そういうこともあるだろう。

今日の夕飯はガイウスとユーススが作ってくれたようだった。あの二人、全くといっ

ていいほど共通点が見当たらないがこの一週間でかなり仲良くなっている。逆に共通点がないことがそれを手助けしているのかな。

食事を終え談笑を楽しんだのち自部屋に帰っていく。その日の授業の復習に翌日の予習、読書：夜にやるものは大概できる。彼らの部屋はかなり広めだから素振りだつて余裕だろう。俺の部屋だと筋トレくらいなものだが、まあ振るものもないし困っていない。

すれ違いざまにエマがなんとも言えない顔をする。え？やだ：俺臭いか…？

「あの…ジェルさん、香水とか…つけました？どことなく花のような匂いがするんですか…」

「え、いや、特にそういうのはつけてないな。良かった…汗臭いと思われるのかと思つて不安になったよ。多分今日部屋用に買ってきた花の匂いじゃないかな？」

「そうなの、かな…思い違いだったかもしれないし…そうですね！すみません、わざわざ呼び止めてしまつて。おやすみなさい、ジェルさん」

「…あ、ああ。おやすみ、エマ。良い夢を」

周りの会話で少し聞き取れないところがあつたが、まあ解決したならいいだろう。部屋に戻つて復習を終わらせ、支度も済ませた。よし…筋トレも済ましたし、今日のこととは終わったかな。

ジェイルはこのまま眠りについたが、翌日ハイブリッツヒ教頭に提出課題を忘れた件で睨まれることになるとは思ってもいない。

——クソツタレ!!ニー■●●●め!こんな小さい村を焼き討ち!?何のために!どうして!!

身体が冷たい

——…本当に、本当に俺たちに対する当てつけの為だけに…?それだけでこの村を、無辜の村人を殺したっていうのか…!?

苦しそうな声

——そうだとも。依頼人からは『戦いに勝て。それ以外は略奪だろうが虐殺だろうが何をしようが構わん。どうせそこは更地にする』とわざわざ命令を受けているのでな

冷ややかな言葉

——……………ツ!この下衆共がア!各員戦闘準備ツ!■●●の意地を見せろオ!理不尽に殺された者たちの無念を晴らせエ!

飛ぶ怒号

——…フン…ニ ■■■ ツグ、応戦しろ。村人共と同様踏み潰せ。一切の慈悲
をも与えるなッ！

飛び交う銃声

身体が弾けた

使うという妥協

自由行動日

入学式から二週間と少し。最初は放課後になっても余していた体力が、濃密になった授業により順調に減っていく。何なんだあのトマス教官：あんなにのほほんとしてるのに授業の内容半端じゃないぞ。まだ入試対策で勉強したところに豆知識を入れてくるくらいだけど、初めてやる部分であれをやられたら：手首壊れるんじゃないか？

放課後になり、いつもの解放されたと言わんばかりの笑顔を浮かべたサラ教官が教室に入ってくる。今日はそれに加え何かを待ち遠しそうにしている。

「教官、今日は特に嬉しそうだな。どうした？」

「あら、目敏いじゃないジェル♪話は聞かないくせに。みんな、明日は、あ・さ、言った通り自由行動日よ！今日の放課後から部活動に参加できるから、明日を含めてじつくり部活を決めるもよし、丸々一日休みなんだからしつかり身体を休めるもよし：自分の

ために存分に使いなさい！」

それじゃ解散！と言ひ意気揚々と教室を出ていくサラ教官。あのままスキップして階段こけないかな。朝は眠いんだから仕方ないだろうが。俺の心の声を聞きつけたのか勢い良く扉を開いてサラが教室に戻ってくる。死ぬほど驚いたけど、どうやらラインに用があつたようだ。：馬鹿なことばかりしてないで俺も動くか。

部活、部活かあ。何にしよつかなあ。フエンシングは興味はあるんだけどフエンシングらしい綺麗な感じは俺は出せないしな。チエスは、無いな。どれだけあの子たちに負けたか。侍女の子達にすらチエスが弱いつて覚えられてるの恥ずかしいんだよ。文芸部はありだけドドロテ先輩の視線が苦手だ。すれ違う度にねっとり見てくんのやめてくれないかな。

「どーしよ。ね、ミヒユトさん」

「俺に聞くな、てかここに入り浸るな。お前たちがこつち来てからお前週四くらいできてるじゃねえか。他の生徒共も来るけどお前だけ頻度おかしいんだよ。おい、お前の後輩だろどうにかしろ」

「ソーダゾ。オミセニメーワクカケルトイケナイカラ、モノヲカワナイナラサツサトカエルンダゾ」

「そうですね！迷惑かけちゃいけないですよね！でもせいぜい二十分くらいだし大丈夫ですよね！」

「お前らなあ……」

時は既に夕方。図書館で本を借りほくほくとしながら帰ってきていた。帰りがけにリインにイタズラを仕掛けてきたというクロウ先輩と一緒にここに寄ったというわけだ。

「つたく……。生憎だがな、お前がこの前来た時と品ぞろえは一切変わってねえ。分かったら帰りな」

「えー？なんか無いんですか？」

「……ほらよ。500ミラだ。買うか？帰るか？」

「買う買う！買います！……てか新聞で500ミラって結構取りますね。発刊日二週間前だし。ちよつとぼつたくり……クロスベル・タイムズ？」

「分かったか？お前らは士官学院生なんだ。自国のことだけじゃなくて周りにも目を向けねえとな？そら、帰りな」

手で追い払われるように手を振るわれて、不本意ながらもいそいそと店を出る。その後クロウ先輩に部活の相談をしたものの帰宅部だったからと一蹴。当てにならない先輩を置いて学生寮に戻る。後ろから、なけなしの金を絞ったんだから付き合えよ先輩くと

情けない声が聞こえる気がするが気のせいと言ったら気のせいだ。

部屋に戻り、買ってきたクロスベルの新聞を読んでいた。現市長が暗殺されかけていたこと、側近の犯行だったこと、警察の特務支援課という部署が事件を解決したこと：正直一面に書いてあることだけで頭がパンクしそうだった。

前にクロスベルを訪れたことがあった。あの小さな町の市長を暗殺することに意味があるとは思えないし：秘書がやる理由も分からなかった。けど何より驚いたのは特務支援課だ。

前にクロスベルに来た時の警察といったら酷いものだった。道案内を頼めば遊撃士に言え、迷子は放置、挙句裏路地でタバコ休憩。ガキなりに呆れてたのが懐かしい。

それに対して新聞の方に書いてあった特務支援課の基本的な業務だが：ただの慈善事業、まるで遊撃士のような。だけど：こうやって自分たちに尽力してくれる酔狂な人達が居るのが分かるだけでも、帝国と共和国の板挟みになっている彼らにとっては励みになるのかな。

コンコン —— ジェイル、今入って大丈夫か？

「どうぞ、リイン。どうしたんだ？この時間に部屋を尋ねるなんてお人好しにしては珍しい」

「生徒会から生徒手帳を預かってきたんだ。今ちようど上の階は全部回ってきて、最後にここに来たんだ」

「…それは教官の仕事じゃないのか…？　まいいや。明日の予定って決まってるか？　もし空いてるなら部活探しを一緒に回ろうかと思つてたんだが…」

「あー、その…ちよつと教官に嵌められてな。生徒会に届いてる依頼の手伝いをするこ
とになつたんだ」

「……案外酔狂ご奉仕野郎はそこら辺にいるかもしれない。クロスベルの未来も明るいな！」

いつもの時間より少し遅めに起きて準備をし、行動を開始する。俺の郵便受けのところに封筒が突き刺さっている。あれはもしかして…。

—— トリスタ　　トールズ士官学院第三学生寮宛 ——

……………送り主は…

—— アルファイ ——

内容！内容は!?まだ、まだ希望は…

——せっかく手紙を書いたのに一週間待ってもまだ返事が届かないの……ジエイルさんはそんなに薄情になってしまわれたのかしら……？お返事、待ってます——

不味い。非常に不味い。初日に貰った手紙、一通も返してない……！

部活巡りなんてしてられない。自由行動日のまず最初にすべき行動が決まったのだった。

朝から酷い目にあつた。まあ自分が返事を返してなかったのが悪いのだが……。皇女の方はいいとしても……アストライアからの方はちとやばいかな。皇女と違って催促の手紙が来ないのがさらに恐怖心を掻き立てる。

場所は変わって学生会館。手紙を出し終え一息着いているところだ。コレットと話してたり外を走ってたりで、リインは忙しそうだな。これは確かに部活巡りは無理そうだ。……俺もそろそろ回ろうかな。

料理部、オーケストラ、写真、オカルト、園芸、オカルト、オカルト……ええいあのベリルとかいうやつ、どれだけ記憶に残りやすいんだ……！まああらかた回ったかな。回ってみて思ったがやっぱり俺はどこかに所属する感じじゃないな。これまで通り一人で

気ままに過ごすのが一番合っている気がする。

今日の目的はもう一つ。それは

コンコン

「失礼します。Ⅶ組の者なんですけど……ドロテ先輩、エマさん借りてついでいいですか？」

「ああ、ジエイルさん。ええどうぞ、エマさんさえ良ければご自由になさってください」

それはエマとの関係改善。授業での戦闘訓練、寮での生活……アリサ達より状況がマシな分コミュニケーションの間に誰かを挟んだり、二人で居る時かなり気まずかったり……これ以上長引かせたって何の得もない。さっさと終わらせてしまおう。下に降り休憩スペースに座る。

「————という訳だ。リインにちゃんと話して何とかしろって言ってる手前、このままエマと微妙な感じが続くのは不本意だからな。ちよつと強引だけど、少しお話ししないか？」

「そういうことでしたか……その、私の故郷は閉鎖的で……私が知る男性は皆家族のように接してきました。なのでああやって庇ってもらった時、とても近くで男性を実感して、苦手とか、嫌だとかより先に、その、驚きが先に、来てしまつたんです。それから落ちて着いてから、急に恥ずかしくなつてきちゃつて……あの……ごめんなさい！」

なぜ俺は謝られているんだろう。聞けば聞くほど申し訳なくなってくる。

「いや、こつちこそ本当に申し訳なかった。あの時の行いに関して俺は正しいことをしたと思ってる。だけど…その後エマに、周りのやつらに気を遣わせてしまっていることに気づいていたのに話し合いを先延ばしにしてしまっていた。その、すまなかった…」

少なくとも、俺やリインがあの時とつた行動は善意によるものだった。各々が引き寄せた彼女たちもまたまた手を取られただけ。こんな、ちよつと話せば済むようなことで女の子に迷惑をかけてると思うと、男として情けなく感じてしまう。

「……………」

「…えつと……………」

「…ふふっ」「はははっ」

お互い、笑いかける。そう、たったこれだけ。あの場の誰もが悪くない。ただちよつと偶然が過ぎただけ。それなのに謝りあっているというこの状況がとてもおかしく思えた。

「じゃあこれで仲直りです！私ももう気にしません。委員長として、ビシビシ行きますからね！」

「別に仲違いしてた訳でもないけどな。改めてこれからよろしく、エマ」

それから紅茶を飲みながら話して別れた。これで懸念事項がひとつ消えたと思うととても晴れやかな気分になれる。

この後これといってやる事がなかったの、読み終わった本を返しに図書館に来ていたんだけど……ほんと、トールズの生徒は問題を起すのが得意なのか？トワ先輩が二階で本を戻そうとしていた。しかし、戻す場所が高く踏み台を使った上で背伸びをしバランスを崩そうとしていたので、急いで駆け寄って支え何とか事なきを得た。

「——だからですね、トワ先輩ご自身でも分かっているなら注意してください！ダメそうだと思ったら他の人を当たればいいのに——」

「ごめんなさい……だ、だけどジェイルくん!?私は一応上級生なんだよ?そんなに心配してくれなくともこれくらいちゃんできます!」

「じゃああの状況はどう説明するんですか!この図書館の二階部分なんて何故か一階と抜けて繋がってるんだから、手すりを超えて落ちれば大怪我です。踏み台を使ってるからその上で届かないのが恥ずかしいのか知りませんがね、怪我するよりは断然マシ……ちよつと聞いてますか!」

「き、聞いてるつてば……ごめんなさい……うう……」

し、しまった。勢いで叱ってしまった…いや俺は悪くない。これは先輩の不注意が招いたことだ。どんなに上級生を目の前で縮こまらせようと俺は謝らんぞ。

「はあ…まさか二回目の対面がこうなるとは思っていませんでした。話自体はクロウ先輩から伺ってるんですけど…」

「う、うん。まさか私も助けてもらった直後にお説教されちゃうとは思わなかったよ…でも助けてくれてありがとうね」

「いえ、それに關してはもういいです。それより、生徒会の腕章をつけてるってことは…これも仕事なんですか？」

「うん。うちの生徒会は結構できることが多くてね。備品の注文とか、物の修理とかは生徒会を通して技術部に流すこともあるね。あとは生徒や教官、町の人達からの依頼とかも処理してるんだ。私がここでしてたのも依頼のひとつだよ」

啞然。言う言葉が見つからない。何だこの学校。トワ先輩の口ぶりにこれらの仕事は生徒会の役員たちがやっているのだろう。それに、生徒会の腕章をつけた生徒たちが忙しく動いているのはこの二週間でも見ている。なのに教官がそうしているのは見覚えがない。教官たちの協力無しに仕事をこなしてる…？はは、いやまさかさすがに顧問くらいいるって！

「…それで会長が今対処してる依頼はなんですか？」

「うん！毎年恒例と言つても私も二年目なんだけど……この時期は新入生の本の貸し借りが激しくて、勤務してくれてる司書さんも三人じゃ回りきらないの。だから生徒会が手伝つてる感じかな。日替わりで役員の子たちが二人で交代で入つてて今日は私だったの！」

「……他の方は？」

「あつ……き、今日は自由行動日だから！」

「……会長は何を？」

「依頼です……」

「……後で生徒会室に入れてください。気になることが多すぎます……」

「はい……」

俺の想定が甘かった。教官たちの協力無しどころの騒ぎじゃない。この日に限つては、役員が総出で処理してたものを一人で対処していたらしい。この後図書館の仕事を手伝つて早々に終わらせ、生徒会室にお邪魔した。デスクには信じられない量の書類。ここはかつてのギルドかと思わせるほど仕事が舞い込んで来ているようだ。

「この量の依頼を役員とラインだけで回すとか無理があるでしょう！」

「ううん、それが全部依頼だったら私死んじやうよ……ジエイルくんが見てる書類は今年予算案だよ。Ⅶ組の編成があつたから私がそつちにかかりきりになつちやつて、ま

だ目を通してないんだ……。依頼はこっちで、用務員さんから来てる備品の注文書はこっち……これは私宛だから違って、部活動からの要望はえつと……それだね」

「……………」

無理無理無理無理無理無理。俺が知っている限りだとそういう書類系は担当者の押印が必要だ。たかだか学校に届く書類、悪辣なものはないだろうが、だからといって流し読みでどうにかしていいもんじゃあない。つまりこの量を本人が全部目を通してたあとハンコを押して、本人は本人で合間を縫って依頼を処理……？

こんな小さい子にこれほどの苦行を投げっぱなしにして……教官たちは恥ずかしくないのかとも思ったが、書類の質を理解すればそれは行き場のない文句だったことが分かる。

今後の俺の放課後の予定はこれで決まりだな……これをこの人だけに任せてられない。……何だこの依頼……これは学生がやるようなもんじゃない、却下。後で学院に突き返して何とかしてもらおう……。こっちは備品系の依頼だ。この依頼は部活から個別に来てる。わざわざ役員が部に出向かなくても用務員さんに聞けば把握してるものもあるはず……「ちよ、ちよつとジェイルくん!?!?どうしたの!?!?書類見ておかしくなつちやつた……?大丈夫だよ、処理するの全部私だし……」

「言いがかり!?!?俺は依頼を分別してるだけです……これから放課後、用事がなかったら

ここに寄ります。依頼だけは俺が管理しますし、先輩が対応していた依頼も俺が代わりに行きます。いいですよね？」

「いやいやいや、そんなの悪いよ！別にジエイルくんは役員でもなんでもないんだし、それにまだ学校が始まって2週間でしょ？まだやることもたくさんあるかな、なんて……」

「いいですよね？」

「えつと……ほら！VII組って完全新設なの！サラ教官これでもまだ二年目だし教官の手伝いの方が——」

「いいですよね？」

「はい……」

とりあえずこれで俺の放課後の活動は決まりだ。……クロウ先輩に、VII組設立時から忙しそうにしていたから面倒見てやれって言われてたの、言われた当初はあまりピンと来なかったが、これでちゃんと理解した。多分この人このまんま勝手させてたらいつか倒れるぞ。

「もう……ともかく！手伝ってくれるのは助かるけど、VII組は特別カリキュラムで他クラスよりハードなんだよ？これで無理して倒れたりしたら許さないからね！」

「は？（この人は自分を差し置いて何を言っているんだ？）」

「え？（どうして私非難するような目で見られてるの……）」

日曜日は炊事の当番はおやすみ。旧校舎の探索の打ち上げをしていたリイン達三名に混ざってキルシエで食事をすることにした。

旧校舎の地下の構造が変わっていることを聞かされて驚いた。次回は俺も混ざるところを約束させてもらったり、エマとの関係改善を知らせておくついでにアリサのことでおちよくったりもした。リインはリインでどうやら夕方に声をかけたらしいが、話を聞く限りではまだ厳しそうかな…嫌ってるわけじゃないはずなんだけど。

「あそうだ。リイン、俺生徒会の手伝いするから来月からの依頼覚悟しとけよ。俺も一応働くけど今日よりめんどいの送るからよろしくな」

「え、」

ケルデイツク1

今日は事前に予告されていた実技テスト、皆がグラウンドに集まっている。教官が無駄にいい音で指を鳴らすと、黒…いや紫？なんとも言えないトーテムのような何かが無空から突然現れた。当然全員が驚き、浮いているソレに特に近かったラインがすぐさま身構える。俺はソレが現れた時何故か思わず身体が強ばってしまい咄嗟に動くことが出来なかった。

「ああ待って！大丈夫よ。危険じゃない…とは言いきれないけど、これはとある筋から押し付けられた結構便利な機械なの。とりあえずは安心して。コイツの名前は戦術殻、今回の実技テストの相手をしてくれるわ。遠慮はいらないから思いつきりぶつ叩いてね♪」

教官がそう説明を終える頃には身体の強ばりは解けていた。ライン、エリオット、ガイウスの旧校舎組が呼ばれテストが開始される。自由行動日の探索の成果か戦術リンクを上手く利用し、かなりの速さで機能停止まで持っていった。

不思議なことに戦術殻は次のマキアス、ユース、ラウラ、エマの四人が呼ばれ教官が指を鳴らすと、また即座に現れたのだ。機能を停止した同一個体なのかどうか分から

ないが、一定のテンポで左右にふよふよと揺れているのは見ていて不安になる。

……苦戦はしたもののとりあえずは倒せたみたいだ。剣の扱いに慣れているラウラとユーシスがいたのにも関わらずこれだけ時間がかかったことは、あの二人の間に深い溝があるのはつきりしたってことだな。オリエンダーリングの時はどうやら協力出来ていたようだけど……何か条件でもあるのかな？

「最後はジェイル、ファイ、アリサよ。前に出て！」

「戦術リンクは……どうしようかしら？」

「アリサはファイと繋いでくれ。ファイの速度で前衛を荒らされるといつ射るか分かんなくなるだろ？だからだ。多分便利だと思うんだが」

「……ふーん」

「ファイ……？な、なんだよ……」

「べつに……あのガーゴイルを壊した時の速さが私の全力より普通に速くてちよつと悔しかったとかさも私の方が速いみたいな言い方でウザイとか、そんなんじゃないよ？」

「あー……」

「い、いいからほら！行くぞ！二人とも！」

なんだかんだ言ってもテストはすぐに終わった。敵正面でびよんびよんと動き回る

ことで注意を引き寄せるフィー、その隙間、まるで針の穴に糸を通すような正確な射撃を行うアリサ、ともかく力いっぱい殴る俺：バランスは相当良かったんではないか。

教官から大まかな評価を下された。おおよそ高評価だったし初回の実技テストにしてはよしとしよう。実技テストの終了に続いてⅦ組の専用カリキュラム、特別実習の説明に入った。俺たちⅦ組は座学の授業を他クラスよりかなり早めに進めてきた。その理由はこの特別実習のためだったということだ。特別実習前日の授業短縮、実技授業の増加とそれに合わせた他科目の減少、特別実習での純粋な授業頻度の低下。こう考えてみるとあの授業の密度も納得か…。

特別実習そのものの説明も受けた。実習期間は二日間で決められた範囲に課せられた課題をこなす。実にシンプルだ。そして初の特別実習は俺、リン、エリオット、アリサ、ラウラがA班としてケルディックに。他のメンバーがB班としてパルムに向かうこととなった。B班は言うまでもなく地獄、A班も触れてはならない爆弾がひとつ…両方とも大変そうだな、これは…。

……よし。シャワーも借りて身支度も済ませ、荷物も確認をし終わった。集合時間にはちよつと早いけどもう出るか、先に待っても文句は言われまい。実習は二日間、現地で調達できるものを省き、シャツと下着を念の為二セット。男なんてこんなもんだ。さて、ちよつと町を回るかな。早くに開けてくれてる店もあるから忘れ物の最終確認にちようどい

い？

「おいジェイル！どうした？公園なんかで何してたんだ？今日は実習なんだから寝ほけるのは勘弁してくれよ」

「——ハハ、冗談。お前らの方が心配だな」

「……っ……ふふ……っ……ハハハ！」

「な、なんだよ……気でも狂ったか……？」

「ジェイル、ラインとアリサの問題はついさつき解決したよ。だから今心配なのはジェイルの眠気だけだね！」

エリオットって案外毒舌なんだな……。……確か、俺は学生寮を出たばかり。今から町を回ろうとしていた。それなのに気づけばだいたい二十分ほど経って公園のベンチで

座っていた。正直何が起きたかよく分からない。あまりに不自然だけど…そんなことより今は実習だ。メンバー全員が揃ったのならわざわざここに居座る必要も無いだろう。

俺たちが駅に着いた時、B班も既に全員そこで待機していた。駅員の女性に切符を貰い、端の方で話していた。

「……………」

「…エマ?どうしたの?」

「あ、ううん。なんでもないんです。…フィーちゃん、今回の実習大変なものになりますから…年下に頼るようで悪いですがフォローしてくれると助かります」

「うん。…なんか上手くはぐらかされた気がするけど」

「うっ…あはは…」

「……………」

「ジエイル…?」

「…眠い」

「お前なあ…」

エマがこつちを眺めていた。フィーにそれを探られ誤魔化している。…そういえば

この前もエマとちよつと変わった話をした気がする。もしかしてエマが？——いや今はどうでもいい。そろそろ時間みたいだ。俺たちは列車に乗ってケルディックに向かった。

列車内では各々自由に会話したりブレードというカードゲームで遊んだりしていた。そろそろケルディックも近くなってきたという時、各自で持っているケルディックの知識を擦り合わせたりもした。

途中、教官の話をしている時に待っていたかのように突然教官が乱入してきたりもしたが、すぐさま寝てしまったため語ることもないだろう。

ケルディックに到着し、初めてということもあり教官の誘導の元今日利用する宿に案内してもらった。部屋に置いてあった封筒を手にとって準備を整えた後宿を出る。後ろから着いてきたサラ教官に質問をし、突如シラフに戻った教官がそれに答えた。リインは教官の意図を理解しようだった。

——これはリインが押し付けられた生徒会の依頼と同じ。もつと言えば、まるで遊撃士の真似事のような。ただ、今回やこれからの特別実習に依頼の取捨選択が必要になるようなものはさすがに無いかな。とりあえずできる限り依頼を解決しここの土地を把握すれば良いのだろう。

初日に渡された依頼は三つ。東ケルディック街道の手配魔獣の対処と西ケルディッ

ク街道の街道灯の交換、そして葉草の調達。葉草の調達は必須では無いものの可能なら全部の依頼をこなしたいというのは俺たちの総意だった。

教会で話を聞いたところ、ひとつは大市で調達が可能なようだ。もう一つは西ケルデイツク街道方面の農家の方が取り扱っていると。先に西側で二つの依頼をこなしたあと、宿で遅めのランチを取って最後の依頼へ。大体の予定を決めたところで早速活動開始だ。

「おい！そつちは街道だ。勝手に出ようとするんじゃない！」

「…は？」

「ちよつとジエイル…！」

「…俺たちはツールズ士官学院のⅦ組に所属しています。現在特別実習でこちらに来ていて、その課題の達成に街道に出る必要があるのですが…」

「む、そうか…実習とやらは聞いていないが、諸君らの学院から領邦軍に進んだ者も何人かいる。ツールズの名に泥を塗らぬよう励むといい。それから、面倒事は起こさぬように」

「はい、ありがとうございます！」

リンがすぐさまフオローしエリオットが愛想良く返してくれたことで何とか彼らは去っていったようだ。彼らは領邦軍、ケルデイツクは…位置的にアルバレア家から派

遣されているのだろう。いざーという時に呼び止めるものだから思わずキツめの声が出てしまった。

気を取り直して街道に出ると辺り一面の気持ちのいい緑が視界を襲った。

「わあ……！」

「とてものかだ……落ち着くな……」

「ええ、本当に……」

「……ここで寝転がってゆっくり寝たくなるな……」

「お前らーまだ街道出て数歩だぞ？ 感動するのはいいけど依頼忘れんなよ？！」

さっきは俺一人だけ咎められてたというのに何だこの差は……。ゆっくりと皆で動き出す。風車小屋もあつてとても風情があつた。四人が言っていた通り休みたいのは分かるがこれは実習なのだ。

やっぱりこのメンバー、というかⅦ組全員に言えるのだがとても真面目だな。最初のだらけから一瞬で切り替えたのだから大したものだ。動き始めておよそ四十分程だろうか？ 件の灯りのところまで来て、交換を始めた時周りに魔獣が集まり始める。

「こっちは俺たちが対処する。そっち任せたぞ、ライン」

「分かつてる！」

「……ふむ、数が多いだけだな」

「うん！このくらいなら僕でも大丈夫だね」

ラウラがパキンパキンと魔獣たちの核が壊れる音を鳴らしながら軽々と話している。エリオットとアリサも上手く連携して対処しているようだ。ラウラの処理の仕方が容赦なさすぎて若干引いた。そうこうしているうちに魔獣たちが退いていく。ラインの手際の良さもさながらに、灯りのありがたみが身に染みるな。

その後農家の方に皇帝人参というものを分けてもらった。これも薬草の一種だと言うが変わった見た目だ…。それからちよつと先のルナリア自然公園というところに向かったのだが…

「ん？…なんだ？お前ら」

「ここになんか用かい？」

「え、えつと…？」

「その、たまたま通りがかっただけなんですけど」

「ふむそなたたちこそどういった者たちなのだ？」

「俺たちは、あー…、管理人だ。今は通行止めでな。分かったら帰った帰った」

「どうする？ライン」

「…：…はい、今はこちらにも用事は無いので帰ります。お仕事頑張ってください」

…：…どうやらこのまま離脱することを選んだようだ。実際このまま居座っても意味は

あるまい。

「ん？お、おう！お前たちは…見た感じ学生だな？頑張れよ！じゃあな！」

「どう思う？」

「正直、違和感は拭えなかつたけど…多分あのまま聞いても通行止めで押し通されるだろう。今は大人しくケルディックに戻ろう」

「…そうだな」

そうして昼の一時頃にはケルディックに戻れた。大市で残りの薬草を確保し各自大市で気になったものを購入し、教会に薬草を渡してから一度宿に戻る。昼食を取り終えた頃には二時半になっていた。

食後休憩を取ってから東ケルディック街道に出て手配魔獣の相手をしに行く。

「…うわあ。凄い、狂暴そうだね…」

「うーん…なんか、緊張するわね」

「やるしかなかろう」

「心強えなあ…俺はガントレット^コだけだから近くて怖いんだけどねえ…」

「…VII組A班、構えろ！これより手配魔獣との戦闘を開始する！」

『応ッ！』

戦闘はつつがなく進んだ。皆の戦意を高揚させ続けるラインに、気弱さとは裏腹に探索のおかげか補助慣れしているエリオット。二人を中心にどんどんと追い詰めていく。

それよりも…さつきからラウラが戦いに集中出来ていない。ちらちらとラインのことを気にしている。なんだ…？戦いながらだから難しいものの、俺もラインに少し気を配る。…？マジで何なんだ？一瞬ラウラの眼が鋭くなっただけ、よく分からない。かなり追い詰めたし、そろそろ終わりだ。

「キメるぞ、ライン！」

「ああー！」

戦術リンクを接続させる。全力で、下から持ち上げるように…！

「崩すッ！」

——つ？

「…紅葉切りッ！」

ラウラの眼が鋭い。今のは俺でも、いや俺の方が明確にわかった。トドメを刺す直前、ラインから伝わってきたイメージは紅葉切りとは全く別物だった。居合の構えから切り抜けるようなものじゃなくて、重心を低く前に偏らせ右腕と右脚を後ろに引いた状態から突撃、凄まじい速度で斬り抜けるものだ。しかし直前でそのイメージは掻き消え、実際足に籠っていた力がふつと抜けた。これは…出来るのにしないのか、したいけ

ど何かあるのか。それとも別の何かなのか。

ラウラが少しピリッしていることもあり、あまり話すことも無く早めにケルディックに戻ってきた。夕方のケルディックは少しざわついていて、騒ぎの元の大市に向かうと二人の男性が取っ組みあつていたので、俺とラインで急いで止めに入る。元締めが鎮めてくれたあと俺たちはオットー元締めの家にお邪魔して、今ケルディックで何が起きているのかを教えてもらった。アルバレア家からの圧力、領邦軍の怠慢や不手際：俺たちは聞いた話を胸の内でもややもやさせつつ宿に戻った。

リポートを書き終え夕食を取り終えた後、気づけばどうしてツールズに入ったのかという話になっていた。アリスは自立、ラウラは憧れの人に追いつくため、エリオットは希望とは違ったが仕方なく、ラインは自分探し。俺は——

「俺も大体はラインと一緒に。自分でここを見つけたか、誰かに勧められたかの違いくらいだよ」

本当は辞める予定だったが、しかも嘘だけど。自分の産まれてからの十一年間を知りたい、なんて言ったらせつかく休んでるのに面倒くさいことになりそうだしな。それから少し雑談をし満足したのか部屋に戻っていく。その時だ、俺とラインが呼び止められたのは。

「ライン、どうしてそなたは本気を出さないのだ？そなたの剣は八葉一刀流なのだろう

？リインの力はそんなものでは無いはずだ。それにジェイルも。そなたは確かに力は全力なのだろうがその余裕を余しているところを見るに、まだいけるはずなのに、なぜ……」

「誤解させていたならすまない。確かに俺は《劍仙》に直接指南を受けていた時もあった。だけど劍の才能の限界を見限られた身。所詮ただの初伝どまりだ」

「……………そうか。ジェイルは？」

「ハハ、いつもヒリついているなんて疲れちゃうだろう？余裕はあるだけいいんだよ」

「……………はあ…、良き鍛錬仲間が、できると思っていたのだが…。少し外で劍を振ってくる。戻る時間は気にするな」

「レポート書けよ〜」

「……………ああ」

子どもというかなんというか、ラウラはとても真っ直ぐな子なんだな。勝手に自分で期待して応えてくれないから拗ねる。見る目があるせいかな相手に、自分の期待に比べられるだけの實力があることを見抜いてしまう。

だけドラウラ、コレは真つ当に生きてきた奴が突っ込んでいい問題じゃない。

———
だって、自分探しをあんな真剣に、覚悟した顔で言う奴が普通なわけが無い。くさすぎたか？なんて言葉を、照れ隠しではなく誤魔化すために使う奴が何も

抱えてないはずがないんだ。コイツは、何かに振り回されながらここに辿り着いた。俺と違って、道を指し示してくれる人がいなかったのなら、同類として、ちゃんと手助けしないと。

「リイン、レポート書き終わってるか？」

「…ん。さつきお前がやってた時に済ませたよ」

—— さて、藪をつついて蛇を出なきやいいが
「刀持ってこいよ。—— ちょっと、お話しようか」

当然だが、鬼が出てくるなんてことはこの時の俺は想定していなかった。

ケルデイツク2

昼間、手配魔獣と戦ったあの高台まで来た。二人並んで丘に腰をかけ足をブラつかせる。

「……………」

「……………」

「ラウラにああ言われて、どう思った？」

「……………」

「こういうのは、会って間も無いうちに話しとくもんだぞ。仲良くなればなるほど、相手に心配させてしまわないか、相手に気を使わせてしまわないかってなって話せなくなるんだ」

「…それはジェイルの話か？」

「いや、一般論。初対面の人に悩みごとを相談しやすいってのと一緒だよ」

なんととはなしに話してみると進める。別に真面目なことなんて何も無い。とても気

楽な感じで。

「そっか。…本当、言う通りだなって思ったよ。それと同時に、とても自分が情けなく思った。八葉の名を受けて置きながら、その実名前に背負う実力を持ち得ていないことが悔しい。ジェイルは？」

「俺はその場で言った通りさ。強いていえば、本当に余裕がなくなった時の手段を持つてるってことだけ言ってるかな」

「…それって？」

「それは秘密。奥の手はバラしたら意味ないだろ？」

「そっか」

同じ嫌味を言われた仲だろうか？そうやって笑いかけるようにちよつとした冗談を交えてみる。

決して深入りはしない。俺はただリインが自分から話すのを待つだけ。これは俺がこじ開けても意味は無いんだ。だってそれはリイン自身の問題だから、俺と同じように。

「俺——急に髪の毛と瞳の色を変える手品ができるんだ。…って言ったらどうする？」

「とても驚く」

「…………じゃあそれだけじゃなくて、敵も味方も、大切な人さえ見境なく傷つけてしまうくらい狂暴になるって言ったら？」

「……………分からない。俺はそれを知らないから。———だけど、ラインがそれを気にしてることは分かる」

「…………ああ。確かに気にしてる。俺はこれの制御が出来ない。師匠にもこれが理由で修行を打ち切られたんだと思う」

「それ、どれくらいヤバいんだ？」

「…えと、小さい頃に出会った二回りくらい大きいクマ型の魔獣を一方的に殺せるくらいっ。」

「……………ふう」

結構ビビった。はつきり言って、ラインと俺ではそここの実力差がある、と思ってる。だけど俺でも、自分よりそれだけ大きい敵を相手取るなら、眼を使わないことにはそう軽々とは行かないだろう。

だというのに、聞いている限りではラインが嘘をついてるように思えなかった。つまり、色が変わるのも二回りくらいでかいやつを殺したのも、誰彼構わず傷つけてしまうことも、本当のことなんだ。

「俺は修行を打ち切られて、一人がむしやらに正しいのかも分からないまま鍛錬するよ

り、ここを離れて誰かの指導の元で努力した方がいいと思っただ。だからツールズに入っただ。

——嘘だ。

「本当に？」

「……………」

「ここまで来たんだ。付き合わせてくれよ」

「分かった。嘘だよ——俺は、養子なんだ。ユミルの裏手の雪山で捨てられてるところを拾ってもらって、とても良くしてもらっていた。それなのに俺はこんな得体の知れないものを抱えて……ここまで良くしてもらったのに、いつ俺が害を成すかも分からないのがとても怖かった。ユミルを離れて、名門の学校に入れば、安心してもらえるかもって。」

——本当は、ただあの人たちから嫌われるのが怖くて逃げただけなのに」

吐き出すように。雪崩のように絶え間なく出てくる身の上話と弱りきった声はチクチクと心に突き刺さる。コイツはこんなにも向き合ってるのに。俺はまだ逃げ続けて逃げ続けている身でまだコイツを追い詰めるのか。

——そうだと。

「……リイン、話してくれてありがとう。この際だからさ、見せてくれよ、それ。——

——最後まで付き合う」

「!?駄目だ!これはそんな気軽に振りかざしていい力じゃない!」

「俺が自分に怯えてるやつに負けるわけないだろ。来い、やるぞ」

「ッ!!!」

座ったまま顔を向ける。何が負けるわけないだろ、だ。怯えるどころか目も向けないようにしてる奴が偉そうに。だけど、教えてやるんだ。お前が思ってるよりも人は強くて優しいんだって。たまたま力を持ってしまっただけのお人好しが、周りを傷つけることを恐れて大切な人から離れるなんてそんな悲しいの駄目だろ。

ラインが立ち上がり二、三步引いて抜刀する。臨戦態勢に入った。俺も立ち上がってガントレットを取り付ける。

「悪いけど、お前が嫌がっても引きずり出す。お前に理解^{わか}らせてやる。頼れるヤツは身近にいるんだって。お前を受け入れてくれる人は沢山いるんだって」

「ッ!」

月下に金属がぶつかり合う甲高い音が鳴り響いた。

少し前の宿

「……あ……、おかえり」

部屋に戻った時、居たのはアリサとエリオットだけだった。

「……………うん、ただいまだ。……………リインとジエイルは？」

「話をしようって、出ていっっちゃった…」

「どっちに行っただ…？」

「うん、えっと東側の街道に出たところまでは見たよ。でも追ってる時は武器を持ってなかつたから……そこまでしか分かんないかな」

「そう、か。ありがとう。アリサ、エリオットも」

「ちよ、ちよつと待って！どこ行くの？」

「……………様子を見に行くだけだ。すぐ戻る」

「……………はあ、後でレポートは見せてあげるから。気をつけてね」

「うっ……その、助かる」

「そうだ、レポートまだ書いていなかったな……。——あの時、リインは辛そうな顔をしていた。私はあの時、自分がしてしまったことから逃げたんだ。彼らが二人で居てくれるならちようどいい。謝らないと。ただ、私が気に入らないというだけでしてしまつた八つ当たりを。」

走つて走つて走つて走つて。二人が空を見上げながら話しているのが見えた。昼間
のあそこだ。急いで坂を駆け上がる。

「ふた——」

——ギインツ——

突然鳴つた音に、思わず木に隠れてしまつた。

「グツ、シツ！」

「オラアツ！フツ！これでも！見せるのには！足りないか！」

昼間の手配魔獣を墮とした時と同じ、全力で最速の拳を打つける。この程度のカリヤ足りないか？と、このまま刀で受け止めていいのか？と呼びかけるように強引に。ま

だ遅いか?と、いつまで受け止めていられるんだ?と言わんばかりに執拗に。

「クッ!」

納刀して、右脚を軽く引く。あれを俺は知っている。知っているなら対処出来ない道理はない。

「紅葉切」

「遅い」

突進に合わせて右腕を振り抜く。直前で何とか体制を変え、俺の脇を転がっていく。受身を取り勢いを利用して立ち上がるが、体力の消耗は激しそうだ。

「さて、そろそろギアは上がってきたか?」

「はあ……はあ……う、グ、けほっ……はあ……」

「いくぞ。このまま打ち砕く」

「けほっ————いや、っ、分かった、見せる、から。でも……制御は、出来ない……いざとなったら、逃げ」

「馬鹿、相手できるのを証明するための戦いなんだ。逃げるわけないだろ。全部、止めてやる」

「ふうー………、分かった。いくぞ。どうなっても知らないからな」

「……………」

ラインが胸のあたりを抑えて蹲るような姿勢になる。途端に空気が変わった。「ぐ、ウウ、う、うおおおおおアアアアア！」

——これは、軽口過ぎたか？

空気がビリビリと軋む。ラインの髪色が白く、眼が紅く染まる。赤黒い稲光が彼の周りを駆ける。その全てがその力の異常性を示していた。

「シャアアアア!!」

さっきまで打ち合っていた相手はどこに行っただろうか。さっきまで俺の全力に押されていたのはどこへやら今はむしろ刀を片手で振り回し俺と同等以上の力をぶつけてくる。

——このまま押し負け？冗談。全部を出し切っていないのはこっちも同じだ。

右腕で攻撃を全て相殺する。相殺できるレベルまでギアを上げるだけだ。そして、相殺した上でライン以上の速度で右腕を振り防御と攻撃を両立させる。だけど、やはりと言うべきか当然ラインもその程度の追撃は簡単に避ける。

……………いややっぱ無理だこれ。このままやってもスタミナ切れするの俺だわ。あつちは謎の力でブースト、こっちは生身。同じ速度で戦えば厳しくなるのはそりゃこっちだもの。一度一步引いて仕切り直す。

やることは簡単。クロスカウンターだ。この速度はまだ着いて行ける。そしてこの速度に合わせれば、さつき紅葉切りに合わせたカウンター以上の威力は出るだろう。

「……オオオオ」

——あの構えは紅葉—!?

「オラアツ!」

ガイインツ!

今のが本当にさつきの紅葉切り…!?二倍か三倍は速度あるぞ…何とか刃とガントレットがぶつかったおかげで弾けたけど……ツ!また来る!

「二回も見せんア!」

捉えた。さすがに二回目はない。顎の下あたりを何とか掠めながら振り抜く。やっぱりその状態でも脳震盪は起きるんだな。いやあれよろけてるだけか、凄まじいな。

……………つ…?あの構えツ!

——姿勢を低くして刀と脚を後ろに下げるあの突撃体制。あれはリンクで見た—

「シャアツ!」

ラインが見せてくれたんだ、俺も見せてやらないと。眼鏡を少し下にズラす。こつち

に接近してくる技の線を左手で振り抜く。急に突進の勢いが死に、体制を崩したりインの顔を掴んで地面に叩きつける。

「ゴツ！グツ！ウウ……あ………」

「ふう……つ、ふう……はあ………こりやすげえや」

「………驚いたよ。まさか、こんなにあつさり止められるなんて思わなかった。これならお前という時は安心して全力で戦えるかな」

「無理無理、舐めてたよ。こんなの頻繁に出されたら俺死んじやう」

「バカ、こんなの頻繁に出せるわけないだろ。ジェイルが早く止めてくれたからいいけど、師匠に引つ張り出されて使い切らされた時は二日間動けなかったんだから。こうやって身体があまり痛くなくて、動く体力が残ってるなんて初めてだよ」

「そりやよかった。ま、やって見た感じ、止めれるのは今のうちだけだな。お前がもう少しして地力を身につければ、その時はもう二人ぶつ倒れるまで闘うしかねえな」

「いや、十分だ。止めてくれる人がいる、それが分かっただけでいい」

「教官多分余裕で俺より強いし、当分は巻き込んで見るのも手かもな？」

力が抜けて、その場で仰向けになり空を見上げながら話し続ける。勝手に教官を引き合いに出して笑い合う。少しずつ、落ち着きを取り戻し始める。

「ふう………」

「……………なあ、ジェイル」

「んー？」

「最後のアレは、何なんだ？」

「……最初の方に話した奥の手だ」

「…アレがジェイルの抱えてるものなのか？」

「ああ、その通りだ」

「どうしてここまでしてくれたんだ？」

「羨ましかったんだ」

「羨ましい？」

「俺もな。コイツのことをよく分かってないんだ。でも俺は、それを他人から貰ったもので隠して、隠した上で目を逸らして。知ろうともしなかったし、どうにかしようともしなかった。別に道具で抑えられる、ちゃんと使えば有用なもの、そう言い聞かせて。間違いなくとち狂った何かなのは分かっていたのに。だから自分とその得体の知れない何かに振り回されながらも真っ直ぐ向き合おうとしているお前が、とても眩しく見えた」

「…それは、俺たちに頼れないものなのか？」

眼を誰かに頼る？——考えもしなかったな、そんなこと。

「まだ、俺自身こいつと一度も向き合っていないんだ。頼るのはその後さ」

「そっか」

——これはただのおまじない。そんなに深く考えることはないわ。もう意味なんて無くなっちゃったもの。

こうやって語りかけてくれたのは誰だっただろうか。顔も声も、何も思い出せないけど、言葉だけが思い浮かぶ。

「——なありイン。ゆっくり深呼吸してみてください」
「ん？あぁ」

「少しずつ、自分を消していくんだ」

「風を感じて、草の揺れをこの身に受けて。ゆっくり自分を世界な溶かすんだ」

「全部溶かして、最後に残ったのがお前だ。お前の根底に眠るものは変わらないだろう。またいつかお前に支えが欲しくなった時、きっと助けになるよ」

「——ああ」

とても穏やかなジェイルの声を少しだけ怖いと思った。でも、言う通りにしていくうちに、とても思考はクリアになっていた。自分に向き合う。遠くで見える紅い、ゆらゆらと燃え盛る焰。この胸に熱く灯るこの焰を、ずっと抱きしめていたかった。

——ジェイル、お前には何が残ったんだ？

「そろそろ戻ろうか。もう時計も頂点を回る頃だ」

ガサツ！

「あつ……！」

『誰だ!?!』

二人は急いで振り返った。その時たなびく青い尻尾のようなものが一瞬だけ見えた。丘の方に行つて下を覗いてみると、人が駆けていく姿が見て取れた。

「……ククツ……ふつ、くつ……」 「ふつ、フフ、ハハハッ」

「……戻ろう、ジェイル」

「ああ、遅くなってごめんなさい、つてしないとな」

———こうして夜が更けていく。彼らの帰路を穏やかな月明かりが照らしていた。

俺たちが宿に戻った時には、一階は酒の匂いでいっぱいだった。それもそうだ、もう夜中の十二時半。ここにいるのは酒呑みの大人だけ。足早に部屋に戻ると、アリサとエリオットは布団に入っておりラウラは机で灯りを灯しレポートを書いていた。

「お、おかえり、だ…」

思わずリインと笑い合う。これは我慢する方が無理だ。ラウラはこつちに目を合わせようとしない。だけど…灯りで照らされたラウラの顔には汗で張り付いた髪の毛。レポートも全く進んでいない。エリオットとアリサもきつとさつき入ったばかりなん

だろう、モゾモゾして落ち着きがない。

「覗きは感心しないな？」

「!!!」

「あー、まあ、その…見たのは胸の内に秘めておいてくれると助かる」

「そ、その、なんの、コトだか…」

「そりや言えねえよなあ？俺とリインが熱いキスをしてたなんて」

ガタツ　ギシ…

ほらやつぱり起きてるよこれ。

「そんなのではなかったであろう!？」

「はは、嘘だよ。レポートも大事だけど、遅くまでやってると明日に響くからな。程々に

しとけよ？俺は寝る。お前ら四人も早く寝ろよ」

「…あはは。その、ラウラが見たものについては俺はまだ言う決心がつかないから待っててくれ。それと、剣の道を軽視するようなことを言っただけ悪かった。俺にとって――」

――

「いや私の方こそ――」

あの調子なら大丈夫だろう。俺も夜更かしは慣れてないから、そろそろ寝ないとな。

――　ねえ、ジエイル

「もう諦めたんだな、エリオット」

「うん。……ありがとね、ラインのこと。僕だって気づかなかった訳じゃないんだ。ラインに何かあるんだって。でも僕に何が出来るんだろう？って思ったら動けなくて。だからありがとう」

「フフ、ラインじゃなくてお前が感謝するなんて不思議なやつだな。……それでいいんだよ。本当は触れない方が良かったかもしれない。だから、エリオットの選択だって正解だ。俺も正しいかは分からない。ただ、お節介を焼いただけ。さ、寝ようぜ」

「——私だって心配したんだからね。二人のこと」

「それは明日ラインに直接言つてやれよ」

「なんで聞いているのよ！」

—— はあ…、こっちは済んだぞ。三人とも、寝ないのか？

—— 寝るわよ！

—— うるさいぞ、アリサ

—— そうだな、もう少し静かにしてくれと助かるのだが

—— 誰のせいでこんな時間まで起きてると思つて…ああもう！

明日の朝、皆がふらつきながら食卓の席に着いたのは言うまでもない。

ケルディック3

実習二日目の朝、全員が朝食を食べ終えうつらうつらと頭を揺らしていた時、突如静寂を破る者が現れた。

「じ、事件です！マゴツトさん、大変なんです!!」

「来るのが遅いよルイセ。早く手伝っておくれ」

「ごめんなさい…でも大市がつっ!」

必死なルイセの声を聞いた時頭をよぎったのは昨日の騒ぎ。全員と軽く目配せをしてからリインが先導し大市に到着すると昨日とは比べ物にならないほど空気が張り詰めていた。怒鳴り合う二人の商人、二人を止めようと声をかけるも聞いてくれる気配がなかったただ困った表情を浮かべる元締め、その後ろにはぐちやぐちに破壊されたハイソツの屋台。少し目を右にずらすだけでももうひとつ、同様に破壊されたマルコの屋台も見てとれた。

二人の興奮が頂点まで到達しようとし殴り合いが始まりそうになったため、俺とリインが後ろに周り羽交い締めにして何とか抑えた。

「落ち着いてくださいマルコさん…これじゃあ話すものも話せません!」

「アンタもおっさん！自分がやべえっていうのがまだ分かんねえのか!」

どれだけ強く抑えても二人はじたばたと暴れるばかりだ。どうしようか困っていた時、辺りの喧騒を止めるには十分なほどの大きな笛の音がした。

「ええいこんな早朝からなんの騒ぎだ！何が起きたか説明しろ！」

「う、うむ…それがですな——」

騒ぎを聞き止めた領邦軍がオットーからの説明を聞いた後、隊長は信じられないことを口にした。二人を引つ立てる。意味が分からない、どういうことだ？二人が同時にお互いに屋台を破壊した？そんなわけが無い！しかし、そんな異議は通らず、先程の言い分を盾に強引に騒ぎを終わらせた。

俺たちはそれぞれふたつに別れ、それぞれの言い分を聞いた。

「ハインツさん、何があった」

「何があった!?!見て分からないのか！私の商品が消え、屋台は崩壊！もう終わりだ…何もかも！」

「落ち着け。状況が悪いのはおっさんの方なんだ。もう少し落ち着いて考えないと」

「なぜ私の方が悪いというのだ…どう見たってヤツのせいだ！自分の商品を隠し、私の商品を盗む。そして両方の屋台を壊す。これで犯行は成立だ！」

「それはおっさんにも言えるだろ…もつと冷静になれ。アンタの屋台の方が手前にある

んだ。あのマルコって人が先におっさんの屋台を壊したなら、アンタがマルコさんの屋台を破壊するよりも先に気づく。あんな高級な商品が沢山無くなったんだ、真夜中だろうが時間を問わず騒ぐだろうよ」

「だ、だが……！」

「アンタが先に屋台を破壊すれば、おっさんの屋台を破壊することに意識を割いたマルコさんは壊れた自分の屋台に気づかず無心でおっさんの屋台を破壊した。これで辻褄が合う」

「そんなのは辻褄合わせだ！ 領邦軍と同じじゃないか！」

「じゃあ分かれよ。これでもこじつけにしてはマシな方なんだ。それでもおかしいってんなら直ぐに他の誰かって分かるだろうが」

「あつ……うう……私の商品……」

「それが無事かは分からん。だけど俺たちが何とかする。待つてくれ」

「君たちは学生だろう？ 何をどう信じれば」

「いいから！——信じろ」

強引に抑え込んだジェイルたちは向こうでマルコと話していたリン、アリサ、エリオットと合流した。

「こっちはマルコさんは何とか落ち着いてくれて……でも全然事情は聞けなかった。そっ

ちはどうだった？」

「こつちもだいたい一緒だ。あでも解決するって言っちゃったわ…ま、いけるでしょ」

「アンタ何言ってるの!?!」

「でも目安は着いてるだろ」

アリサがキレながら当たってくるが、当然かのように返せば困惑したような顔をすする。マジイ？見てみればラウラもハテナを浮かべている。

「…そういえばさつきも言っていたが…本当はどうなのだ？」

「ん。まあ本人たちは別として、関係があるのは間違いないと思う」

「それって何なのよ!」

「本当に分かんねえのかあ？あんなキレてくんのにい？えええ？…分かったすまん言うから!…おそらく関係してるのは」

「…領邦軍」

エリオットが静かに、ただし力強く答えた。リインも頷いていた。アリサも言われてみればという顔をしていたが、ラウラはただ一人驚いた顔をしていた。そのままエリオットは続ける。

「…冷静になつて考えてみればおかしかったんだ。だって昨日の夕方騒いだのに一度も出てこなかった。でも…今日は違った。朝僕達が宿でルイセさんから聞いてすぐこつ

ちに来たんだ。騒ぎになってそんなに時間は経ってない…なのにこんなにすぐに来たんだよ。明らかに…知ってたとしか思えない」

「そんな…領邦軍だぞ…？その地を治める貴族から派遣された軍がそんなこと——！」

「昨日聞いただろ、アルブレアからの圧力。搾り取るためなら大体のことは許されてるんだろうさ。それこそその貴族から派遣されているんだから」

「だけど…父上は…」

「ラウラの父さんが珍しいだけだ。全ての貴族が搾取するとは言わないが、一定数いるだろうな。大きなところこそ沢山搾り取れるから起きて然るべきなんだ」

ラウラが驚愕、というか困惑している。父親という善き貴族の鑑が居て、それを見て育ってきた。世間を知らない真面目で真っ直ぐな女の子っていうのは大変だな。

「ラウラ、信じられないことを愚直に受け止めようとしたって疲れちゃうだろ？こういうのは話半分に聞き流してればいいんだよ、余裕を持って」

「だけど現に被害者が出ている！」

「いいから」

…すまない、そう言ってしゅんとしながら落ち着きを取り戻したラウラを脇目に今後の方針を立てる。

まず最初に依頼の処理。当たり前だ。今回は偶然起きてしまった事故、本来の依頼はあつて然るべきだ。幸い今日出ている依頼は少ない。さつきとこなして次に移ろう。

第二に事件の調査。当然こっちは遭遇してしまっただけで対処するどころか首を突つ込む必要なんてない。けどこのまま終わるなんて夢見が悪いだろう。だから俺たちは自分を全うした上で犯人を突き止めてやる。

一つ目は財布の落とし主の搜索。五人が手分けしてケルディック中を当たったのだ。間もなくして落とした人は教会で見つかった。確かに旅行者ならば財布は命だろう。なぜだかまた会う予感がした……予感だけで済めばいいのだが。二つ目の手配魔獣は一瞬だった。戦闘時間でいえば二十分もなかっただろう。昨日相手にした魔獣より僅かに強かったものの、昨日を通じて得た戦術リンクの経験に比べれば誤差たるものだった。オットー元締め討伐報告を行って午前十時半、追加の依頼も無いためこれだけでよく本格的に動ける。

昼の十一時半、早めのランチを取り終え、大市での聞き取りは朝の段階で終わらせていたため直接領邦軍の詰所に向かう。アリサやラウラに任せるのは心配、リインやエリオットは押しが弱い。やるのは俺しかねえ！行くぞ！

「む、お前たちは昨日のトールズの生徒か」

「お忙しい中申し訳ありません。今朝の手腕、素晴らしいものでした。将来軍属を志す

ものとして、是非隊長でおられる方にお話をお聞かせ願いたいのですが」

「…フン、まあいい。取り次いでやるから待っている。………それと貴様、そうおだててどうにかなるものだとは思うなよ。これは手ごころというものだ」

「う、」

「はあ…」

「これならリインに任せた方が良かったんじゃないかな？」

「よくもまあそんな心にもないこと言えるわね」

「………」

皆からの言葉が突き刺さる。馬鹿野郎バカ正直に行けば失敗してたかもしれないだろ！つまりこれは俺の手柄だ、なんて調子のいいことは言えない。実際露骨だし。リインの愛想の良さに任せてしまえば良かったかもしれない。少しして、先程の兵士とは違う少し派手な装いの者が出てくる。いくつか質問を重ねるものらしくらりと躲されてしまった。

「もういいか？お前たち学生の戯言に付き合っている暇はないのだが」

「じゃ、じゃあ最後にいいですか…？」

「なんだ、言ってみろ」

「被害者になられたマルコさんの食品ですが、なぜ生鮮食品が盗難されたのか分かりま

すか？」

「む…？盗まれたのは加工食品のはずだが…」

「…ふーん」

「な、なんだその目は？」

「あ、俺からも一つ——その足元の泥の在り処、俺たちは分かっているからな」

「うーん気持ちいい！やっぱり偉そうにしてる奴が呆然とする様を見るのは最高だな
！」

「それにしても、よく靴に目をつけたな。俺は隊長と対峙することに集中してて気づかなかったんだが」

「午前に西ケルディック街道に手配魔獣を殺りに行っただろ？その時たまたま昨日には無かった轍を見つけたんだ。まあそれには何も無かつただけだ。問題は手配魔獣の向こうからずっと続いてきていたケルディックに向かつて歩く乾いた泥の足跡」

「そういえば…それに領邦軍の詰所を超えた先には泥の足跡は無かつた。ここまで歩いたせいなのか減ってはいたけど…確かにここの土とは違うそれが道中に見られた。で

もどうして領邦軍はそこに…?」

「分からない。でもこれ以上ここでヒントを見つけれないなら、街道に出るしかないだろ」

新たな指針が決まった。正午、俺たちはこの事件を終わらせるといふ決意を胸に西口を出ようとした時、異常なほど、それこそ昨日の深夜の風見鶏の匂いを優に超える酒の匂いを感知した。目を向ければそこにはアホほど瓶を開け、死ぬほど酔ったおじさんが。

「さ、酒臭っ!」

「うおきつつつ…お、おいおい、おっちゃんどーした?」

「んああ? なんだ? かなしいかなしいおじさんの話を聞いてくれんのか?」

「どうしたんですか? こんな昼間から…」

「それがよお、十数年めちやくちや真面目にやってきたしごとをクビにされたんだよお! くっつそ〜!」

「…御仁、そなたは何の仕事をしていたのだ?」

「おお嬢ちゃん、お目が高い! 俺は自然公園のかんにんさあ〜! あそのきようぼうな魔獣は、おれがひっしにてなづけたんだぞ? おらあ凄腕の調教師だ! おれがいなくなる意味がわかってるのかあ?」

何となく読めてきた。皆が確信を持った目を向け合う。

「それなのによお……あんなチャラチャラしたガキみてえなやつらにこの仕事取られちまったよ……俺はこの宝石を元手に一山当てるぜえ！」

「！お、おじさん、その宝石どこで拾ったの？」

「ああ？これはなああけがたに新しい管理人が押してただいしやから落ちたもんなんだ。女神さまも俺をみすてちやあおらんかったのよ！それで安心して寝ようと思ったのに兵隊さまは出たり入ったりでベチャベチャうるさくてねれやしねえ！もうやけどやけ！酒持つてこーい！」

おっちゃん全部言いやがった……でもこれで全部繋がった。最初からこのおじさんに聞いとけばよかったとも思ったが、それでも酒呑みの妄言と切り捨てるかそうじゃないかの差はあっただろう。そうして何となくもつと早く済んだじやないかというもやもやを嚙下する。

要するにこうだ。新しい管理人はアルバレアの息がかかった者たち。潜伏先として利用する予定だったものの中の魔獣が手強かったため、領邦軍の手を借りた。自然公園から帰投する領邦軍たちの足には泥が着いたままだった。

「思い返してみれば、昨日は西側の街道で行ける場所ほぼ全てを回ったはずだ。その中で泥濘んだ道は見受けられなかった」

「決まりね。行きましよう、ルナリア自然公園、その奥地に」

「二人の商品を取り戻すんだ…絶対！」

「…そして、彼らに罰を。こんな非道を見過ごす訳には行かない…！」

俺たちは自然公園に到着した。リインの見事な居合で音を立てずに内部に侵入することが出来たA班は、鬱屈とした、だけどどこか神秘的な内部の景色に息を呑んだ。

「行こう。轍も薄くだが見られる。この先に必ず…」

「ね、ねえリイン。これ私の見間違え、じゃあないわよね…？」

アリサが見つけたのはニアージュ程はあるであろう巨大な足跡。俺たちはその巨大な足の持ち主に怯えながら最奥の手前まで来た。道ほどで出会ったゴーディオツサーと言われる角が生えた大型の魔獣もあれほどの足は持っていないかった。

最奥に突入し、木箱と駄弁る偽の管理人たちに奇襲をしかけ、程なくして拘束し終わった。当たり前だ。いくら対人戦の経験が少ないとはいえこちらはこの二日間だけで手配魔獣を二件対処している。素人が握る導力銃など恐るるに足らなかつた。

「お前ら！こんなことして絶対後悔するからな！」

「私たちにそなたたちを罰する権利はない。だが、これが明るみになれば困るのは、それもまたそなたたちだ。…この木箱たちは本来あるべき場所に戻させてもらおう」

「グッ！数が多いッ！ゴードイオツサーが数匹いるだけでも手間取るというのに……！」
 「こいつら群れかよ……っ！アリサ、エリオット！補助任せたぞ！」

アリサの弓による敵の行動の妨害、エリオットの弱点解明や回復、リインとジェイルによる速度を活かした遊撃に圧倒的な脅力を利用した攻め。バランスの良い確かな連携が取り巻きのゴードイオツサーを減らしていく。

「……すまない！皆、十秒だ！十秒俺にくれ！全てをひっくり返す……今全てを出し切る！」

『応ッ！』

リインの言葉を信じて前衛後衛問わず、リインを護るように前に出る。

「こつちよー！って、フランベルジュ！」

アリサが気を引き、

「オラア！どこ見てんだド低脳ッ！」

ジェイルが殴り飛ばす。

「皆頑張つて！エコーズビート！」

エリオットの心強い援護が、前衛ラウラを前に押し出す。

「すまないジェイル。やはり私は余裕を持つというのは無理だ。奴らを罰せぬというこ

とに腹が立って仕方がない。だから私は……この怒りを剣に乗せるッ！……オオオオオオッ！洗刃乱舞ッ！」

ラウラの渾身の技がゴードイオツサーの大半をなぎ払い、グルノージャへの道を生み出す。

「…開けたっ！行つてこい、リインッ！」

俺は皆を信じている。皆も俺を信じてくれている。だから、俺はそれに応えるんだ。

深呼吸をする。吸って、吐いて、少しずつ自分を消していく。この吹き荒れる戦いの風に身を任せて、泣くように揺れる草を感じて。この身を包む温かい、焔があつた。俺はこの焔を握り締める。温かな光は確かな熱に。この手を焦がす、熱い、熱い焔となる。

行つてこい、リインッ！

任せたわよ、リイン！

思い切り倒しちゃえ！

締めは任せたぞ、リーダー

俺はこの信頼に応える。そのための焔は、もとより俺の中にあつた。

「コオオオオオオオオオオ…！焔ノ太刀ッ！」

リインの一撃によってグルノージャヤが倒れ込む。ヤツの身体からはプスプスと煙が上がっており、リインが決めたあの攻撃が決定打になったのが明らかだった。

リインが右肩を抑えてしゃがみ込む。昨日変貌したリインの対峙した時でさえ見たことのない全身全霊の一撃。この時だけだったとしても、間違いないアレ鬼の力に並ぶ力を発揮したのだ。それ相応の対価が支払われたのだろう。

これで終わり。あの木箱を持ち、そこで腰を抜かした偽の管理人たちを連れて帰れば大団円、だというのに。

「っ…まただッ！ 笛の音が聞こえるんだよ！ おかしいよ…笛の音を聞いてるだけなのに、こんなに怖いなんてっ！ 絶対なにか——」

ズッ ドスンッ

「あ」

GYAaaaaaa

!!!!!!

だというのに。それを許してくれないのか、お前は。

ケルデイツク終

GYAaaaaaa

激昂。死を目の前にして、今再び!!!無理矢理起こされた身体に先程まで以上の力が流れる。張り詰めた全身の筋肉により、力だけでなく存在感すら増したように感じる。

「あ

「…はっ」

「エリオットツ！焔よ…ぐっううッ！」

「何で…？どうして…っ！」

立ち上がるグルノージャを目の前に全員の思考が止まる。エリオットに目掛けて振り下ろされるヤツの巨大な拳をどうかしようとし、ラインが動き出すも、刀に宿った焔が再度その身を焼く。痛みで腕に集めきることが出来なかつた焔は全身に迸る。刀を握る右腕は焦げて震え、ただ持っていることしか出来ない。振り上げることで肩に走る痛みにもはや耐えることは難しくなってきた。脚も熱に負け、ラインの技の要であるスピードは出せないどころか逃げるために立ち上がるのもやっただ。

誰も一歩も動けず、振り下ろされる拳は止まらない。エリオットの体軀であの拳を受ければ、骨折は免れないだろう。今まさに、あの拳は到達する。

いや、一人だけそれを良しとせず、そのうえで動けた者がいた。

エリオットにはただ剣を受け止めるために構える青い髪の少女だけが見えていた。

「ゴッツッ！」

「ラウラアアア！」

吹き飛ばされる少女を見ることしか出来ない。

「ラウラ！ラウラ！どうして僕なんかを……！まともに戦うことすら出来ないのに……！」

「何を言っている……そなたはこの班の要。そなたがいなければ、私たちは傷ついたままだ……そなたがいるから、私たちは身を投げ出せる……だから——」

「ラウラ……？ラウラ！」

他の者たちも即座に動き出す。アリスがラウラに駆けつけて応急処置を行う。ジェイルは次の標的に定められたリインの元へ。

「エリオット、落ち着いてツ……大丈夫……脈は落ち着いてる。頭も飛ばされた時の擦り傷だけ……大丈夫……大丈夫よ……！」

アリスはもう誰に言っているのか分からなかった。ただ持っている全てを使ってラウラの手当を行う。自分に言い聞かせるための、うわ言のような大丈夫は、囮らずしも

任せた。アリサ、予備でつけてるティアがあるだろ、やってくれ」

「何言ってるの!?!これ以上受けたらどうなるか分からないのよ!?!」

「早く」

「っ!!…もう嫌よ…っ!」

文句を言いながらもアーツを詠唱してくれる。ほんといい子だ。

俺たちは依頼を全てこなした。今俺たちに残った課題は、全員生きて帰ることただそれだけだ。それをこなすために犠牲が必要だと言うなら、一番元気で丈夫なやつがなればいい。幸いヤツは俺に意識を向けているし、俺は膝下まで地面に埋まってるから逃げるに逃げれないし丁度いい。

——来る

ズガンツ

——おっと

地面に沈み込む。腕が崩れ去る錯覚を感じる。感覚が無くなる前にアリサのティアが間に合い、何とか腕の形を保っていられた。

「もうやめて」

力強い声が聞こえた。——ああそうか、まだアリサとは戦術リンクを繋いだまま

だったから。

「あと何回受けるつもりなの？ 本当に何度でも受けるつもり？ 腕がもう持たないっていうのに？」

全部ダダ漏れ。不信感が少し、恐怖心が大半、心配がまあまあ。俺の思考がアリサに流れ込んでいるというのなら、それは俺も同じ。アリサの感情が全部聞こえる。そうか

—— ありがとう。

—— パキン ——

「えっなんで」

静かに音が響いた。アリサがただ焦っている声が聞こえる。なるほどこつちから切った場合はこんな感じなのか。

これが、アンバランスな片方からだけの極度の拒絶が感知された時に起きるリンク切断状態：これが起きた時は、どのARCUUSとも戦術リンクが一定時間接続が出来なくなるとか言ってたな。共同体における危険分子である可能性が何たらかんたら——

—— 今はいいか

来い。アリサはもう頼れない、つまり次のティアはない。俺の右腕は次で終わる。それでも。

GYAaaaaaa

!!!!!!

「来いクソゴリラ。人様舐めんな」

「うあああああああああああああああああ」

?

!!!!!!!!!!!!!!

「ゴツツ！うぶツツツツゲホツツ——ハアツハアツハアツハアツ——何

だ、案外生きてるじゃ、ないか」

「僕、戦えないから。ラウラに守られた意味が、今でもわかんないんだ。何言ってるか、あまり聞こえなかったし、はは……。だから、この班の中で、一番強いひとを、護るよ」

何だ、案外ちゃんと男してるじゃんか。そんなことは考えられるのに、身体は動かない。エリオットはもう一度立ち上がって、ふらふらしながら俺の前に立つ。拳が落ちてくる。

「僕一人満足に殺せないんだ。案外大した奴じゃないさ」

——フォン——

そなたの余裕とやらがどこから湧いてきて、どうして保っていられるのか全くわからん。だけど、そなたの背中はまだひたすらに温かかった。今は、任せておくことにしよう

う——

ふざけんな。絶対に許さないけど土下座したなら考えてあげるから、生き残りなさいよ。あれ、死ぬほど辛かったんだから――

絶対に護るんだ。僕の後ろにはラインとジェイルがいる。ラウラは目を覚ましたけどまだ動けないしアリサは突然動かなくなつた。僕達を守らせる為に彼らは消耗させられない。二人が動ければ絶対にどうにかなる。だから絶対に――

ジェイル、任せた。俺は、さっきの焔で、腕が焼けちやつたみたいだから。壁になることしか出来ないけど。でも、もう壁もいらないだろう？――信じてる――

「――えっ」

エリオットが気の抜けた声を出した。そりやそうか、護ろうとした奴に後ろから引つ張られたら驚くわな。

それより――ほんと何だこいつら。システムの壁超えんなよ。ラインフォルトとエプスタインの傑作だぞ？何でお前らは俺とリンク繋いでんだ。しかもここで突つ

立ってるだけのやつを信じると？

「すまん、エリオット。痛かったよな。もう、大丈夫だから」

ズルツ……

G A G u u u u u G Y a a a a a a
!!???

うるせえよ。右腕の拳が無くなっただけで騒々しい。

自分の生死が関わらない場面で、初めて自分の意思で眼鏡を外した。視界に黒が滲み出す。頭が痛み始めて足元が覚束無い。

何故か身体に馴染んでいたやり方で全てを零に戻す。深呼吸をし自分を消していつて、そして俺は少女の前にただ一人跪いていた。誰だろう。心当たりはないけれどこの姿勢が正しい気がした。

振るうのですか？これまで一度も見向きもしなかったくせに——

仰る通りだ。これからちゃんと見るよ。悪かったって。

半狂乱状態で血を垂れ流しながらも振り回してきた右腕を、左腕を振って落とす。覚悟もなしにその刃を振り回すというのですか——

——リインに見せた時だって覚悟はしてなかった。今更だよ。それに、俺

の代わりにエリオットがしてくれた。

振り下ろしてきた左腕を、拳諸共切り落とす。

もう貴方は終わりへの道を歩み始めました。もはや誰も止められない――

――その終わりが来るのは今日じゃない。なら何かしらの方法が見つかるさ。

G A A A A A A A A A A A A A A A A

!!!!!!!

終わって、果てで救われるといい。

「結^{ユイ}」

線をなぞって、線をなぞって、交差する場所が胸に見える点に重なるように。そして最後に点を貫いて殺し切る。

そしてグルノージャは消え去った。この世界にヤツが存在したことを証明できるのは、セピスとも呼べない色鮮やかな石だけだった。

グルノージャが消え去り静寂が帰ってきた時、A班の面々は慌ただしくしていた。気絶から意識を取り戻したラウラとアリサが怪我人の治療にあつちへこつちへ走り回っていた。リインは冷却スプレーと数少ないキュリアの薬を使い切り、自分で処置をした後ジエイルとエリオットの治療を手伝ったのだが…。

ジエイルは右腕部の内出血、及び骨折。まだ右肩甲骨、両脚部にヒビを抱え普通に重傷。エリオットはエリオットで肋骨二箇所骨折、左脚部にヒビと、ジエイルより軽いにしろ、間違いなく重傷だ。アーツによる骨の回復の補助は効果的ではあるものの、骨の強度を元のものに近づけるためあまり推奨はされていない。この様子だと完治させるのに、アーツを用量を守って活用しギリギリ一ヶ月を切れるくらい。アーツがないと思ふとゾツとする。

骨折者を運ばなければならない、しかし捕縛した犯人は連れて帰らないとならない。そうして困っていたリイン達に救いの手が差し伸べられた。

「三名は私と共に彼らの保護をしてください！二名で捕縛された者たちの事情聴取と再拘束を。残りの者たちで商品の確保。急いで！」

『Yes, ma'am!』

「あれは…鉄道憲兵隊だ…」

「知ってるのか？ エリオット」

「うん、あいてて…帝都を中心に鉄道を利用した治安活動をしてる、言葉通りの人達なんだ」

「大丈夫でしたか？ 何度も轟音が聞こえて…本当はもつと急ぎたかったのですが、装甲車でこちらに突入するのは危険だという判断をしたため遅れてしまい…申し訳ありません」

「あー…、話すのもそこそここつちも何とかしてくれます？ クレアさん」

「……………えっ」

「ん？」

教会の寝台を借りて治療をしてもらっている間、A班のメンバーはクレア大尉と話していた。

「それにしてもどうして鉄道憲兵隊がケルディックに居たんですか？」

「はい、昨日の深夜巡回の際に、私の部下がケルディックの東方面である程度の大きさの

音と黒い雷を見た、という報告があつたんです。新たな大型魔獣の可能性もあるため、予定を変更しケルディックに向かい到着したあと東側に出て調査したものの何の成果も得られず……」

「なあジェイル、もしかして……」

ラインが俺に声をかけるのはそれもそうだ。多分この黒い雷とか音とか……俺たちのやり合いよね……。謝らんと。

「クレアさん、東側の方は俺たちです。それ以上の調査は必要ないとお伝えください」

「えっ……後で何をしたか教えてもらいますからね……まあそれから街の方に戻って来たのですが、いつもと様子が違ったので調査したところこちらに行き着いた、という感じですよ。正直あまりに杜撰な計画に、強引過ぎる手段……呆れてしまいそうでしたが、四大名門にそれだけの力があるのも事実ですから」

「でも、彼らが領邦軍に繋がっていた割には、何も関わってこなかったわね」

「こちらに関しては大市で行った事情聴取を含めた調査書を領邦軍に提出させてもらい、こちらの介入の許可を取ったので……さすがに正式に取られた許可を無視してまで私たちの妨害をする気は起きなかつたのでしょうか」

ラインには俺たちの荷物を取りに行ってもらった。そんなに多くなかつたから時間はかからないと思うけど……

逆に鉄道憲兵隊がなんのアクションもしていなければ、俺たちの今は怪しいということだ。憲兵隊様々、感謝してもしきれないな。あ、サラ教官だ。

「アンタ達、無事!?!」

「無事だったらここで寝てないよ。あゝ痛てえなゝゝ!」

「あ、アハハ…ちよつと無茶しちゃいました…」

教官が顔を青くして驚いている。今回の実習、振り返つてみれば依頼の内容は協力すれば一切詰まる場所は無かった。おそらく初の実習ということで比較的安全な場所、危険度の低い依頼を選んだ。はずなのにこの大怪我、想定外過ぎたのだろう。

「おかえり、ありがとうリイン。さすがにこれじゃ取りに行けんくてな」

「丁度いいわ、ちよつとリイン何が起きたか説明————何その包帯!!アンタもな

の!?!」

「えつと…自分の技で焼いちやつて…」

「あーあ、知らね。」

帰りの列車で他の皆は疲れ切り、痛みを抱えた者だけ起きていた。サラ教官も何か言いたげにしていたがすぐに寝てしまった。

「ねえジエイル。腕は大丈夫なの？あの時はだらんとしてて危なそうに見えたんだけど…」

「正直ベアトリクス教官に見せないと分からないけど、多分肘から下はぐちゃぐちゃだと思う。肩や二の腕、足は痛いけど、こっちは何も感じないから」

「そっか…治るといいね。ううん、皆を守ってくれたんだもん。きつと治るよ」

「エリオットの方こそ。人生初の骨折なんだって？大丈夫、名誉の怪我っていうのは周りに言いふらす前に治るもんさ。すぐ治るよ」

「うん！」

少しして、貰った薬のおかげか痛みが和らいだことよってエリオットは眠りについてた。骨折の痛みも結構強いんだけどな。これもエリオットが持つ耐え忍ぶ強さというか。

「あつそういえば」

「どうしたんだ？ジエイル」

「お前らは普通じゃないことをしたんだ。後でARCCUSのマニュアル読み直しとけよ」

「えっ、あ、ああ」

後でレポートに書き足しておかないと。『ただし普通じゃないやつに限り、強引にリンクを繋ぐ可能性あり』。結局、レポートも真面目にやらざるを得なくなつたのか。ただのテストユーザーのつもりがイレギュラーを呼び起こしてしまったのはなんとも…。あの時奇跡と評された複数人でのリンクをまたもや成功させてしまったし、ううむ。

「なあ、ジエイル」

「ん？」

「ありがとな」

「ああ？あれは見捨てたら負けつてもんよ。気にすんな」

「そつちじゃなくて。俺の信頼に応えてくれてありがとう」

「…ハッ、お前だけじゃないけどな。そんな感謝をするんならあのとんでもねえ焔で自分が燃えないように頑張るんだな。そうすれば俺の負担はマシになるんだから」

「うっ…まさか自分で自分を焼くとは思ってなくて。あつあと最後に言いたいことがあつたんだ」

「俺からも、ひとつ壁を乗り越えたお前に」

『お疲れ様』

通つていく列車を眺める影が二つ。

「《C》、君の命令で初の笛の重ねがけを実行したよ。上手くいったのは次に生かせる成果だが……彼ら程度に念入りにする必要があったのかい？」

「フン……あの中にいた魔獣にトドメを刺した者はヤツに懇意にされているからな、念の為の力試しといったところだ。妙な力は見えたが、あの程度なら避けれる。大したこと無かつたな」

夕日を背にした彼らの影は、這い寄るかのように伸びていた。

—— 実習を終え数日。ガイウスなどの男子に支度を、食事を付き合つて貰える者に、座学をエマやラインに任せ切りひたすら楽をしていたジェルは今日もまたラインをこき使つていた。

「技術部……？ なんの用事があるんだ？」

「まあまあ」

「やあジェル君、頼まれていた物だよ。……おや？ 手伝いはラインくんだけかい？ 君は

運べないし…大丈夫？」

「大丈夫です！コイツ頑張るんで！」

「グツ…！重つ…俺だってまだ治ってないんだぞ!?おいジエイル！」

「ほら行くぞ〜」

俺の部屋に着く頃には肩で息をしていた。もはや俺に文句を言う体力も残ってないようだ。

「結局、これ、なんな、んだ…?」

「ただの鉄くず。ジャンクだよ」

そう言つてジエイルは自分の眼鏡を外して、腰に着けていたナイフを抜いた。中からジャンクを取り出してはゆっくりと奇妙なラインでナイフを動かすと、パキン…と音を立ててジャンクは割れた。

「それって…」

「お前も向き合おうし、俺も向き合おうつて言つたからな。こうやつて小さなもんでもいいから慣らして行こうと思つたんだ。幸い何で貰つたかは分からないけど、丁度いいナイフがあつたからな。こいつを手に慣らすついででもある」

「俺を止めたのや、あの魔獣にトドメを指したのと同じ…」

「そ。あれ、あの時は上手くいったけど、いつもは終わったあと頭が死ぬほど痛くて倒れ

ちまうんだ。実戦でそうなると困るからな」

これは覚悟だ。あの時皆に背中を押されて高揚し、思わず使ってしまった妥協違う。次こそはただ、自分だけの意志でコイツを使う、そう決めたんだ。

「———そっか。扱いきれるといいな」

「お前こそ。使う時は呼べよ、教官引つ張って相手してやる」

彼らは邁進の道を進み始めた。いつか迎える終わりへ近づいていることに、いつ気づけるのだろうか。

縁 氷の乙女

初めての實習が終わり二週間と少しが過ぎた。来週の終わりには五月の自由行動日が待っている。俺たちはと言うとみんながつつがなく、俺とエリオットが皆の介護を受けて悠々と生活していた。：いや、それはもう終わったのか：

脚のヒビがほぼ治りきり歩くのも問題無くなっていた俺は、放課後になり学院を出て、トリスタの町を散歩していた。その真つ最中にまたも突然時が飛んだのだ。と言っても今回は一時間ほど飛んだだけ、気にするだけ無駄だとこれまで通りスルーしようとしていたのだが。

今回ばかりはそうもいかなかった。理由は簡単。公園で座っていたこと？まさか。そんなのこの前もだ。それは、女物の帽子を右手に持っていたこと。まず最初に誰の帽子だと驚いた。急いで右腕を持ち上げ、手を離そうとして、気づく。激しい痛みを伴いながらも俺の思い通りすぐに腕は上がり、何となく握っていた手がゆっくりと開く、開けた。

要するにだ。俺の腕の治りが加速し肩はもはや治りかけという所まで来ていたのだ。あの日、肘より下はゆらゆらと揺れクレアさんには一部が複雑骨折してしまっていると言われた腕と拳が自分で触って形を確かめられる。ベアトリクス教官に二ヶ月かかると言われたこの腕が、あともう少しで動かせるようになるのだ。これほど嬉しいことは無かった。

そして、落とした帽子を拾い上げる時に気づいた。何かが落ちた気がしてそこを見てもみるとちよつと黄色寄りの錠剤が複数入った小袋があつたのだ。しかもそこには二人で分けてね、というメモ書き付き。さすがに怪しく思い、この怪我のうちに仲良くなつた教会の手伝いをしているロジューヌの元に。

「お邪魔するよ、ロジューヌ。今日はちよつと気になる薬があるから調べて欲しいんだ」「どうぞ。右手に持つてるのがその薬ですか?…ん?右手…でも…あれ…?…そ、それより薬でしたね。今司教に確認しますので中でお待ちください」

それから少し待つて分かつたことだが、あの薬は元となる薬草が非常に希少なためあまり出回らない、かなり高価な回復加速作用のあるものであることが分かつた。どこで手に入れたかは知らないが安全でかつ有用なものなので利用して構わないという司教のお墨付きだ。

そうして今に至る。あの薬を飲み始めて少しで俺たちの骨折はみるみると回復して行つた。ただの骨折だけだつたエリオットはもちろん、あの謎の骨の修復も合わせ本来二ヶ月かかるはずだつた俺も共にあと一週間、最低でも次の実習には間に合うという言葉を頂いた。

あの介護だらけだつた幸せな日々は終わるものの、それと同時に戻ってくる日常が待ち遠しくなつた。あの手が痛くなるだけだつた板書を写す作業、これが治つてからなら少しは楽しく感じられるだろうか。ああ、一週間後が楽しみだ。

そうやって少し前のことを思い出しているうちに時間は流れていた。いつも通り食卓に集まり皆で夕飯を食べ終える。俺やリインは利き手に怪我を負っている者同士、腕をプルプルと震わせて食事を取っていた。周りから笑われるのがちよつとくすぐつたかつた。

「そういえば、アンタあの氷の乙女様といつ知り合つたのよ？ 何度か聞いたけど、B班はどうだつたんですか？ とか、もつと早く来れなかつたんですか？ とか言つてはぐらかされてたじゃない。そろそろ教えなさいよ」

実習を終えた頃から夕食の場でも酒を飲むようになり始めたサラが声をかける。何度かエリオット達にも聞かれていたが何とか振り切つてたけどこうも正面から聞かれれば逃げ場はない。メンバーからの好奇の目が突き刺さる。

「はあ…、別に大した話じゃないよ。俺、三年前はまだ帝都にいたんだ。俺が旅に出る直前、公園に散歩しに来てた時ベンチに綺麗な女の人がいるな…って。あの頃は立派なガキだったから、なにか起きないようにつてずっと隣に座ってた」

「それで!?!どうなったの!?!」

「目を覚まして、そんでちよつと話して終わり。ほら、面白くなかった」

「ふーん…へえ?ふーん…」

「…何だよ。言えよ。そんなに同世代の女性にガキだったとしても出会いがあつたのが羨ましいならアンタも頑張れよ」

「違うわよ!三年前つてまだ十四でしょ!?!そんなの恋愛対象じゃないですうー。別に、絶対にそれで終わってはなさそうだなあ…とか思つてないし!」

「あのかなあ…」

いつも通りの業務を終え、緊急出動もないため深夜巡回まで書類作業しか残らなくなった鉄道憲兵隊の隊員たちは小休止を取っていた。

先日のケルディック出動の際に同行していた新人の隊員がそういうえば、と言つて話を切り出した。

「クレア大尉つてあの時の学生さんといつ出会つたんですか？彼らつてツールズの第一学年だから…十七くらいですよ？接点全然なさそうですけど」

「あ、君は新人だからあの話知らないのか。聞いちゃう？クレア大尉と年下のラブストーリーー！」

「ちよつとドミニク少尉!?そんな話はしてませんよ…別に、三年前、私がマーテル公園で昼寝をしていた時、たまたま彼が隣で付き添っていた。それだけです。…な、なんでですか?別に私だつて昼寝くらいしますよ…?」

「ふふ、新人くん。まさかこれだけでクレア大尉があんなに楽しそうに話すわけじゃないね?絶対あるはずなんだけどなあ…話の続き」

「ドミニクさん!」

そうだ。認めるとも。私と彼の出会いには話せないことがあると。あれはただ二人

だけの秘密。そして約束。

だって恥ずかしいじゃないですか。初対面の人に滅多に出さない泣き顔を見られて、しかも七歳年下に恐怖しただなんて。

恋だなんて甘い関係は——少なくとも自覚している限り——一切ない。あれは確か——

あれは確か、帝都の綺麗な公園の片隅、二人が腰をかければあともう一人座らせるのに無理があるだろう微妙に小さいベンチであつたなんてことの無い、俺と彼女の出会いのことだ。

——三年前七月 マーテル公園——

入口を入ってずっと左奥。木陰になるような場所で私服姿のクレアは寝ていた。頭

を支える首の力は抜け、下に俯き僅かに体を左に傾かせていた。

「お姉ちゃん…痛いよ…苦しいよ…。こんなにも辛いのに…どうしてお姉ちゃんは上手くいってるの？どうしてお姉ちゃんは——生きてるの？」

「ごめんなさい…エミル…ああ…ごめんなさい…」

リーヴェルト一家を襲った事故。その真相を暴いて長らく見ていなかっただけの夢を、久しぶりに見た。閣下に見初められ、命令通りツールズに入り、卒業後すぐに鉄道憲兵隊に入隊した。自分でも思う、上手く行きすぎている。その認識がこの夢を呼び起こしたことをクレア自身気づくことは決してない。

ごめんなさい、ごめんなさいとただひたすら言い続ける。それが夢の中のエミルの言葉を加速させる。ゆっくりと心が押しつぶされて行き、耐えきれず息苦しさから逃れようとして大きく息を吸ったその時、クレアは夢から覚めた。

「はあ…はあ…はあ、っ、…ふうーっ……」

「おはよう、いや、もうこんにちはか。ご機嫌いかが？お姉さん」

「!?」

ビクウツと、憲兵隊内で氷のようだと言われる冷静さが感じられないほど身体を揺らし声にならない悲鳴をあげた。

「ああごめん。でもさすがに驚かせないように声をかけるって難しいから許してください。…体調はどう？ 酷くうなされてたみたいだし、泣いていたようだけど」

「…貴方は？」

「名前なんていいよ。それより、ちよつと落ち着いたなら、何があつたか教えてくれない？」

少年のぐいぐいと押し入ってくる感じに何となく、クレアは嫌悪感を覚えた。

「…どうして初対面である貴方に言わなきゃいけないのですか？」

「辛辣だなあ…言わなきゃいけない訳じゃあないけど。身内だったり、仲良い人には話せないけれど、初対面に話せることってあると思うんだ。あと、出会う先々でそんな正論で殴り掛かってこられたら仲良くなれるものもなれないよ、気をつけな」

実際、ツールズで仲良くなれた友人に今悩んでいることを相談しようとは思えなかった。素直に話して信じて貰えるとは思えないし。私の家族は全員殺されたけど、その事件を解決したのは私で首謀者は極刑に処されましたなんて言われたら引くだろう、そもそももって。憲兵隊に入って久しぶりに顔を合わせたミハイルに相談するというのも無理な話だった。

それはそれとして、何故この男の子にここまで言われなきやならないのか。

「∴別に出会う方全てにこうしている訳ではありません。貴方の方こそ、初対面の人にそんなこと言うなんて、ご友人が少ないのでは無いですか？」

「ほら、人が良さそうなお姉さんも初対面つてだけでそれだけ悪態つけるんだ。別に俺に気を遣わなくていいんだし。どうせ俺もうちよつとでここ出るし、再会する可能性だつてめちやくちや低いだろう？一生その悩みを抱えるより、今後会わないやつに弱み握られてる方が心持ちは楽だと思っけどね」

何となく、言う通りだと認める訳では無いけれど、話してやつてもいいかもしれないと思つた。どうせこれで終わりだ。ちよつとくらい、話していいだろう。

「なるほどね。一家が丸々消え去つて、それは計画されている事だった。それが、最近恨み言を言いながら夢に出るようになった、か。ふーん∴」

「ほら、やつぱり。どうしようもないでしょう？」

「違うさ。俺は別にお姉さんと仲良しじゃない。だから慰めるわけじゃない、言いたいことを言うだけだ。今のは言いたいことを纏めてただけ」

慰めるわけじゃないと聞くと少し身が強ばつた。そうだ、私はただ話しただけ。その

後どう飲み込み、吐き出すかは彼自身の問題だ。私にはただ飛んでくる言葉にびくつくことしか出来ない。

「まずそもそも、それはお姉さんが抱えなきやいけないものなのかというのが一つ。それにお姉さんがそいつらに何か言われて悩むっていうのもおかしい話っていうのも一つ。あとはなんというか、俺と似てると思ったかな」

前の二つも気になったが、どうしても似てるということが引つかかった。こんな地獄のような状態の私と、公園で気になったからと気ままに声をかける男の子の何が似ていると言うんだ。

「俺はもうその事件もよく覚えてないけど、だいたい三年前俺が住んでた村は消え去った。確か…家族はそれ以前にいなかった気はするけど覚えてないからなあ…。保護されてここに来て、それ以降毎日夢を見た。最初はノイズだらけだったけど時が経つにつれてちよつとずつ聞こえてきてる、気がする」

「それは、どんな夢ですか？」

「はは、分かんないよ。まだ叫び声銃声しか聞こえないんだ。言葉なんて聞き取れやしない」

「——それを、まいにち？」

「ん？そう、毎日」

唾然とした。今度は逆に、毎日そんな夢を見る彼と最近また見始めただけでおかしくなっている私と何が似ているのだろうか。それはいいとして、そう彼は続けた。

「お姉さんは本来なら事故で終わるはずだったのを、証拠を集めて事件として立証してしかも仇討ちまで成功したわけだ。感謝される理由こそあれ恨まれる理由はない」

「私があの日あの車に乗っていなければ、家族が集まっていなかったら事故は起きてなかったかもしれない」

「家族が多く犠牲になる方を選ぶと思うよ。残るのが行動力のないガキなら万々歳さ。それに、そこでやらなくてもきつと次の機会はすぐ来ただろうよ。まあ、実際に残ったのは行動力の塊だったようだけど」

「だけど——」

生きていた未来があったかもしれない。あの悲劇を回避出来たかもしれない。だって夢に出てくる彼はあんなにも……あんなにも、生きてがっているのに。

「その日たまたま皆が集まってしまったことそれだけがただ、間が悪かった。それをやった人に、ただ、魔が差しただけ。それで受け容れられないほどお姉さんの心は皆でいっぱいなの？」

無理だ。そんな都合の良過ぎる逃げは私には、出来ない。私たちが狙われる理由を知ってしまった。私たちを殺して代わりに実権を握る彼の元に入っていく利益を理解

してしまった。綿密な計画、多大な金に目が眩んだ亡者、全部が繋がっていることを知ってなお、それをたまたまだと受け入れることは、不可能だ。

「……そろそろ準備のために戻らないと。最後に思つてたこと。お姉さんは夢で見た人のことを悩んでるようだけど。それは無駄だから辞めた方がいい」

「なに、を」

「その人たちが生きている訳じゃないんだろう？——もう彼らは終わったんだ。死という結末を迎えた人々が再び生という始まりを迎えるわけが無い。彼らは死んで空の果てで救われる、ただそれだけ」

「そんなの、あまりにも」

あまりにも、ひどすぎる。もう死んだから、それ以上の未来に思いを馳せる意味は無いと？そんなの、薄情すぎる。彼は、私と同じように、大切な人々を喪つたはず。それなのに、どうしてこんな——

「もし蘇つたとして、それはその人じゃない何かだよ。終わった死骸を食るただの何か。お姉さんの夢に出てくる彼らはお姉さんの被害妄想だ。もしどこかで蘇つてお姉さんの夢に出てきているというのなら、それは彼らじゃない何かしらだよ。そんな奴らのことを悩むのなら、それはお姉さんが間違つてるだけ、筋違いってやつだ」

——訳が分からない。だけど、彼の言葉に乗つた実感が私の

心臓が跳ね上がるのを手助けする。

「——うん。もう時間だ。これでお姉さんの心が晴れるか曇るかは知らないけど、いつか、乗り越えられるといいね。それじゃあ——」

「名前」

「ん？」

「名前を教えてください。こんなに散々言われたんです。乗り越えた時、貴方より先に越えたよって言わないと、割に合いません」

「——再会しようとしても……よし分かった、良いよ。俺の名前は」

聞いて、後悔した。私は何て子と話してしまったんだろう。この後悔はエミルの夢を越えるまでに無くなっているだろうか……いて欲しいな。そうじゃないと、申し訳なくて、顔もまともに合わせられない。

「俺の名前はジェイル・アーライト。そこらを探せば何人かはいるちよつと不幸な十四歳だ。お姉さんは？」

私の名前を聞く時顔を正面から合わせた。最初で最後、初めて面と向かって話した日。

「クレア、クレア・リーヴェルトです。覚えないと、恨みますからね」

私は座っていたから、立ってこつちを覗いてくる彼の顔がよく見えた。彼の背に映る

真つ青な青空と対になるような虹彩の紅が今でもよく覚えている。

あれを除いて、ケルデッキであつたのはこれで二回目。顔を全然合わせて話してくれないのは、旅から帰って帝都で再開した時、初対面の体で話したのをまだ怒ってるからなのだろうか。何にせよ、懐かしい話を思い出したものだ。今日はゆっくり休めそうだ。今日はもう寝てしまおうか。

———
クソツタレ!! ニーズヘツグめ! こんな小さい村を焼き討ち!?
何のために! どうして!!

———
今はここまです。また、私を取り戻した時、少しだけ見せてあげましよう。だから今はゆつくりと、おやすみなさい ———

「ハツ、ハツ、ハツ、ハツ、ツ、ゲホツゲホツツ ———」

二年前、大体のノイズが消え去ってから一切の変化が見られない、決まったところでノイズが走る、気味の悪い夢に ——— ようやく来たんだ。

なんてことの無い五月十四日、いつも通りじゃない朝が来た。

紺碧の欲望／蒼の邂逅

自由行動日

——五月二十二日 会議室

「今回は緊急で集まってもらって済まないが、そうも言ってられなくなってしまったな
…サラくん」

「はい。今回集まっていたいたのは特別実習の実習先に関することです」

「まあ、その事だろうとは思っていたよ」

理事の中の一人であるルーファス・アルバレアが呆れ気味に言葉を漏らす。

「前回の実習ではうちの者たちが迷惑をかけたようだからね。それに今回はもう少し別の事情もあるようだが」

「…ふむ、なんの事か思い当たるものはありませんがね」

ルーファスは、同様に理事を務めているカール・レーグニッツを嘲笑うように眺める。カールは少し居心地を悪そうにしている。

「その、今回本当はルーファスさんだけで良かったんですけど……カールさんには親御さんとして呼ばせてもらったんです」

「……私の息子が、何か」

「前回の実習、私の班分けが露骨だったのもありますが……マキアス……さ、く、う……マキアスの貴族嫌いは想定を大きく超えていました。二回目の実習では、貴族の両面を覗くことが出来るバリアハートに彼を送ることで少しでもマシになればと思っただけです……でもケルディックのことがあったので」

「そこで私だ。バリアハートに招くことが難しいなら他の都市に行けばいい。そこで、貴族というものを知れる都市を紹介させてもらっていた。今回私がいるのは決まった実習地に決定したという通知を行う伝書鳩係というわけだよ」

ケルディックにおけるⅦ組の功績と鉄道憲兵隊の介入は酷くヘルムート卿の機嫌を損ねた。ルーファスによれば次はどんな強硬手段を取ってくるか分からないためバリアハートはやめた方が良く、とのこと。

「その結果、オルディスとレグラムの許可を貰えました。レグラムに関しては実習で必ず向かおうと思っていたのでちょうど良かったと思えました。だけど……こと貴族を知るといふ面でオルディスはバリアハートに並び、その特異さはバリアハートに勝りません。ここで相談したいことがあるんです。——カールさん、貴方が実習先を

決めてください。父親である貴方がマキアスの自制心をどれだけ信じているのか、それでどちらに行くのかを判断したいと思います」

「……………それは」

「とても酷いことをしているのは分かっています。でも…先程言った通り、彼の貴族嫌いは異常です。同級生であると同時に四大名門の一角であるユーシスに、前回の実習では殴り掛かる直前まで言っています」

「わしからも頼むよ。入学時は彼の成績の先入観か理性的な子かと思っていたが…校内を巡っていると定期的に貴族の生徒といがみ合っているところを見かけるからな。しかし、私たちはまだ彼と一ヶ月しか過ごしていないからな。ここは一番の理解者である親に任せたいのだ」

内心では、サラもヴァンダイクもレグラムに即決したいのだ。彼のあの癩癩とも言えるアレは間違いなく本性、共に過ごした時間が長かろうが短かろうが評価は変わることはない。それでも彼のアレを抑えるのは今しかない。

「このまま放置すれば、彼はあの問題を抱えたままになります。解決するのは今じゃない、まだ先じゃないと先送りにし続ければもはや解決することは叶わないと思います。だからカールさん、貴方の判断が必要なんです」

「…分かりました。では——」

「つはあ~~~~~.....」

こんなの私のやることじゃない。だけど私がしなくちゃならない仕事なんだ。

これでちゃんと実習先が決まった。そこへの通知はルーファスさんがしてくれるけど：班分けの再考をしないと：それに今日決めた方に送る班の依頼はまだ決められないから、あちら側から依頼候補が送られてくるのを待つことしか出来ない。緊急の仕事増えちゃった：。

：やっぱり私にこの仕事は向いてないのかな。去年の半分は武術指導しかしてなかったし、トワ達は優秀だったからあの子たちが勝手に頑張ってくれた。今の子達も決して優秀じゃない訳じゃない。能力は当時のトワ達と大差ないのに：去年、たった四人まとめただけで調子乗っちゃったのかな。

だ、駄目だ。私はⅦ組の担任。私が皆の前に立つ。私が皆の見本でなきやならない。見本らしくいらなくても決して弱いところは見せちゃ駄目。頑張らないと。

五月二十三日 自由行動日

もう既にリインに依頼は渡してある。中身を確認していた時、この量を怪我が治ったばかりのものにやらせるのか……と信じられないような顔でこちらを見ていたがこんな小さな町で済む依頼を任せただ。しかも街道には出ない。たかが六件、頑張つてこなして欲しい。アイツの手際なら旧校舎の探索の予定時間である二時半までには終わる見立てだから文句を言うんじゃない。

「で、やっぱりいるんですね」

「あはは……」

念の為と思つて覗いて見たが案の定生徒会室は開いており、トワ先輩が作業をしている。どうせいるだろうと思ひ、鍵も持たずに自分が処理する予定の依頼を取りに来た。

山になった依頼を分類。緊急性の高いものを何件か回収する。今日対処が必要そうなのは…四件、二つが街道関連だから丁度いいか。

「それから、先輩にはこれをお願いします」

「え？これって依頼だよ。私もやっていいの!？」

「まあ、思えばずっと書類と向き合ってるのも気が滅入っちゃいますから。緊急性の低いものを選んでおいたので気分転換にどうぞ」

「うんー」

仕事増やされたのにこの喜びようである。リインも見習え。生徒会室を出て活動を開始する。

回収した依頼は東オスティア街道の手配魔獣討伐依頼、教会からの薬草収集、ブティックからのストレガー社からの新作のお試しと感想、キルシエに入ってるお客さんの落し物探し。

いつもなら手配魔獣の依頼は受理のハンコを押したあと教官たちに返却することで、教官たち対処してくれるらしいんだが…今回は眼のお試しと行こう。使い物にならないければリインと約束した旧校舎を抜けなければならぬ。右腕にまだ気を遣わなきゃならない以上本気で戦う時のメインは眼だ。慣らさないとな。

ブティックに寄って新作の靴を受け取る。靴というか…ブーツ？足首あたりを軽く

覆ってるデザインなのに動きづらくないのはさすがストレガーと言ったところだ。

キルシエで旅人から話を聞き、教会にも寄る。落し物は娘さんからのキーホルダー。…家族がいるのに旅をしていることに引っかけかりはしたものの俺はただ依頼をこなすだけだ。教会には手伝いに来ていたロジャーヌから話を聞いた。東トリスタ街道に群生しているものらしいが、最近魔獣たちの様子がおかしかったせいで取りに行くことができなかつたようだ。

先にトリスタ中を巡って探してみたものの、キーホルダーは見当たらなかつた。まだ時間はあるが、見当たらなかつた場合見つからなかつたという趣旨を伝えるのも対応する者の義務だ。落し物探しという簡単な依頼でもあまり先輩には任せたくないものの筆頭だな。

「…おぉー」

これは…うーん…。

今俺は手配魔獣の討伐に来ていた。本体が強いタイプではなくひたすらに取り巻きが鬱陶しいタイプだったので、複数の線を見るのにちょうど良かったのはそうなのだけど…パキンパキンと魔獣たちが割れていく。見えている点をナイフで貫くだけで死んでくれるので倒すのは簡単なんだ、簡単なんだけど…！

「なんだこれは！稼ぎが無え！セピスじゃねえ！こんなの石だ石！もつとまともなものは落としてくれねえのか!？」

この点を貫いて殺すというのは根本的に魔獣を崩壊させてしまっているようで：核が崩壊した際に発生するセピスが砕けてしまっているのだ。ARCSのスロットの加工やクオーツの精製に使うセピスは量があればなんとかなるが：問題はセピス塊の方だ。セピス塊は大きさと取引の価格が変動する。なぜなら大きい物ならそれだけ強力な魔獣を倒したことの証明となるからだ。それなのに砕けて小さくなってしまつては：ひたすらに切ない。

楽っちゃ楽だけど、点で殺すのは控えよう。使うことそのものが難しいというのとは別の理由で使おうと思つていた眼の使用頻度減ることとなつた。

東トリスタ街道に出て薬草の群生地体まで来た。道中、あまりにも雑な殺し方で襲いかかってくる魔獣を排除したが、確かに凶暴化が進んでいた。これは教会だけでなく学院側にも報告する必要があるそうさ。

「んっ！これは…」

キーホルダーだ。キルシエにいる依頼主の言う特徴と一致している。どうしてこんな街道の端っこ、しかも草むらの影に：薬草を取りに来なければ見つからなかったぞ？

——さようなら、あなた。こんなちっぽけな女なんて忘れて前を向いて生きるのよ。あと、娘を放つといたら許さないから。死んでも恨むわよ

ジジジジイイイイ!!

「!?!」

突然空气中が歪む。さつきまで対処してきた魔獣や手配魔獣とも違う空気を醸し出す化け物が現れた。辺りに霧や靄が立つ。パステルグリーンの皮膚、突き刺さるように生える黄色い結晶。本能で理解した。こいつはこれまで相手してきたものと全く違うのだと。

使うことへの躊躇いはもうない。速やかに眼鏡をしまつて敵を正面に見据えて驚愕する。

「シッ!!」

ナイフを滑らせてやっぱり、と確信を得る。こいつにとって死は縁遠いものなんだ。点が見えず、線が細い。なぞれなくは無いものの線は身体の端にしか走っていない。落とした所で奴の動きに支障は無いだろう。

———パパ、ママは…？どこに行つたの…？

———娘が私を覗き込んでくる。もう十四にもなるんだ。分からないなんてことは無いだろう。だけど、私に何が出来るだろう。できることはただ一つ

———ライカ、ママはね———

「ッ!!」

攻撃が苛烈になる。声に気を取られた俺はその攻撃を凌ぐのに手一杯になってしまう。咄嗟に防御するのに右腕を使つてしまったが、意外と痛くない。これならこの後の旧校舎探索は問題なく使えるかな、そんなことを浮かばせては消す。だってこいつマジで飛ばしてくる氷が、本当に、マジで痛い！刺さつてんだぞ！

———ママは、…っ…死んだんだ

———嘘を言わないで。ママは死んでない。絶対に目を覚ますんだから

！

—— そうだ。娘はそうしてアストライアに行った。私は、逃げるように旅に出
 たんだ。だけど向き合わないと。ああ、あのキーホルダー、壊れてないといいなあ

GYuaaaaaaa
 !!!!!!

「—— 見えた」

突然浮かび上がった点を刺し穿つ。あの化け物は消え去り草むらに残ったのは彼の
 キーホルダーと—— 蒼い花だった。

「ゴプツ………」

何故か血を吐き出してしまう。あの蒼い花だ。あの匂いに刺激され頭が痛み出す。
 ……痛みが落ち着き、蒼い花を収集する。キーホルダーを、彼の決意の証を握りしめて町
 へ戻った。

ブティック、教会に行つて報告を終える。最後にキルシエへ。

「こちらが探していたキーホルダーですか？」

「—— ああ。本当に、本当に……ありがとう……！」

「いえ—— 娘さんに、何か伝えられるといいですね」

「……どこでそれを、いや、そうだな。絶対に伝えるとも」

「はあ…、親つて大変なんですね」

「ん？ そうだね。私たちには分からない苦痛があるんだと思う。だから私たちは私たちが頑張るんだよ」

俺が思い浮かべてるのはそうじゃないんだけどね。依頼主は憑き物が取れたように宿を出ていき、帝都行きの列車に乗った。俺はそれを見送ったあと、探索の時刻になるまで生徒会室で先輩の手伝いをしていた。

彼の反応を見るにあの時間聞いた声は、彼に由来するものだったんだろう。奥さんの死、娘さんの拒絶。旅というよりは傷心を癒すための外出だったようだけど、街道には出ていないという。あれは…、キーホルダーに宿った想いがあの花が咲く場所に辿り着かせたのだろうか。流れ着いたキーホルダーの想いに触発したあの花はなんだっただろうか。後で教官に聞いてみるか。

それにブティックであの新作を貰えたのは収穫だったな、めちゃくちゃ動きやすかつたし好意に甘えておこう。

「それじゃ、行ってきます」

「行つてらっしやい。気をつけてね」

トワ先輩と声を掛け合い俺は部屋を出た。

旧校舎の探索は大体二時間ほどで終了した。先の実習で共に戦った者たちにガイウスが加わっただけで、苦勞は全くしなかった。内部の構造が変わっていることにも驚いたが、俺としてはオリエンテーリングの時よりも薄くなっている線に気がいった。さっきの化け物もそうだったが、あまりそう易々と死の概念を弄らないで頂きたい。ヤツは彼の意志に依るものだったから意志の綻びによつて存在の完全性が薄れた、と言えばまだ分かるけど……じゃあこの建物はなんだという話だ、全く。

「で、今回も腕を焼いたわけだけどどうにかならんのか？」

「ごめんなさい……」

今回の階層の敵にトドメを刺したリインはまたも自分の刃で腕を焼いた。いくら強力な攻撃でもその後使い物にならないのならお話にならないというものだ。

「あの焔は自分のものだから害はないと思つてただけだなあ……」

「俺もそう思つてただけだなあ」

「私としては、あの技使う度に気分が悪くなる臭いするからもう使わないで欲しいんだけどね」

アリサが人の肉が焼ける不快な匂いに、本当に気分を悪そうにしている。

初めてあれを見るガイウスはかなり驚いていた。俺たちは前回の実習で慣れていたけど、ガイウスにはその異常性を理解してもらうためにも技の説明をした。とても概念的な話でありアリサとエリオットはピンと来ていなかったようだが、何となく理解したガイウスが一言。

「自分の本質というのは普通の人は簡単に受け入れられるものなのだろうか？ そう易々と引つ張り出して、もし俺がこれまで目を逸らしていた自分の凶暴性を目の前に突きつけられたりしたら、どうなってしまうか分からない。人には、自分を受容するための時間というのが必要だと思うのだが」

「おお…」

「その通り過ぎて何も言えんな」

「そうか…俺はこの焔を役務することだけを考えていた。この焔がどんなものかも考えていなかった…ありがとう！ ガイウス！ 前に進むヒントが貰えた気がするよ！」

リインは一人で興奮しているが俺はうーん…と唸ってばかりだ。そんなものだろうか、リインが覗いたものは自分のそのものだと言うのに。しかし、あの夜見せられたあの力はリインが拒絶してきたもの。もしそれが牙をむいているというのなら、分かん話ではないか…。

旧校舎で解散し夕方の五時半。今日はもうなんの用事もない、このまま学生寮に戻る。扉を開ければ寢息が聞こえて、そつと戸を閉じれば共有スペースのソファに横たわるサラ教官が居た。いつもする酒の匂いは今はあまりしない。テーブルの上にはぐちやぐちやと濃い書き込みがされ、僅かに俺たちの名前が読み取れる紙と、どこかは分からないけど、街の資料。

部屋が近いのがラッキーだったな、部屋から毛布を取り出しそつとかける。コーヒーを入れて反対側のソファに腰を下ろして休憩する。いつも頑張ってくれているんだ、休んでもらわないとな。

「ねえパパ、私上手くやれてるかな?こんな私でも、皆にできてることってあるのかな?」

「やれているとも。私の娘はできる子だからな」

——できてるさ、サラ教官は立派な教官だよ

え?

プルルルルルルル…プルル ピッ

「…ん……………」

「おう、どうした?探索の打ち上げのつもりがどんどん人が着いてきてⅦ組ほぼ全員で食事?キルシエで?邪魔になってないのか?…そう、店主さんが貸切に…わかった、教官も連れて全員で食おうや」

そこにいるのは…ジエイル?

「ん?起きたか?教官。ライン達がキルシエで食事に行ってるみたいだ。教官も連れて来いって言ってたからな。ほら行くぞ!」

「ちよ、ちよっと待ってってば!」

急いで毛布を部屋に置いてキルシエに向かった。Ⅶ組が始まってからずっと皆と一

緒に食べてたけど、今日は特に美味しかった気がする。

珍しくお酒もほぼ飲まずに眠りについた。昼寝がよく寝れたから昼と同じ毛布を羽織って寝た。でも朝になつて気づいたけど、私確か毛布してなかった気がするんだけど……一体誰の……。そ、それより、私の扉に引つ掛けてあつた袋に入つた蒼い花、ジェイルも余計なものを持ってきてくれるわね……後で学院と教会に相談しとかないと。はあ……面倒事つて減らないのね……

オルデイス1

五月二十六日 実技試験

今回の実技試験も前回と変わらずあの不気味な戦術殻。今となってようやく理解出来る。あの違和感は死の希薄さだ。あの奇妙な動きをする機械には左右対称に、妙に整った線が通っていた。まるで脆い部分と、壊れ方が設計されているような、そんな感じだ。

——腹が立つ。完璧な設計を自慢されている気分だ。

ライン、ガイウス、アリサ、ラウラ——前回の俺とエリオットを除いたA班が呼ばれた。大体二十分くらい、詰まった様子はなく速やかに戦術殻の機能を停止させた。

エマ、マキアス、ユーシス、フィー、エリオット——逆にエリオットを追加したB班が呼ばれた。四十分くらい、あの小さな機械に何を手こずっているのだろうと言うくらい苦戦していた。それもそうだ。あのアリサが動けなくなる衝撃をマキアスとユーシス

リンク切断

は初っ端にやらかしている、しかも戦っている真っ最中でいがみ合い始めるのだから戦闘要員が二人減るのと同義。

これじゃあ教官が呆れるのも納得だ。ところで、あの…俺は…まだですか…??

「さて、最後に。ジェイル、悪いけど一人でやってもらおうわ。それに関しては次の班分けが関係してるんだけど…それは後。私に貴方の技量を見せてちょうだい」

「…了解」

班分けについては聞きたいところだが、せっかく教官から頂いた本気を出していいという許可だ。さっきのイライラをぶつけるとしようか。

「昨日の旧校舎からまともに使い直した右腕で殴る。さっき見た線を外すように。脆いところなんて後だ。殴つても壊れないというなら八つ当たりはしやすい。」

戦術殻からアーツの詠唱を開始する駆動音がする。させるわけないだろう? 最大速度で突っ込み吹き飛ばし詠唱を止める。もう始めてから十分はしただろうか。遊ぶのはもう結構だ、終わらせよう。

「!?!」

眼鏡を胸ポケットに差し込む。前回のA班以外の全員が身体を震わせる。やっぱり

雰囲気は変わってるのだろうか？自分じゃあよく分からないからなあ。腰に着けていたナイフを抜く。

「失せろゲテモノ」

関節部、接続部、壊したいならここを狙うだろう？そう言わんばかりの場所に走る線を瞬きよりも早く切り抜ける。早くコイツがバラバラになるのが見たかった。

「お見事。これなら私の班分けも信頼できるつもんね。…何をしたのか説明をして欲しいところではあるけど」

「ハハハ」

今回の実習に関するプリントが全体に行き渡る。ライン、ユース、エリオット、ラウラ、フィー達A班はセントアークへ。俺、ガイウス、マキアス、エマ、アリサのB班はオルデイスと書いてあった。

「何ですかこの実習先は!?!セントアークにオルデイス？貴族の巣窟になぜ向かわなければならぬ!」

「はあ…」

「…ええ、そうね、貴方からしてみればそうなるわよね。今回の実習にはチームがあるわ。——貴族とは。あなた達はそれを知るために今回の実習に向かうわ。リン、ラウラと貴族の自覚がない二人にそもそも身分制度と関わりがなかったガイウスとエマにフィー、平民が優位にある帝都で過ごしてきたエリオットとマキアス…こんなに貴族と繋がりが無いのなら逆にチャンスだと思ってるね」

「ふざけないでください！そんな勝手な事情で!?僕たちがここに出向けば何をされるのか分かったもんじゃありません！今からでも実習先を変えるべきだ！」

「マキアス…お前こそそんな勝手が許されるわけないだろ。諦めて次の実習に備えるしか無いだろうが」

「僕はみんなのためを思って——！」

「それはお前の勝手だ。お前以外でそこまで危惧してるやつは——」

「いいわ、ジエイル。これも想定内だから。マキアス、そんなに心配なら、その異議、無理やり通してみる？」

「——え？それは、どう、やって？」

「私に勝つ。それだけよ。当然貴方だけじゃあ無理なのは分かっているからそうね…三名選びなさい」

俺はあまりマキアスをよく思っていない。先入観と主観だけでものを考えるやり方、しかも周りの人間は自分と同じ考え方をしていると思っ込んでいる。だから選ばれたくなかったけど……。選ばれてしまったのはエリオット、ガイウス、俺の三人。

マキアスとガイウス、エリオットと俺で戦術リンクを結ぶも、教官の高速の攻めによりエリオットが早々に堕ちる。そこからは教官の猛攻を凌ぎきれない俺たちが一方的に疲弊する消耗戦の始まりだった。

「くっ……許す訳には行かないのに……っ」

「……………」

「……………」

「……………」

マキアス、ガイウス共に戦闘不能。俺は、俺と教官はエンジンがかかり始めていたところだった。とは言っても俺は結構きついけど。

「せつかくだし、皆には一回だけ本気を見せてあげましょうかね」

「……………勘弁してくれ……」

教官が力を溜めている。迸る紫電に気圧されるが——視るんだ。まさか教官の一人勝ちにさせるわけにはいかんでしょうよ。かけ直していた眼鏡を再度しまう。教官を傷つけてしまう可能性も考慮して今回は左手で相手取る。

「オメガ——」

「——その技を」

「エクレールツ!!!」

「殺す——!」

教官が見せてくれた技の完成度は凄まじいものだった。初段の地面への突き刺しで発生した紫電の衝撃波を急いで殺す。正面からくる突進は反応できる限りで避けはするものの、速すぎて本体と技の死が判断できないため避けれなそうなのは最小限のダメージで。

「よく耐えるじゃない! 一気に行くわよ!」

導力銃を乱射して生まれた弾は幸い見極めやすく、全て斬り捨てることが出来た。見失った教官を見つけた時には、既に剣に紫電を纏わせて振り上げていた。ものすごい威力の衝撃波が迫ってくるけど…視ることに集中した俺を舐めないで頂きたい。まあ知らない教官からしてみればただのズルなんだが。

「シッ!」

「ええ!?!」

最後の渾身の衝撃は俺が正面から殺した。教官や他のメンバーの視点的には軽く振ったナイフであの衝撃を打ち消したように見えただろう。あの突進を止められた

リイン以外の皆は唾然としていた。

「……………はあ…まあいいか。ジェイルは今のとは別件で呼び出しがあります。後で私の部屋に来るように。とりあえず今回の実習にこれ以上の文句は受け付けられないわ。各々、全力で実習に当たるように」

『はいッ！』

「くっ…」

「ええ…」

夜の十時、いつもならこの時間帯に三階に上がることはまず無いのだが、今回ばかりはなんとも気が重い。

———コンコン

「ジェイルです。呼び出しの件ですが」

———開いてるわ、入って

女性の部屋に入るなんて初めて、ではないけど歳上の女性のもとへ来るのはあまりな

いので若干緊張した。部屋に入り、キツイ酒の匂いとその中に混ざる女性的な匂いに少し鼓動が早まる。なんでこのズボラにドギマギしないといけないのか、そう思うと直ぐに落ち着いた。

「呼び出して悪かったわね。私はベッドこっちに座るから貴方は椅子にかけて。話したいことは二つ。実習のことと蒼い花のことよ」

「…ああ」

実習はともかく蒼い花については俺も気になることがあった。ある意味いいタイミングなのか。

教官が言うに、オルデイスの在り方は他の貴族が中心の都市とはかなり違った異質なものであるらしい。マキアスの貴族嫌いがいつ発症するか分からない以上、彼を監視する係として俺をB班のリーダーに任命する、これが一つ目。

二つ目の蒼い花の方だが…教会に当たったところプレロマ草という強い幻覚作用がある成分を含んだ花であることが分かった。ただ他の筋によるとクロスベルでも発生していたらしく、帝都で咲いた理由は謎らしい。…あの声と衝撃は、幻覚でもなんでもなく、本物のはずなんだけど…。

とりあえずこれで用は全て終わった。あまりこの時間まで長居したくないんだけど、教官が何か言いたげにそわそわしている。

「あつそうだ！これ！はい、毛布。その…昨日…ありがとうね。それと見たものは忘れること、分かった？」

おもわず口角が上がる。不自然だと思えるほど突発的な話の切り出し方に随分といじらしい態度。…ほーん。

「別に、美人な顔に反したあどけない感じの寝顔なんて俺は見えてないさ。忘れるも何も、覚えてるものがないならどうしようもないなあ」

「…!?わ、忘れなさい！今すぐ！さあ！」

——教官！静かにしてください！！寝れません！！

「それじゃあおやすみ、教官。いい夢を」

「くくくくつ！ジェルううう！」

よく寝れそう。…さすがにこの前まで女性が使ってた毛布は使えなさそうだけど。

五月二十九日 実習当日

昼手前頃にオルデイスの駅に到着した。近代化が施された美しい街並みと吹き付ける潮風。女性陣は髪のアゲがくと言っていたが、心地よいことには間違いない。そんなことを楽しんでいる時間はなかった。俺たちの宿泊予定地であるホテルへの送迎のクルマでカイエン公爵との通信が繋がられたのだ。

「紺碧の海都オルデイスようこそ、VII組B班の諸君。私はこの二日間君たちと直接顔を合わせることは無いが、是非実習に励んでもらいたい」

下品さは若干あるが、四大名門の一角らしい威厳も感じられるその高貴さに一瞬は圧される。しかし、その人当たりの良さに俺たちは気を抜いていた。だから次の一言に完璧に吞まれてしまった。

「それから、マキアス・レーグニッツ君。君の立場として素直に楽しむことはできないだろうが、君も所詮は学生だ。その今に甘んじてせいぜいこの街を楽しむ」といい」

俺たちは目の前で、波乱の幕開けを堂々と宣告されたのだ。

貴族について、か。俺にとつては：踏み台、かな。奴らを利用すれば俺らは上に躍進することが出来る。少なくともどんな貴族を利用しても足がかりは得られる。…え？聞かれたら不味いつて？ハハハ！大丈夫、この街の貴族はこんなことすら笑つてそれもいいつていう奴らばかりだから！

「何なんだあの貴族は…！これだから嫌いなんだ！」

現在はホテルの昼食を頂いてるところだ。先のことでもマキアスの気が立ってしまいやけ食いじみた勢いでどんどんと食べ物をお口の中に放り込んでいく。んな事より依頼の準備だ。

「今回の依頼は手配魔獣の対処が二件、導力工房からのお手伝いの依頼が一件に港からも一件の合計四件だ。」

「ええ、工房からの依頼は今日一日かかる代わりに一日やつていけば勝手に勝手に済むらしいから…優先すべきは港の方ね、午後の二時までに来て欲しいつてあるし」

「手配魔獣が指定されている街道に行くのに街挟んでるから、先にどつちかの手配魔獣

をシバいてから港、そこからもう片方終わらせて最後に工房に報告。それからホテルで休憩とレポートかな」

俺とアリサで大体の計画を立てる。西ラマール街道とアウロス海岸道の二つの街道に依頼が出ている。数自体はケルディックの時と変わらないけど今回は幾分か距離が遠い。

「……あの、ガイウスさん」

「ああ。彼らのあれは前回の実習で身につけたものなのだろう。：俺たちはあんなことしている余裕はなかったが：しかし、これから見習えばいい。できてしまった差も取り返せない程度のもものでは無い」

「うっ」

「何やってんだ？行くぞ。先に海岸道の方から終わらせよう。西ラマール街道の方から帰ってきた時に二時に間に合う自信が無いからな。行けるところからさっさと進めるぞ」

平民について？僕たちは平民にいつも感謝しているんだよ！彼らの待遇改善は僕らも尽力してるとも。でも僕たちが過度に彼らに干渉すると外部の貴族があまりいい顔

をしないんだ…平民を思つての行動がそんなに嫌なのかね…それではね、君たちもぜひこの街を楽しんでくれ！

海岸道の手配魔獣を対処し終え、街に戻つて現在一時半。俺たちは街に戻つてきたあと急いで港湾区画に向かった。

「はあ、はあ……間に合った」

「おう！お前らが依頼を受けてくれた学生か。早くこつち来てくれ！」

「は、はい！」

港に着いた時直ぐに作業員に呼ばれた俺たちは急いでいつて驚いた。俺たちは積み重なるコンテナの間を抜けて海が見える場所へ出てきたが、そこに広がっていたのは散乱したコンテナだった。

「ココ最近、音も立てずにコンテナが崩れ去る怪現象が多発してんだ…中には今日輸送する予定のコンテナも混ざつてなあ。お前たちにはこのコンテナに刻印されてる輸送先を見て、輸送先ごとにこのシールを貼つて言つて欲しいんだ」

言われた通りにシールを貼つて分別していく。そしてそのシールを基準にリフトが正しい場所にコンテナを戻していく。ものの一時間ほどで作業は終わった。

「それにしてもなんでこんなに……なくなつたものとか無いんですか？」

「そういうのはまだ出てねえなあ……現状マジでイタズラ程度なんだよ。しかも不思議なことにも、こんなに酷いことになつてのにも関わず実害は出てないんだ。でも体調崩す奴らが増えてきてな、手が足らなくなつていた時に公爵様から手助けが必要な者は申し出をつてんで頼み込んだのよ。いやぁありがてえなあ」

「……随分と好意的なんですね」

「ん？ そうか？ まあ、俺たち作業員は別だが、漁師たちは貴族お抱えのところが多いからな。技術に資金提供、不漁だつた時のお給金……何から何まで助かつてるんだ。その潤いは俺たち作業員の元まで届く。この街で貴族が嫌いな奴なんて大していないさ」

「……」
マキアスの顔がどんと曇つていく。彼の知つている貴族がどんなものかは知らないが、さっきのあの態度と住民の印象にすれ違いが生まれることに違和感を覚えているのだろうか。

「……騙されているんです。アイツらがそんなことばかりするはずがない。いつかは捨てられます」

「おう！ そりゃそうさ。俺たちも大人だからな、俺たちの利用価値に彼らは目をつけてることには気づいてるとも。けどな、そういう損得勘定つてのは世の中で一番信頼出

来るもんだ。ならそれでいいのさ、俺たちは利用価値が無くならないよう必死に頑張るだけよ」

マキアスから、そんなはずは無い、絶対に裏が、とボソボソ言い続けてるのが聞こえる。だけど今は、そうだと受け入れて突き進むしかない。

作業を終えてホテルに一度戻って小休止を取ってから西ラマール街道に出る。道幅も長さも凄まじかった。魔獣の討伐より移動の方が時間かかったんじゃなかろうか。マキアスが心ここに在らずだったため少し効率は落ちたが大したもんじゃなかった。俺たちはオルデイスに戻る足でそのまま工房に向かった。

貴族について?…正直言うともそもそ興味が無いな。私の場合特にね。飲食店が彼らの庇護を受けることなんてあまりないし…ああでも、共に切磋琢磨していた料理人がお抱えのシェフになったと聞いた時は流石に来るものがあつたかな…。おつと、暗い話はここまでだ。間食はいかがかな？

「おじさん、今戻ったよ。結局今回の依頼はこのクオーツをつけて歩いてるだけで終

わったけどなんだったんだ？」

「ん、貸してくれ。…なるほどね。そしたらここをこうして…あとこつちを弄って…よし、これで完成だ。はい、手伝ってくれたお礼。新型のクオーツ、その名も『機功』だ。歩く振動を感じてオーブメントのエネルギーを回復させてくれるものにする事ができた。君たちのおかげだ、ありがとう」

なるほど、歩くだけでいいんじゃないかと歩いてもらわなければいけなかったのか。これがあればかなりオーブメントのエネルギーに関して困ることは無くなりそうだ。先の魔獣戦でもアーツアタッカーとして活躍してくれたエマに渡しておこうかな。

「それにしても新型のクオーツの開発なんて…工房がよくできたな。しかもこれ相当便利じゃないですか」

「それはな、この街の導力製品を扱ってる店は全部組合に入ってる、その組合がカイエン公爵の傘下なんだ。素材も資金も優遇されてるから結構幅を効かせられるんだよ」

…なるほど、ここも貴族か。しかも領主様直々、拳句の果てには導力関連は全部と来た。雑貨屋や漁業の中の誰か、ではなく界限そのものに…何となく教官の言っていた特異性というのがわかってきた気がする。

「なんでこんなに優遇されてるかとか…心当たりありますか？」

「無い、って言いたいんだけどなあ…ま、何となくわかるよ。今回の機功、結構性能頭お

かしいだろ？クオーツとしての性能もそこにフィールドワークをしているうちに消費した分のエネルギーを回復してくれる。これはカイエン公爵からの開発依頼なんだ…なあ、これどう使えると思う？」

「え？えつと…戦車に括りつけて実弾とアーツ飛ばしまくるとか…？」

「アリスさん…」

「アリスくん…？」

「その発想はなかった。それもやってみればかなり強いかもしれないな」

ガイウスの優しいフォローが痛い。凄い幼稚だけど実用性の高いアリスの考え方も面白そうではあるんだけど…本来、ARCS、というか戦術オーブメントは消費したエネルギーをチャージするのに使い切りのチャージャーを使用する。実際結構あれ嵩張るから…旅してた時の苦勞の一つだ。

「まあ持ち物軽くなりやそりや楽ですよね」

「おつと、すごいシンプルに核心を突いたね…。その通り、どう使えるかなんて簡単だ。アーツを利用する者たちにとってエネルギーチャージャーは必須なんだ。持ち運ぶチャージャーが減ったら便利。かなり事情は変わるよね」

「でもこれを開発、増産なんて…まるで、戦いに備えてるような…」

「おつと…それは俺の知るところじゃないな。俺たちは、依頼された通りにものを作り、

それを依頼された数納品する。それだけさ」

俺たちはオーブメントの整備をしてから工房を出た。皆の顔が少し曇っていた。この街に入つて半日、関わったところは少なくともここのおかしさに分かり始めてきた。

街で出会った貴族や住民達との関わりでも既にその空気はあつた。他の貴族たちに比べて平民に関心がありすぎるこの街の貴族と、どこまで恩恵を得ていたとしても貴族にほぼ無関心な平民。俺たちの知る貴族と平民の関係性との違和感がじわじわと余所者の俺たちを侵食する。

「…何故この人達はこうまで貴族を受け入れる…？彼らは貴族の汚れを少なからずわかつている。だと言うのにどうして…」

「俺が知る世界が狭いというのは分かっていた。だが、この街をに漂う空気は、俺たちが街に入った時の潮風と真逆の肌を這うような…なんとも…」

「最初の印象とは全然違いますね…息が詰まる感覚です」

「なんとか工房の人たちは、自分たちが作つた新製品を利用される光景から目を逸らしてのように思えたわ…皆ももしかしたらそうだったのかな…」

そう、なのだろうか。確かにさっきの人も利用のされ方は想像していても、戦いに触れることから避けていたかもしれない。それでたまたまイメージが当たってしまった公爵家からの支援を失うのを怖がっているのかも？なんていうのはこじつけが過ぎる。やっぱり、自分たちが作った物で人を傷つけられるというのは苦しいのだろう。

だけど、俺たちに何が出来る？ 所詮は学生、カイエン公も言っていたじゃないか。俺たちはただ、学生として実習をこなすことしか出来ない。…今日はホテルに戻って休むとしよう。

その時突然 A R C U S のコールの音が鳴り響いた。

『皆さん、突然で申し訳ございませんが新たな依頼の通知です。お時間がよろしければ今からお伝えする場所に向かい、依頼人と合流して頂けますか？』
今日はまだ休めそうにないらしい。

オルデイス2

商業区画の入口にソワソワしながら周りを右へ左へ見渡している不自然な男性がいた。……うん、聞いていた服装の特徴に合致する。あの人が依頼人だ。

「貴方がグランツさんですか？」

「あつ！君たちが依頼を受けてくれる方々かい？」

「それは申し訳ありませんが内容を聞いてから判断させてもらいます」

「それで構わないよ。それじゃあ依頼のことなんだけど……宝石を探して欲しいんだ」

……宝石？おいおいおい今から街道に出て採掘とか絶対嫌だぞ。女子は知らんが俺が知る綺麗な石なんてセピスぐらいなものだし……

「私がこの街に来たのは四年ほど前のことなんだけども、その時この商業区画の宝石店で見つけた宝石があまりに綺麗だったんだ。通常時は綺麗なオレンジなんだが、光を通すと鮮やかな黄色になる……不思議な宝石だった……」

「それを探してこい、ということでしょうか？この区画の宝石店……まあまああるぞ。……残念ですが——」

「その宝石って、トパーズ、じゃないかしら……色が変わるなんてのは聞いたことがないけど、いくつか宝石の種類を絞れば探せないこともないんじゃない？」

アリスが発した言葉で他のメンバーをどうすれば効率よく探せるかを考え始める。こいつらに断るって言うのは無いのか。

「はあ……時間を決めよう。探し始めたら際限がない。現在四時半……なら、二時間後の六時半までに見つからなければ宝石探しは中止、その時点で今日の実習を終了とする。いいな？」

メンバーがこちらを見て頷き返す。それから俺たちは商業区画中を回って探した特徴を伝え、店内を見回りそれでも見つからないまま一時間半を過ぎたその時、ARC USが鳴り出す。

『み、見つけました！駅の裏路地の小さな宝石店です！』

グランツさんを連れて急いでその店に行くと皆が興奮してその宝石を囲んでいた。グランツさんも宝石を見てはしきりにこれだ！これを探していたんだ！と喜んでいた。

店主のご老人に問いかける。

「結局これってトパーズなんですか？色が変わるってあまり聞いたことはないんですけど」

「ああ、列記としたトパーズだとも。君たちは宝石はあまり興味ない感じかね？実は、この大陸でできる宝石の中には七耀脈、という力の道筋が地中を走っているらしい：噂程度しか聞いたことは無いんだがね」

「それと宝石になんの関係が？」

「それがだね…ふふ、その流れの近くにできる宝石の中には突然変異を起こすものがあるんだ。本来は突然変異は価値が上がる要因なんだが…このトパーズは元々価値が最も高いとされる赤よりのオレンジから一般的な色になってしまうせいで、人気が出なかつたんだ。それからは倉庫の中でもちよつと目立つところで倉庫番をして貰っていた。こうして探してもらえて、こいつも喜んでいるよ」

七耀脈：旅の中で何度か聞いたことがあるけれど、意外とこういうところにも影響は出てるのか。七耀脈が流れているところの力の溜まり場にとんでもなくでかいセピスの結晶ができているというのも本当なのかもな。

グランツさんはその宝石を購入し、嬉しそうにしながら駅前広場まで出てきた。

「君たちのおかげだ！本当にありがとう！こんなに探してもらったから当然なんだが、

夕食はこれからだろう？ 私のおすすめのお店があるからそこで奢らせて貰えないか？」
「いえそんな…悪いですよ」

「なら、これが依頼の報酬だ。報酬を受け取って貰えないと依頼主として困ってしまうんだが、それでもダメかな？」

結局連れていかれてしまった。港の目の前にある海鮮をメインに扱うレストランだ。かなり高級そうで少し萎縮してしまつたが食事が出てこれば俺たちは直ぐに夢中になった。昼飯から半日、ずっと動き続けているのようやくの食事というのがさらに幸福感を加速させた。

食事を終え俺たちがここに来た理由や学園の話をしていた。聞き上手でどんどん話してしまつていたので、少しこちらも返させてもらおう。

「そういえばグランツさんはなぜ宝石を探したんですか？最初は思い出したからかと思いましたが、あの必死さと喜び様からして自分のためじゃあないなと感じたんですが…」

「ああ、そういえば伝えてなかったね。——私の自慢の姉が結婚するんだ」

空白

「私の家は両親が早死しちゃつてね…唯一の家族としてプレゼントを贈らせて貰おうと

思ったんだ。さつき買った宝石はこつちに越してきた時姉が見蕩れていたものだったから覚えていたんだよ」

マキアスの様子がおかしい。

「そ、うです、か。それはお姉さんも、その、お喜びになるでしょうね」

「そうだといいなあ。でも旦那さんにも良くして貰ってるって聞いているから、さすがに貴族のおもてなしにはかなわないかもなあ…身内のプレゼントだしちゃんと喜んで欲しいけど…きつと弟として、最後のプレゼントになるだろうから」

「——」
「おい」

「——その結婚、取り下げた方がいい。奴らが人を幸せにすることなどない。お姉様のことを思うなら今すぐにでも止めるべきだ」

「やめろマキアス」

「そ、そんなに心配しなくても、姉と旦那さんは恋愛結婚だし向こうの家族は貴族には珍しく血筋を気にしないと云ってくれている。大丈夫さ」

「奴らはそうやって甘言をかけて騙してくる！いいのか!?! 貴方がこのまま見過ごせばお姉様は必ず不幸になる！救えるのは貴方だけなんだぞ!?!」

「マキアスツ!!」

「——さつきから何なんだ！僕は何も間違つたことは言っていないツ！君に僕を止める権利は——ガッ……！」

「もういいよ黙れ」

マキアスがまくし立てるせいでこつちもカツとなつてしまった。少し騒がしくなつてしまつたせいで周りがガヤガヤしてしまつていた。首を絞めて無理やり黙らせたのを離す。

「グッ……はあ、はあ……僕は……何も、何も間違つてツ！」

「やめてジェイル」

「今ジェイルが怒つてもこの場はどうにもならない。貴方なら分かるでしょ……？」

マキアスの頸に当てたナイフが薄皮を破り僅かに血を垂らす。周りでは昼間に見かけた気がする船乗りがそこまでにしろ、これ以上は、などと言つていたが、今の俺には

アリサの声が最も、そして酷く刺さった。

「マキアス」

「——ヒツ」

「着いてこいよ。ここで話す訳には行かねえだろうが」

マキアスを連れて外に出る。目の前が港なのが本当にちようど良かった。

「何だあれ。お前頭おかしいのかよ。お前に昔何があつたかなんて知らんがお前のあれはただの押しつけだ。何の得も生まない、誰も幸せにならない。自己満足に勝手に俺たちを巻き込むな」

「ぎ、君に……君に僕の何が分かる！それに僕はグランツさんとそのお姉さんのことを思つて言つたんだ……ッ！このままでは彼らは崩壊の道を進む！」

「発作持ちの上に妄想癖か、救えんな。お前のその貴族に対する偏見はもはや病気だよ。結局人の善悪に身分なんて関係ない。それを分かるんだよ、マキアス」

「フン！まさか君まで貴族に絆されるなんてな。この街の毒に侵されていないのは僕だけか！貴族の間違いを正せるのは僕だけなんだな！」

全く噛み合わない。ひたすらに意見の食い違ふところを怒鳴るだけの言い合いが熱量を増していく。

「毒だど？この街の可笑しさにはメンバーの全員が気づいていた。だけどこれは修正す

べき歪みやない、これがオルデイスの在り方だ。俺たち余所者はこの道理に従うのみだ」

「間違っているのを正せと言つてやることこそ正しい行いだ！ならば君は！意図的に生み出された格差があるべき姿と受け入れろとも言うのか？仲間であるはずの商人同士がいがみ合い、他の優遇された職を僻むこんな歪みだらけの貴族が仕組んだゲーム盤の上で踊れと!？」

「彼らはそれを受け入れている。実際優遇されていた者たちは一重に評価されるべき実績を得ていた。貴族に庇護されているかどうかじゃない、自分以上の実績を出しその結果貴族の援助を得られた者を羨み、躍進の機会を伺う。その軋轢をひつくるめてこの街だ」

「そんなのは詭弁だ！帝都ならばそんな歪みは是正される。貴族の食い物にされている彼らを見過ごすことは出来ない！」

俺には理解できない。そんなのはただ自分の気に入らないことを自身の望む形に歪めるだけなのかなぜ分らない。こんなやつと真正面から話し合っているのがどんどんと馬鹿らしく思える。現状を理解すると頭が冷めていく。呆れた、ガキの駄々に付き合つてられるか。

「大人になれ、マキアス。お前の思い通りにしたところで出来上がるの

は誰も幸せを享受することの出来ない平等なだけの世界だ」

「…平等なことの何が悪い。僕たちは皆等しく同じ人間だ。ならば対等であるのが正しい在り方だ」

マキアスが俺に吊られるようにゆっくりと静かになっていくが、顔は強ばったままだ。受け入れられないものを排除してただけというのがお前は分からないんだな。

「ならお前と俺は同じ存在なのか？今も尚父親が生きているお前と全てがない俺と、等しくあるべきか？そうあるべきだったとして俺に父親を与えることは出来ない。ならお前から親を奪えばこれでようやく対等だな」

「そんなのは暴論だ！」

「平等とはそういうもんだ。生まれた時より差がある以上、人と人の間に隔たりが無くなってしまえばそこに残るのは無秩序な暴力だ」

「何が言いたい…！僕に理解できるように言ってくれ…」

「人にはそれぞれ在り方がある。受け入れられない在り方は絶対にある。それを認めないと言つて変化を強要するのは異常だつってんだよクソガキ。受け入れる必要は無い、けれど受け流すことが出来ないと大人にはなれねえぞ」

「なつ…今僕のことをバカにしたな!？」

「あ…散々言つて満足した。…まだ居んのか？もう夜の八時だぞ。優等生なんだから

レポートさつさと書けよ」

「そういう君はどうなんだ！」

「俺もう書いてるから。優秀生は違うんだよ、分かったらさつさと戻つとけ」

あんなガキに持論を垂れ流すような大人気ないやつになった気は無いんだけどなあ。

実際俺とマキアスは真逆なタイプだ、到底そりの合うようなもんじゃない。理性的な見た目に反して肝心なところで激情に身を任せるマキアスとどれだけ適当なことを言ってもその実絶対とその在り方と道理を守り抜きたい俺と。でもきつと、そういう在り方もあるのだろうか。

「すみませんグランツさん……ご迷惑をおかけしました」

あの後私たちはグランツさんと共にホテルに戻った。正直少し空気は暗くなってし

まっていた。当たり前よ、さつきまで温厚だった男子が突然怒鳴り始めたと思っただらにもう一人の男子がナイフで首を刺しそうになったとなったら：だけどグランツさんは慌てるどころか少し落ち着いていた。

「いや、きつと彼にも色々あるんだろう。それより：マキアス：どこかで聞いたことがあるような…？もしかして都知事の息子さんか？」

「え？ご存知なんですか？」

「いや、ここに来る前は元々帝都に居たんだ。何となく聞き覚えがあると思ったけど、道理で」

合点がいったというような声音だ。朝さわやかに私たちを撫でて行つたあの潮風は冷えて寒いくらいだった。今日の昼間に感じたこの街の二面性を想起させてくる。

「…あれ？グランツさん、あの石像って何の石像なんですか？」

「ああ、あれはずつと昔に信仰されていたと言われる碧のオンディーヌという海の精霊さ。こつちに来てから何か逸話があつたと聞くが、私は覚えてないなあ」

精霊信仰：おばあちゃんが言っていたし、私も調べたから分かつていたけれどかなり広範囲に様々な信仰があるのね…。この学校の実習で今後向かう先にもそういったものがあるのかしら。そう思うと少し楽しみに思えた。でもオンディーヌ：どこかで聞いたような気がするけれど…：なんだつたかしら。

「へえ……ここまで送っていただいてありがとうございます。あつあと、これ出会った方々に聞いてるんですけど……グランツさんにとって貴族ってどんな存在ですか?」

——貴族か、面白いことを聞くじゃないか。革新派に潰された僕たちをに潰された僕たちを貴族派あの方々は拾い上げてくれた。僕らの汚い欲望お願いを受け入れ、力を与えてくれた素晴らしい人達だよ

「……え? 奴ら? あの方々……? それにお願いって……? あの、グランツさん?」

「今日はありがとう。この宝石は姉もきつと喜んでくれるよ。それでは実習、頑張つてね!」

夜の風の寒さに別のものが混ざる。グランツさんの酷く透き通った笑顔が、私たちの心を凍らせていった。

よし、A班の方は順調に進んでるみたいね、ハイアームズ侯とも上手くいつてるみた

い。あとはB班の方だけど…明日の午前中にオルデイスに向かって合流かしらね。…
ん?通信…B班のチャネルからだ。

「はい、もしもし。誰かしら?」

『俺だ、ジェイル。マキアスことなんだが』

「ああ、どうだった…?」

『悪い、夕食ん時に爆発した。お説教、というか言い合いもしてそのあとはちよつと落ちてくれてたけど…やっぱ俺にこういう世話を見る仕事はできなかったわ。すまん』

「…そう、いえ、ジェイルが謝ることではないわ。そこに貴方たちを送った時から懸念していたことではあるしそれをあなたに押付けたのも私なんだから」

落ちて着けてくれただけでマシというものだ。あの子の痲癩はきつと続けば騒ぎになつていただろうに…。カールさんもあの時息子を信じ切ろうとしていた。苦々しい声でオルデイス、と告げた時私たちも後ろめたい気持ちになつたし…。

『一応、こつちに着いた時に貰つたカイエン公のお付の人に連絡して明日のマキアスの監視と、やばそうになつたらフォローをお願いしといた。俺達も頑張るけどもこつちで貴族の不感を買つた時大変そうだから、念の為な』

「ええ、わかつたわ。私も明日の午前にはそつちに行く予定だからその時にまた連絡するわ」

『頼むから早く合流してアイツの面倒見てくれ。…痛ッ、なんでこんなところに瓶の破片なんてあんだよ…結構血出てるじゃんか…はあ。ん、それじゃあ俺もそろそろ』

『ガッコンッ…』

「……ねえなんの音？」

『…さあ。最近港でコンテナが崩れる事件が多発してるらしいし、それなんじゃないか？とりあえず今は首突っ込んでもろくなことないだろうし、もう戻るよ。それじゃあおやすみ』

「ええ、おやす『ガシヤン』…全くもう」

恐らく通信を切らないでARCSを閉じたのだろう。通信を続けてしまうのはマニユアルに書いてあったのだし覚えて欲しいんだけどなあ。というかそもそも返事くらい待つて欲しい。

『ガッ…ガッゴゴ…ガッコン…』

「ああもう！おやすみ！じゃあね！」

めちやくちやうるさいじゃない…勢いで通信切っちゃったけど、今の音ってかなり近くなかったかしら。…妙なことに首突っ込んでないといいけど…。明日は予定より早めに行かないとダメそうね…。

「なんだこいつら……！」

ウフフ…アハハ…フフ…おいで…おいで！おいで！

こつちにおいで！もつと寄つて！ほらこつち！

おいで！

ようこそ、紺碧の海都オルデイスへ。海が綺麗だろう？でもね、昔から船乗りの間では有名な話なんだが、『海で聞こえた声について行ってはならないよ』。なんで…？さあ？精霊が何か悪さでもするんじゃないかい？

オルデイス3

特別実習 二日目

朝食を取り終えて、男子部屋に届いていた依頼内容を確認した。今日の依頼は商業区画にある商店の手伝いと、西ラングドック峡谷道の手配魔獣の対処。西ラングドック峡谷道は本来の行動範囲からそこそこ離れた場所で、そこに向かう依頼が含まれているために二日目の依頼は大きく減らされている、とのこと。

西ラングドック峡谷道に向かうには西ラマール街道を通っていかないといけないわけだ。私たちは昨日の依頼であそこを歩いたからなんとなくの距離感はある。

だからこそ往復するだけでかなりの時間を要することは理解していたので先にこつちで済む依頼はさっさと終わらせて、早めに昼食を取ってから向かうことにした。

「うん、よし。これで今日の予定は完璧だな。…む、なんだ？そんな顔をして…。僕にだって予定くらい立てれるさ、当たり前だろう？」

「いや、昨日あれだけ大騒ぎしたのに殊勝なものだなと…」

「なんだその言い方は!? 全く…」

マキアスもどうやら昨日から落ち着いたようだ。ジェイルが何を言ってくれたかは分からないけれど…帰ってきてから随分と悩んでいたらしい。幸い、今のマキアスは貴族に嘯み付くことなんてできないくらい頭が何かでいっぱいのように、今日については安心だ。

「いやあ済まないね…本来来るはずの人たちが一齐に寝坊をしてしまったなんて。元々依頼で任せる予定のものよりかなり多くなってしまったけれど、君たちの手際がいいおかげで予定通りの時間に終わらせることが出来た。ありがとう」

一つ目の依頼はお店の配達の手伝い。街中を走り回ったけれど、特に回りづらいという貴族街は外されていたから意外と辛くはなかったかな。依頼を始めて二時間した頃には皆が戻ってきていた。

そうして十一時頃、依頼を終えた後予定通り食事をとって西ラングドック峽谷道に向かった。西ラマール街道から分岐して、山間の道を進んでいく。一時間はかかっただろうか。このまま進めばラクウエルという都市に着くがここまで来たのは探索、ラクウエルには用はない。依頼書に書かれている場所はここを下った場所…そこそこ高低差があるせいで移動するだけでも大変だわ…。

「なん…!？」

下って目に入ってきたのはズタズタになった目標の手配魔獣だった。身体中に空いた風穴、崩壊寸前だからこそ消滅せずに残っている魔獣のおびただしい量の体液が襲撃者の暴力性を示していた。

周りを見渡すと、一切の魔獣の存在が見られない。つまり、この近くに魔獣たちを殲滅した何かがいるはず。私たちにとつてこの惨状は、私たちの代わりに軍が対処してくれた、なんて解釈をする余地も残していなかった。こんな跡、領邦軍が所持していないような銃火器でないとできるはずがない。じゃあ誰が？そう思っていた時後ろから聞いた声がかげられた。

「—— おや？なんだ、後でホテルの方にお邪魔しようかと思っていたけれど、手間が省けたようだ」

「なんだア？ならこいつがお前の言つてた標的か？」

「その通りだ、《V》。あの緑髪の少年がレーグニッツだ」

グランツさんだ。グランツさんだけど…昨日会った時より少し空気が違う。それに隣にいる人は？後ろにいる人達はどういう繋がりなの？それにこの臭いと彼らが背負っている物つてもしかして…まさか！

「…グランツさん、その背中の銃はなんですか…？」

「ん？ああ、こいつは軍で廃棄されたアサルトライフルさ。あそこは白兵戦の訓練ばかりするから射撃の腕が立つ奴があまり居なくてね…全く、せつかく性能がいいのを取り寄せたんだから使えばいいのに。もったいない」

グランツさんが銃のことについて教えてくれていたがこつちとしては気が気でない。あれと同じものを持った人たちがグランツさんの後ろに…五人も。後ろからも音がして振り向けば自分たちが下つてきた方からも四人ほど見えた。挟撃だ。だけど、彼らがそうまで襲ってくる理由は何？

「なぜ、俺たちを囲んでいる？昨日は全くそんな素振りも無かつたはずだが」

「コイツが昨日お前たちとどうしたか、なんて知らんがな。怪我したくなきゃその緑髪の方ちゃんをこつちによこしな」

「僕…？」

Vと呼ばれた者が言うには、彼らは鉄血に食いものにされた溢れ者の集まりだそう。鉄血は言うまでもなく宰相、ギリアス・オズボーンのことだろう。私も里を出てようやく外について知ったが、彼の取った強硬策は常軌を逸していたという。彼に対する復讐としてまず最初に革新派の幹部の息子を狙った、と言ったところだろうか…昨日の夜グランツさんが言っていたことも辻褄が合う。

「お前の父ちゃんが手を貸してるやつに痛い目を見てもらわねえと行けないからな。

ちよつと協力してもらおうって訳だ」

「ふ、ふん…随分とペラペラ喋ってくれるじゃないか。不用心にも程があるというものだけど?」

「ああ?そりやお前」

——絶対にするって決めてるからよ

Vが背負っていたとんでもなくでかい銃をこちらに向ける。他のものたちも銃口をこちらに向けてくる。アリサさんがボソリとミニガン、と呟いていたが私にはなんのこともだか分からない。ただ一つ、ピンチであることしか私には分からない。

でも。三月の終わりに出会ってもう二ヶ月が経とうとしている。確かに貴族嫌いが酷くて扱いづらく一緒にいて困ることがあったとしても、それでもそう簡単に仲間を渡す気は無い。

全員が戦闘が始まる特有の緊張感を感じ、*“誰か”*を中心にして私たち四人を接続する霊的な繋がりが生まれる。これが、前回のA班で報告されていた全員でのリンク…思考がとてもクリアになって言葉を持たせなくとも考えていることが読み取れる。

「——フフ」

「——チツ、なんだア!」

私が導力杖を起動し弾を地面に当てて起こした砂埃をガイウスさんが上手く槍を使いまきあげる。アリサさんが、相手から姿を隠してなんてちよつと不格好だけど、と苦笑したあと真剣な顔つきになり宣言した。

「VII組B班戦闘準備つ!! 私たちはこの危機的状況を打破し全員でオルデイスに帰還しますッ!」

できるできないではなく、するするという確かな覚悟。その凜とした声と意志に私たちは鼓舞される。きつと厳しい戦いになるだろう。■■■さんが居ないということは重要な近距離での戦力がかけているということ。後衛の私やアリサさんの補助が要になりそう…頑張らないと。

あれ?

「…クソつ、猪口才な」

「てめえら、構えろ。奴らは敵の目の前でわざわざ隠れたんだ、無策な訳や無えだろ」

武装集団が銃を構え始めたその時土煙が微かに光を帯び、音が生まれる。

「…………この音はオーブメントの駆ど——！」

その正体にVが気づいたと同時に煙の中からガイウスが飛び出し、Vとは逆方向、VII組の背後の集団に突貫する。土煙が収まった中から杖を構えて目を閉じるエマと導力弓を引く準備をするアリサ、ARCUUSを構えるマキアスが見えた。

「ぼさつとしてんじゃねえ！撃てエ！」

「デیفエクター————今です！」

「了解！」

射撃を開始しようとする戦闘員の内数人をエマが解析、リンクによってエマが妨害したい相手を理解したアリサがそれを射抜く。当然妨害しきれない射撃もあるが、現状戦線を荒らしているガイウスの方にターゲットが向いている。殺到する銃撃にガイウスは対処する様子はない。その必要が無いからだ。

「ガイウスくん、防御は任せたまえ！」

「頼りにしている」

ガイウスが飛び出す直前からアーツを詠唱していたのはエマではなくマキアス。彼がクレストをガイウスに付与することで銃撃は防御プレートを通することはなく衝撃程度に弱められる。その衝撃は馬に乗りノルドの大地を駆けてきたガイウスの強靱

な体幹を揺るがすことは無い。

初撃を成功させ相手を混乱に陥れたVII組は散開し、周囲にある岩場や木を利用して遊撃に徹底することにした。どこから飛び出してくるか分からない槍使い、いつ飛んでくるか分からない弓による狙撃、発生のタイミングが分からない魔法攻撃に妨害しようのない援護。ARCU Sの戦術リンクがあるからこそ可能な離れた状態での連携は前後合わせ二十人近くいた戦闘員を少しずつ減らしていく。初の対人戦、リンクという自分たちだけが持つアドバンテージ、戦況での有利、これらの要素が彼らに心の隙を生んだ。

このままなら行ける、勝てる、その思い込みが立ち回りに荒さと呼び込む。その荒さを見逃すほどVは甘くない。

「クソが……どこに隠れてやがる……！——どうだ、楽しかったか？」
「……え？」

ちやうどマキアスが隠れていた岩のすぐ近くにカラン……という音が鳴る。次の瞬間彼が味わったのはこれまで一度も感じたことの無い剛撃。転がされた手榴弾は岩を爆砕させそれでもなお威力を失わない衝撃がマキアスを襲った。石の礫と手榴弾そのものの衝撃は本来なら大怪我を負ってもおかしく無いはずのものだったが、マキアスに付与されたクレストとマスタークオーツ：キーパーがその威力を大きく軽減することでむしろ純然たるダメージとなつて彼を吹き飛ばす。

「あのよ、アーツの詠唱をするんならもつと離れないとだぜ？ オープメントの駆動音は案外うるせえんだよ。そんなにコソコソ動き回るんなら気をつけるよな」

「ゲホッ！ ガツ…ぐう…」

「士官学院にいるのにそういうのは教わらねえんだな。覚えとくといひぜ、アーツを使うんなら木陰だ。葉が揺れる音で誤魔化せることがあるからな。ま、離れられればそれが一番なんだが」

ニヤついているのが分かる声でゆつくりとマキアスにVが近づく。彼の首の襟を掴み持ち上げる。

「いやあ、ヒヤヒヤしたよ。最近の学生はこんなに戦えるものなのか…V以外は素人の集まりだから負けてしまうかと」

「嘘つけ。お前射撃の腕は素人の割には大したもんだぞ。軍に入ればそこそこ活躍できたんじゃねえか？」

グランツとVが軽口を叩き合う。マキアスを見下ろす二人に対し、マキアスは睨んだ。

「…っ！——なぜだグランツさん、昨日は、そんな素振りなんてなかったじゃないか…！」

「…まあ、確かに逆に昨日の夜君を君だと分からなければこうして行動はしていないね」

「それは、どういう」

「僕たちは革新派に反逆する集団、というのもそうだが、今回ののは僕の私情が強いかな」
「私情……？」

「僕はね、もともと帝都の商人だった。結構売れてたんだよ？ だけど」

—— 貴族が排斥されてから状況は一変した。

グランツは悠長に語り出す。VII組からしてみればありがたい限りだったが、マキアスはこの話を聞き流すことが出来なかった。

「カール・レーグニッツの台頭、とても素晴らしいことだった。商人として貴族の顧客がいたのも確かだが、彼らのせいでやりづらかったのも実際問題としてあった。これから事業拡大がしやすくなる、そう喜んだものさ。でも……平民というのは随分と薄情なものだね。奴らの貴族に向けていた嫌悪は、皆の生活を支えていた僕のお店に向くことになった。貴族の汚い金で儲けている商人めが！ とね」

「そんな……。……っ？」

「奴らは結局貴族だから嫌っていたんじゃない、自分より裕福だから嫌悪した。身分なんて二の次さ。だけど僕は納得いかなかった。—— なあ、レーグニッツくん。君

の家族はカールさんによって裕福になったけれど、何故か嫌われなかったね。私たちは程度での活動の中断を余儀なくされるほど追い込まれたのに君たちは……増してカール

さんは僕たちの様子を見て、何もしようとしなかった！」

「……………」

グランツの怒りに染った顔は一転、喜色を含んだものに変化する。Vはつまらなさそうに当たりを見渡している。彼らが移動する気配は感じたものの、目標のマキアスは拘束した。それ以上ことを起こす気も無いようだった。マキアスは顔を俯かせた。

「……………」この話、聞いたことあるよね？オスト地区から少し出たところ、カールさんも何度か利用してもらったよ。普通、そこらの人間が君を見て都知事の息子だと分かるわけがないだろうが。知っているとも、君たちの家族のことくらい。近しい、という気は無いけれど、ある程度関わりがあった私たちを見殺しにした。彼にはその報いを受けてもらう」

「…その話は、確かに聞いたことがあります。でも、僕にはどうすることも出来ないっ！」

「君にどうにかして貰う気はもともと無いよ。カール・レーグニッツを引つ張り出したら君を奴の目の前に突き出す。それまで黙って拘束されていればそれでいい。…まあ奴をカールさんを目の前にして君に手出ししないかは、保証しかねるけれど」

「…そうまでして父さんに復讐しないと気が済まないのか…!？」

「……………」私の、…僕の恋人は当時共に暮らしていた。幸せだったよ。今は…誰に

も荒らされることはなく、帝都の外れで安らかに眠っているだろう。全く……自殺、だなんて……そんな愚かなことしなくてもいいだろうに。————君たち家族のことは知っていると聞いたね。君が、この復讐を否定できるとでも？」

———
なあ、■■■■くん。君は、受け入れる必要は無い。受け流せれば、そう言ったよな。どうしても認めたくない相手が目の前にいる時、僕はどうすればいい？

思考にモヤがかかる。何となく言われたことを覚えているくらい。それでも、ただ分けるのは、目の前のこの人を認める訳にはいかないということ。

———
けれど受け流すことが出来ないと大人にはなれねえぞ

なら…それなら僕は――！

「イセリアルエッジ…！行って！」

「何…!?!」

突然向こうから現れた半透明な剣がVと呼ばれた男や僕を捉えていたグランツさん、背後の戦闘員を貫く。突然の攻撃そのものに慌てふためく戦闘員、初めて見る攻撃に素直に驚くV。拘束が弱まったのを感じ急いで飛び出した。木の裏と岩の陰から三人が出てくる。

僕がグランツさんに話しかける直前から、この状況を打開するイメージは繋がりに続いていたリンクを通じて伝わってきた。だけど、彼の話には僕は耳を傾けなければならぬと思った。必要以上の我慢を強いてしまったこと、後で三人に謝らないとな…。

「やるじゃねえか…嬢ちゃん、それどうやったんだ？教えてくれよ」

「…秘密です」

目の前で行われるやり取りにも先程まであった特有の緊張が戻ってきていた。僕は今持てる限りの感情全てをリンクに乗せる。皆が僕に目を向ける。そして、頷いた。

「今度は手加減無しだ。ぶっ潰せエ！」

「――うおおおおお!!」

「ARCUUS、駆動…！」

「こつちも…ARCCUS！援護任せたわよ！」

「了解した」

突貫。さつきまで補助にまわっていたのはなんだったんだった？知るか。僕はグラ
ンツさんのあり方を認める訳にはいかないのだ。それが例え、そう——同族嫌悪
だったとしても。それでも決してその在り方を受け流す訳には、見過ごす訳には行か
ない。だってそれは僕の父が見逃した苦難。そして僕が通った道。

敵の照準の甘さに漬け込んで一気に潜り込む。教官が教えてくれた。僕のゴム弾は
本来の殺傷力を無くした代わりに、制圧力が跳ね上がっている。教官お墨付きの制
圧力で一気に二人を行動不能にさせる。

僕が逃した相手は後ろで待機しているガイウスくんが対処してくれる。後ろは安心
している。…正面、敵七名！一気に近寄り、散弾をかましてやる…！

——不思議なことに、より感情的になって生まれたこの戦い方こそ教官が想定し
ていたものだったというのは後で知った。■■■■■くん、僕を前衛に据え、ガイウスく
んを遊撃、アリサクくん、エマくんを後衛に置く理想の布陣。これを僕たちは偶然完成さ
せていた——

「うおおおおお！！」

「ぐっ…行かせるか…!」

何人かを倒したものの、その内の一人に制服の上着を掴まれてつんのめる。だけど、絶対に歩みは止めない。

「邪魔を…するな!」

銃身で上着を掴んだ人の肩辺りを殴るが離さなかつたので、散弾銃を手放し、上着を脱ぎ捨てる。邪魔なやつは倒す。邪魔なものは取っ払う。それだけだ。

「——!」

「ああア!」

Vの横は素通りする。予想外、というような声を出しているが無視だ。グランツさんを目前に左脚を踏み込む。

——受け流さなければ大人になれないというのなら僕は、ガキのままでもいい。ガキでもいいから、この目の前のもう一人の自分のような気に食わない相手を殴り飛ばしたい——
!!!

「クレストツ!」

「フォルテ——! やつちやえ、マキアス!」

殴り方は見よう見まねだけれど、援護も受けたのだ、十分威力は出るだろう。クレストによって表面に硬質な膜を展開、フォルテで筋力の増強。左脚に体重をかけて腰を回

す。その勢いに合わせて右腕を振り抜く!!

「るオオオあああ?!?!?!」

「ゴツツツツツツツツツ?!?!?!」

例え身勝手でもいい。僕はこの目の前の気に食わないやつを倒すために、我を押し通す。貴族嫌いを柵に上げて、貴方のその復讐心は間違っていると。これに、正義や正しさなんて関係ない。ただ気に食わなかっただけ。こうして僕の仕返しは成功に終わった。

「チツ、ここまでする気はなかったがちよつと痛い目見てもらおうか……!」

殴り終え力が抜けたせいかへたり込むマキアス、アーツの詠唱直後で隙だらけのアリサとエマ、別の戦闘員の対処をしていたため離れていたガイウス、彼らを攻撃するのは簡単だ。Vはミニガンを構え撃ち始める。始めは反動の影響か狙いが定まらなかったものの、扱い慣れた武器なのか直ぐに落ち着く。マキアスはグランツの思惑に関わらず

人質として扱うため却下。ならば…。

アリサとエマに着弾する、と思われたその時、辺りを紫色の稲光が奔った。その正体はサラだった。

「私の教え子を傷つけるのは勘弁してくれるかしら？」

「…時間切れか。クソ…！」

Vは煙幕を撒いた後、どこからか現れた仲間と共に動けなくなったもの達を回収し、煙が晴れる頃には銃撃の傷跡だけが辺りに残っていた。

サラにこれまでの顛末を説明し彼女の頭を痛めさせた後、彼女は朝から連絡が着かず困っていた悩みの種の話をし出した。

「——ちよつと姿が見えないのだけど、ジエイルはどこかしら？」

『あ、れ——？』

オルデイス4

『あ、れ——?』

「ちよつと、あなた達…イジメとかしてないでしょうね?」

「し、してません!でも…あれ…!」

B班の者たちがサラの言葉に慌てふためく。いわれのないいじめの疑いをかけられたことよりも、そもそもジェイルがこの場にいらないことそのものに驚いているようだった。その様子を見て違和感を覚えたサラは状況を確認した。

「…最後にあなた達がジェイルを見たのはいつ?」

「…昨夜の夕飯だ。思い返してみれば、ホテルの部屋には戻ってきていない…」

「なんですって?昨日ジェイルが私に通信を寄越した時は…夜の十時頃。それからもう十二時間以上経ってるわよ…それまであなた達は一度もジェイルを気にしなかったっていうの!」

サラの言う通りだ。どれだけその事実を信じたくなくとも実際サラに言われるまで、一度もジエイルがいらないことに違和感を覚えなかった。アリサやガイウス、マキアスは困惑して考え込む中、エマの顔色が段々と悪くなっていく。

「エマ？ちよつと、大丈夫？」

「——オルデイスです……！オルデイスに戻らないとっ！」

「何よ……これ……！」

オルデイスに戻った一行は街に入り、その光景に思わず足を止めた。街に戻り目に入ってきたのは呻く子供、屋台に突っ伏す店員、街中で倒れる大人たち。とてもじゃないが普通とは言えない。

「あなた達の所に来るまでこんなことにはなつてなかった……往復もいつて二時間よ……!? この時間の間に何が……」

「おじさん、大丈夫ツ!？」

今ちようどふらりと倒れた男性に急いでアリサが駆け寄る。何度か強く身体を揺ると男性は大きく咳き込んで起き上がる。

「おじさん、無事……?」

「うう……ん、む、知らんうちに寝てしまっていたかな……。おや、お嬢さん方どうされたかな?」

「えっ?あ、いや」

男性は何も無かったかのように起き上がり歩き始める。あまりにも普通の返しにアリサは何も言えず、なんでもありません、と一言かけ離れてしまった。メンバーも辺りで倒れている人に駆け寄り対処にあたる。

「何なの?これ……今のおじさんだつて普通じゃないでしょ!エマ、そつちはどう!」

「——皆さん、戦術リンクを」

「……え?」

エマが主体となって戦術リンクが起こされる。サラを含めた全員にリンクが行き渡つたと同時に人々の背後にかかる蒼いモヤがかかっていることに驚愕する。

「これつて……アーツ……?でも私の知るアーツにもこんなのは……」

『碧のオンディーヌ』……! 《オンディーヌの呪い》ですッ!倒れている人の中でも、蒼いモヤが濃くかかっていた人は呼吸が薄いか、もはやしていない状態でした!」

「オンディーヌの呪いって、無呼吸症候群の通称、だったかしら？でもどうしてそれがこれと繋がるの？」

「オンディーヌの呪いの由来はオンディーヌという精霊に纏わる伝承です…。昨日あの像を見た時に気づくべきだった…オンディーヌの伝承にある呪いは本来なら無意識でできていたことが意識しないと出来なくなるといふものです。そこから転じて意識すべきことが意識できなくなる呪いであるとされることもあります。——私

たちは普通なら気にすることが出来る仲間の消失を気にしようと思えなかった。倒れていく人達は苦しそうでした。普通息ができないならしようとしませんが、なのにとともにしないまま倒れて行った。これは間違いなく——！」

エマが顔を青ざめさせたまま早口で捲し立てる。けれど話の内容はあまりにも突拍子もない、冗談話や怪談を素直に信じるようなものだった。サラがエマにブレーキをかける。

「落ち着きなさい、エマ。そんな唐突な話、信じようたって無理があるし…たかが伝承よ？この状況で思考が纏まらないのはわかるからとりあえずは落ち着くこと。いい？」

「…いや、教官の言葉に反する訳では無いが、この風は悪しき精霊と同じ。エマの話を一蹴するのは難しいと思う」

ガイウスがエマのフォローに回るが、二人が話していることはあまりにも感覚的で共

感するには証拠が足りない。しかしその証拠をカバーできるのが戦術リンクだ。二人以外が感じられない違和感をリンクを通じて他の三人に伝播させる。

「それに何より…ジェイルさんが確かにいるんです…！先の戦いでリンクでは違和感程度しか感じれなかったのに…今は確かにジェイルさんが分かるんです…っ！この街の中のどこかかけ離れた場所、そこにジェイルさんが——！」

全員でのリンクはVとの戦いでも実現させていたし、今も発現させている。そしてその時感じた違和感はジェイルの存在に他ならない。ならば、彼は今どこにいるのだろうか？

———
少し前

———
VII組B班戦闘準備っ!! 私たちはこの危機的状況を打破し全員でオルデイスに帰還しますッ!

「がっ…っ！はあ、はあ、はあ…ここは…？これは、昇降機？」

俺が目を覚ました時、あたりは一面の青、蒼、碧。まるで海の中のような景色だった。

上から差し込む光がその錯覚を加速させる。そして俺が今いる足場はものすごい勢いで下に向かっていく。

《第十三拘束解除——》

「は？」

《第六十八拘束解除——》

《第四百三十六拘束解除——》

「おいおいおい——！」

意味のわからないアナウンスが流れ続ける。アナウンスの数字が大きくなればなるほど上から差し込む光が弱くなっていく。辺りは黒く染まり始める。これは俺の目がどうかじゃなくて純粹に暗くなってるんだ。

《第■■■■■拘束解除——》

もはや数字という概念がなくなり始めた。周りももう色がなくなり真っ黒になる。

《最終拘束解除。試シヲ起動シマス》

「グうううううう!!？」

先程まで最高速で下に向かっていった昇降機が突然ズン：と止まったことによりえげつない重圧が身体を軋ませる。周りに光は灯ったがそんなの二の次だ。死ぬほど身体が痛い…。

何とか動けるようになり扉を抜けると真っ青な海の世界が広がっていた。目前には海底の砂が広がっていて、木製の船が突き刺さっている。まるで、船乗りたちの墓標のようだ。

おいで

「――」

眼鏡を急いで投げ捨て見えた黒い線を、切りたかった。眼鏡を放つて周囲を見渡すと寒気がした。――線がない。ここに、死は存在しない。眼鏡をかけていない俺の目が普通の景色を見ているという事実が何よりもおぞましい。

おいで！こつちよ！この先へ！

彼女が待つてるわ！ようこそ！そう、あなた！

そして思い出した。昨夜俺を昏睡に叩き込んだクソ野郎、いやクソ女共。青い綺麗な長い髪、ハリのある、それでいて青ざめた美しさと不気味さを共存させた肌、身体を隠すベールのような衣。しかし、俺は奴らのあの愉快そうな声には人をバカにするような

嘲笑を含まれていることを分かっている。

俺はこいつらの死を見抜くことは出来なかった。あの港で、奴らに為す術もなく眠らされた。今も状況は一切変わっていない、このままなら俺はまた眠らされる。ただ、昨夜とは違い、襲いかかってくる様子はなくどちらかといえば奥に誘うように俺の前を漂うだけだ。奴らを物理的に傷つける手立ては無いし、死を見ることがも叶わない。この先に何かがあるか身構えながら、俺は墓標の先へ行った。

——不思議だ。

『……………』
『!?!?』

何かが、俺の横を駆けていく。俺を挟んで反対の何かと言い合いをしているように見えた。…今、俺を言葉通り、通り抜けていった何かが居た。見える限りだと…六、七人程だろうか。何となく透けた人の影としか認識できないものの、慌ただしく奥に進んでいく彼らに釣られて、俺も駆け足になる。

『……………』
『……………?』
『……………!』

『それではあなたの言う通り、ここに封印し次の代に彼を繋げることにしましょう。——
——これまでお疲れ様でした、当代の ■■■よ——』

その言葉を聴き終えた時、もう何かの姿はなかった。——何だったんだ、今のは。何とか聞き取れた言葉もあれだけじゃなんなのか分かりようがない。何を封印した？ 誰を繋ぐ？ 当代の何だ？ お前たちは誰だ？ 全部分からない。

『試シマ起動シマ試試シマス起動動試シシマス起起試シシシシシシシシシ』
「!?!」

最奥にたどり着いたというのに何も無く仕方なく戻ろうとした時、機械的な音声と共に——いや、もはやおかしくなっているが——辺りが光輝く。何とか目を開いた時には先程までの構造物は無くなっていた。あるのはただ、海の底と突き刺さる船の残骸、そして——

La —————

極大の怪物だけ。

……いや待て待て待て待て……！ 何だあれ！ デカすぎるだろうが！ あの女どもが彼女って言うからあいづらがヤバイ感じになってたのを想定してたけどこれは……！

奴が上げた声とそのフォルムは捉え方によれば女性的だったかもしれない。甲高い

が耳障りではなくあいっらのような嘲笑の含みもない。概形しか分からないがおそらくはその形通りしなやかさを兼ね備えているのだろう。彼女という呼び方は言い得て妙、意外といい線言ってるんじゃないか？

だけどそういう問題じゃない！あれはまるで、女神のような安らぎと嵐の海のような荒々しさを内在させたチカラの奔流。

透き通った青と緑が混在するあれは、蒼。奴の中心から無限に湧き出るエネルギーによつて身体が揺らめき、次々に形を変える。——突然、形が定まった。ほっそりとした全体像、背に三対の翼のようなもの、手の部分に錫杖。

L a a a a a a a a a a a a a a a a

「——やるしかない、か。死も見えず、明らかに格上。足場は砂で挙句相手は正体不明。クソが。燃えるじゃあないか……！」

やるしかないのだ。俺を眠りから叩き起した彼らに報いるためにも、俺は勝つてオルデイスに戻らなければならぬのだから。

試し、いいじゃないか。こいつを超えなければ俺の程度も知れたというもの。俺だつて、伊達に旅をしてないのだ、そう易々と殺される気は無い。この試練、乗り越えてみ

せるとも。

La:

短い声と共に錫杖を横ぶりする。俺にはどんな間違いがあつても届かない位置で振られたそれはあまりにも巫山戯た形で影響を与えてきた。

それは背中を押し、錫杖の通つた道に俺を押し込もうとする突風。本気で踏ん張れば耐えれたであろうが、不自然過ぎる風に気を取られた俺はたたらを踏み、逆にどう足掻いても攻撃をくらつてしまう距離まで近づいてしまう。

「しまっ——！」

今度は突き。身を振り何とか肩を掠めたが回避すると、今回も確かに風を感じた。先程より弱く先のことがあつたために警戒したいたので今度は持ち堪える。

次に輪がある方とは反対側で地面をコンコンと叩くと先程の女共が現れた。ただいまだの待つてた？だのと口々に言っているが、お前らに構っている余裕は無いのだから後ろで控えていただきたい。

今俺の中でぐるぐる回り続けていることは、さつきの風だ。そもそも杖とはいえたかが棒を振つた程度で風が起きるのもあれな話だけれども、こちらを引き離すような風が吹くと思つていたので。結果は真逆、まさに引き寄せる風だった。

あんな不自然な風はアーツのような力が働いていないと再現できないだろう。ならどの属性だ？

火、…熱によつて風を起こせないことは無いだろうがあの時そんな温度変化は感じなかった。却下。

水は……風……？何か関係あるか？どつちかといえれば火の方がまだ……。無しだな。

次は風、安直に考えれば一番妥当な属性だな。風属性には雷に関係するものもあるからそれが見えれば確定、今は保留しよう。

地。うん無い！こいつの攻撃の仕方からしても見た目からしても明らかに地属性を使役する魔獣の剛毅さは感じない。

「くそつ……着いてくんじゃねえ！」

待つて、逃げないで、と呼びかける女の声がある。港では奴らを倒そうとしたからこそ俺は追い込まれた。なら今は無視が安定択、ひたすらに戦線を下げる。

正直属性は基本の四元素からさつき起きた突風の説明はつきそうになかった。――

——これはもう、上位三属性を考慮しなくてはならないかな……。

上位三属性とは時、幻、空属性のことだ。魔獣を倒した時に発生するセピスから四大元素とは別の三色のセピスが見つかったことにより発見された三つの属性は、あまりに

特殊な性質を持っていた。他の四大元素と違い、普通では認知のしようがない概念的なものだった。それぞれの属性が持つ特性はつかみきれていないが…それでも考慮しない事には始まらないか。

時。時属性は言葉通り時を操る属性だ。俺たちはクロノドライブやクロノブレイクといった、自己または相手の時間を歪めるアーツを利用するが、それを強力な力を持った魔獣が扱えばどのようなようになるだろうか。

横薙ぎを極限まで加速させて通り道にあつた空気を押し退ける。空気が限りなく少ない場所に周りの空気が殺到したとするなら、有り得るかな。いや、そんなことをしているなら俺が奴の動きに追いつけない…分かんないなあ…。

かまって！ もっとこつちを見て！

「昨日は周りが見辛くて弾以外を殺したら不味いなって思ってただけだ！今ならそれくらい殺してやる…！」

奴らの主な攻撃手段は光球の射出と突進。突進は衝撃を殺せるし、光球の方は、昨日は夜だったために弾の認識ができず、無闇矢鱈に殺すのもあれだな…と思っていたものの、今は簡単に見切れる。もはや奴らに驚異は感じない。再び思考に沈む。

幻。幻属性はこれまた説明が難しいが、認識を歪める力…とでも言うのだろうか。攻撃アーツは幻想的なものが多く、補助アーツは不定形存在——特に魔法攻撃か——が自

己に干渉するのを拒絶するものがある。奴が攻撃とはまるで無関係な風を俺に幻覚として見せた。無くはないが可能性は低そう。

なら空か。こちらはアーツから概要を把握するのは難しいんだが、ダークマターという攻撃アーツを代表とする空間に作用する力が確認されている。研究者たちの間では未だにホットな話題らしい。だけど空間に干渉するのがどうやってあの風に繋がるというのか…？

L A a a a a a a a a ———— !

「遅せえ。…時属性はないな…———!?!」

杖を横に大振りする。俺は飛び退くことで回避したが、そこには俺と戯れていた女共が居た。奴は女共を巻き添いにして、そして消し去った。顔と脚だけが残った女達は最後まで笑っていた。

ゾツとしたと同時にこれで確定した。奴は空属性の行使者だ。一切の音もなく、溶けるように彼女達を消したあれは、間違いなくあそこの空間を吹き飛ばしたなり削り取ったなり…干渉したんだろう。

今回の横薙ぎも突風が吹いた。消したという解釈が合ってるなら、何も無い空白のどこかを補完するために、一瞬で周りの空間が作用して元々周りにあつた空気が風となつて襲いかかる。そんなところだろうか。先程掠った肩を見ると、たしかに服が破け

る訳では無い奇妙な無くなり方をしている。

——— ！奴を含めたこの世界全体に黒が差し始めた。いつもなら気分が悪くなる光景でも、今の俺には安堵を齎してくれた。突然死が生まれた理由ははつきりと言えないけれど：奴という得体の知れない存在の一端を理解したことで死に一步近づけた、そう思うことにしよう。

奴がブンブンと杖を振り回すかもはや種は割れた。杖の攻撃そのものに驚異はなく、当たらなければいいだけならば余裕も余裕よ。

馬鹿か俺は。最初にコイツに出会った時に感じた異常さを、歪さを、驚異を覚えてないのか。そんな油断をするからほら———

Lu———

「腕を無くすんだ。
足元を掬われるんだ。」

——ピーピーピー——

オーブメントの機械的な呼び出し音が鳴る。昼休みもまもなく終わるといふのだからやめて欲しいんだが…。

「もしもし、こちらクロウ・アーム——」

『ク、クロウ？良かった…繋がったわ…。急で悪いんだけど《蒼》を私に預けてくれな
い？』

「ちよ、馬鹿！俺校舎内だぞ…！預けるとかそういう問題じゃなくてだな…その話をこ
こでするのは…！お、おお！わりい！通信来たからちよと抜けるわ！」

学友に声をかけて急いでその場を離れる。突然の通信すぎてめちやくちや焦ったが、
とにかく事情を聞く。

「どういうことだ、ヴィータ。何にあれを使うってんだよ」

『そ、それは…その、メンテナンスよ！そろそろもう一、二月で仕掛けるでしょう？たま
たま今日の予定が空いたから今のうちにやっておきたいの』

「メンテナンス…？それ二週間前もしたじゃねえか。なんでまた」

『いいから！貴方なら念じるだけでこっちに飛ばせるでしょう？早くしてよね！』

今日預けないと二度とメンテナンスしないわよ!?!いいの!?!』

「わ、分かった分かった！通信切ったら送つとくから！つたく…頼むぞ!?こんなことで見限られたらたまつたもんじゃねえ…」

『メンテナンスはしつかりしておくからこっちは気にしないでいいわ。ありがとう！それじゃあ失礼するわ!』

ブツツと通信はあつさり切られた。…何だ今の嵐…最近になってちよくちよくと見かけるようになったあの不安定なヴィータを思うと不安になる。…あつ!やつば午後のコマ始まつてんぞ!クソつ!あのアマ許さねえ…!

*

「なあ…」

「ん?」

「クロウって去年学院から借りてたオーブメント返却したよな」

「ん、そうだな…あれ?なんであいつオーブメント持つてんだ?しかも見た目真っ黒だったし…カスタマイズ禁止されてんだよなあって、あいつ言つてなかったか?」

「不思議だな」

「なあ」

E x c e e d !!

何かが、つぷりと腕に入り込み、僅かな清涼感と身体の中に異物が侵入する嫌悪感が入り交じって。

「ギ———!?!」

そして爆発。左腕が二の腕の半ばからぼとりと落ちる。突然の激痛に声すら出ないが、それでも、何が起きたか分からない以上痛みに耐えながらその場から離れることしか出来ない。

一体何が？俺が覚えているのは小さな声をあげたということだけ。走れ走れ走れ！足を止めるな！いつ何かが襲いかかってくるか分からないんだぞ……！駆けずり回れ、何も見落とすな。死に物狂いで見つけ出せ———！

…また声をあげた。目を凝らせ。わずかでも死が見えている今なら予兆くらい見え

るだろうが……!

「見えた……!!」

そこそこの速度で迫ってくる、思わず見落としてしまうほど小さな雫がこちらに飛んできて見えたのが見えた。それが向かっている方向は紛れもなくこつち。何とか線を捉えそれを殺す。

瞬間、爆裂。咄嗟に右腕で身体を庇うが衝撃は受け止めきれない。衝撃に晒された部分の肉が弾ける。全くもって理解が追いつかない。何が弾けた? 俺が殺したのは雫じゃないのか? ……ツ! また飛んできた。駄目だ、脚が動かない……! ——動かない? 馬鹿なこと言うんじゃない。動かねば死ぬ。動かないならば動かせ——!

L U u u ——!

声に合わせて雫が弾ける。無理やり動かした脚は何かそこから離れることが出来、衝撃は届くものの吹っ飛ぶだけで済んだ。それより……。

あの雫が崩壊して、出てきたのはただの水……? 俺は水ごときで左腕を落とされたと? 頼むからほんの少しでも俺が理解出来ることをしてくれないか?

何とか起き上がったが痛みには耐えきれず片膝をつき蹲ってしまった時、足首ほどまで波が打ち寄せているのが見えた。

波? 奴が俺に雫を見せたのは今の一度だけだ。仮に俺の腕を破

壊した攻撃が同様に水による攻撃だったとして、たかが雫程度の大きさの水がここまでなるか？

LUuuuu——

「また…ッ!」

必死に足を動かす。バシャバシャと水の音が鳴るのが妙に頭に響いた。足首程度の水位でも、鈍りきった俺の脚にとつてそれは巨大な障害となる。とても聞き心地のいい音で弾けた雫は、不快にも程がある肉が破裂する水音を鳴らした。

被害状況は、左腕の消失と横腹と右大腿部の肉の崩壊。増加し続ける水に浸かっているのとは別に、出血多量で体温が下がってきている。行動限界はいつ来るか。それを何となく考えることもできないくらい思考能力も低下してきている。それでも。ようやく分かったのだ、雫と水、攻撃の正体が。

Lu::

「…っ、随分と殺す気満々じゃないか」

俺はこれまでそこそこの数の魔獣と戦ってきた。その中での経験則として基本的に魔獣は四元素の内どれかひとつを行使しているということ。そしてどの魔獣もその属性以外を使うことなんてなかったのだ。上位三属性を役する魔獣なんて初めて遭遇するのだから、そんなのは法則ではなく憶測でしかないだけだな。

こんな異常事態に陥っているというのに俺は経験則を捨てることが出来なかった。この存在はこれまでの全てから外れたものだ、これから見るものは全て俺の知らないもの、そう思えば良かったのに。

話を戻そう。そう、こいつは上位三属性を行使する魔獣、を超えたいわば上位存在だ。まあ一切魔つぽくもないし獣つぽくもない。結局のところ、こいつは空属性の他に水属性を行使できる存在だったというそれだけなのだ。

L u a a a a a a a a a a ……

「もう腕は無いし脚も動かないよ。弱いものいじめは駄目じゃないか?」

答え合わせだ。奴は超大質量の水を空属性で極限まで封じ込め、極小の水弾にしていたのだ。腕が落とされた時何かが入ってきた感覚があった。俺の毛穴から入れるほど小さな雫に封じ込められる水の量は限度があったのだろう。結果、俺への被害は腕を爆散させる程度に納まった。

次に攻撃について。たしかに水が開放された際に起きる威力は凄まじい。だけど水によつて与えられたダメージにしては被害が甚大過ぎた。あれは、解放された水に圧迫された空気が起こした衝撃波。空の力によつて限界まで質量を抑えられた水は、内に膨大なエネルギーを秘めていた。それが、空の膜が破れ一斉に溢れ出たならばあとと言わずもがなだろう。

「お前のチカラに比べたら塵屑同然だ。何をそんなに全力で潰しに来るのか、全く分からないな」

何故そんなことが分かるのか。簡単だ。俺が吹き飛ばされる時に見えた死はダブつていて、その時既に水は解放されていた。つまりは水と俺の間に空の力以外の何か挟まっていた。どう考えても空気しかないのだから、あとはヒントを組み合わせるだけだった。

ようやく結論に至ったが、奴はもうこつちのことなんてお構い無し。先程までの美しい声とは違い、歯ぎしりのような音を立てて攻撃の準備をしている。

シャボン玉のような空の雫がこちらに迫ってきているのが見えている。あの雫が俺のどこに当たろうともはや死は免れないだろう。

∴ u

「………そうかい」

今まさにあの雫は目前に。

諦めろ／抗え

死は避けようのない結末だ／生を擦り切れるまで謳歌しろ
それでも避けてしまえば／乗り越えられないならば
お前は

穏やかに空っぽの生を送るのだ／壮絶に凄惨に死にたまえ

パン、と小気味いい音が鳴る。空から零れ落ちた涙はその者の終わりを祝福した。

———
お前たちは誰だ

———
誰が死んでやるものか

———
誰が言う通りになるものか

駆ける高揚。柄を握り閉めた手ごと、俺の脈動は得物にまで伝わっていた。

……はあ、呆れた。もう少ししっかりしていただけですか？

身体が限界を超えて稼働する。もはや補助する筋肉も無いというのに脚は前へ前へと動かされる。骨が軋んでも歩は止めない。

ただひたすらに前へ、前へ、前へ、前へ。

先月から何も変わっていません。これなら出会った時の方がマ

シでした。

これまで以上の速度で飛ばされる雫は殺す。目を凝らし右腕には力を張り巡らせる。

一撃、水を包む空の圧を殺す。

二撃、膨張する水に耐えきれず発生してしまった暴力的なまでの衝撃波を殺す。

三撃、それでもなおこちらを押し潰さんと流れてくる水を殺す。

前へ——！

貴方ごときではこれをどうにかすることなんて出来ませんよ。

それでも生きて帰るといふのなら

錫杖の横薙ぎは何とか跳んで上を通り抜ける。着地の衝撃に脚が耐えられず崩れ落ちるが、片腕片脚を使つて這つてでも進む。上から振り下ろされる叩きつけは俺に終わりを突きつけた。

それでも、前へ――！

――貴方の限界を知りなさい。貴方のできることを思い出しなさい。所詮貴方は貴方でしかないのですから。

――俺は、何が出る？

――そうですね、今貴方ができるのはせいぜい死を見ることぐらいかと。

襲いかかる杖の先、奴を見上げてあの姿を目に焼きつける。あの子は一体何を言っているんだか、あいつの死は相変わらず僅かにしか見えない。これでどうしろと？

『もう、終わりだ。武器もまともに握れないのどうしろと？』

今、あの杖は俺に到達する。女たちを消したあの杖だ。俺も消えてしまうのかな。――

――違う！見ろ、奴の死を視るんだ。あの化け物がかつて受けた死の烙印を、これから奴が受け入れる死の結末を、俺はこの目で見通す……！

『すまん、■■■■。お前に選ばれても結局、ただのガキの地団駄だったのかもしれないねえ』

――そう、貴方ができることはそれだけなのです。積み重なった死の再演と絡まった死の縁えにしの固定化。それすら出来ないのなら未来はありません。では貴

方が終わる前にさっさと終わらせてくださいね？

『でも、それでも……！諦めたくないんだ……ッ！』

これは過去。姿も見えず声も分からない。何を言っているのか、何となく言葉だけが聞き取れる。感じ取れる邁進の意志。かつての者もギリギリの戦いだっただろうか？

『そう、だからこそ貴方を選んだの。自分の間違いを受容し、その上で前に進む意志を持つ貴方を！だから、行って！』

力が湧き出てくる。そして、死の線とは別に奴の身体を包むモヤが見えた。そして何か、これでようやく立ち向かえるのが分かる。

柄を力強く握り締めて起き上がると同時に叩きつけを弾き飛ばす。これまで随分とシバいてくれたじゃないか、仕返しくらい覚悟してるんだろうな？

『—————ありがとう■■■■■。今決めてくるから治療の準備をしてくれると助かる』

腰を低く、両手で柄を握る。襲いかかるは杖の横薙ぎ。一方の刃でそれを受け止める。受けた衝撃を利用し奴の眼前まで跳び上がる。

もう一方の刃を奴の顔に振りかぶって

ウンディーネ／オンディーヌ

「おやすみ、蒼の試練———海の精 霊よ」

ようこそ、選ばれし英雄——

顔を覆い尽くすぽつかりと穴を開けたような大きな黒い点を貫き、静かに暗い海に溶けて行つた。空が崩れ落ちていく。足元の砂が零れては消えていく。世界が死んでいく光景を見れるのはどんな人生に置いても普通は無い。目に焼き付けておこう。いや、目に焼きつけるしか無いのか。——脚が動かないから。

奴に言つた言葉、案外俺にも当てはまつたようだ。おやすみ、世界。俺はここで眠りにつこう。

*

転移を使ってオルデイスまで跳ぶ。やはりと言うべきか状況は最悪だった。トリス

タからですらわかるほどの地脈の揺らぎ。あの子が実習でどっちに行っているか知らないけれど、慌てふためいているに違いない。

『ヴィータ、我ハナニヲスレバヨイ』

「貴方が元々いた場所に飛ぶの。貴方が居ないと座標が定まらないから…正直なところ、貴方が居るだけでいいのだけど…」

彼と一対一になることはメンテナンスの時くらいで珍しいので、どうしても口数は減つてしまう。

特に話すことも無く地脈の揺らぎを辿つて、どの座標からも浮いた特別な空間を探知する。そこにオルディーネの精霊の道を使つて直接通り道を作るといふ算段だ。

『ム……』

「どうしたの？オルディーネ。何か異常が？」

『試しガ活性化シテイル。くろうガ契約シタ時トハ比較ニナライチカラダ』

「そこまでののは予定外だけれど…大丈夫。そのために私たちが来たんだから」

そう言つて試しの場に着いた時、さすがに甘く見すぎたと自分の愚かさを呪つた。そこは既に戦場。濃密な血の匂いと上位属性による場の揺らぎ、そして…そして、無傷でダブルセイバー双刃剣を握る彼の姿があつた。

彼が対峙するのは蒼色のチカラ、のはず。明らかに姿形は違うけれど。本来最後の試しは騎神を模した、いわば騎神の影とも言える姿を取る。しかし私の、そして彼の前に居るのは、まるでドレスを着た女性に近い造形をしていた。

武器も直剣から杖に変わって、挙句私たち魔女がまともに詠唱を要するようなものを杖の一振で行っていた。属性の複合魔術は手間がかかる。それをあの一瞬で行うのは、世界に僅かに存在すると言われているロストアーツくらいだろう。それをぼんぼんと放てるのは無尽蔵の霊力供給のおかげか。

——、嘘でしょう？…彼に魔術的なブースト、しかもあの性質は私の…！それにあれは最後にクロウが倒した時の構え。まさか…。

そのまさかだった。彼は自力で、クロウの時の試しの終わりを再現した。いや、相手にすらその時の動きを強要させたあれは台本を投げつけて無理やり舞台にあらがせたような…もはや再演と言うべき所業。

結局、クロウと全くもって同じ動きをしてあの蒼色のチカラにトドメを指した。あれが放っていた力場も無くなり残ったのはやっぱり、というべきか満身創痍の彼。当たり前よ…私や婆様が消耗せざるを得ない相手を、まだ力量を出し切れていない一学生が相手取ってしかも勝つ。そこにはそれなりの、または致命傷を負ってしまうのは自明。

うっ…さすがに冷たくなった血まみれの腕を持つのも、あばら骨や大腿骨が見えてる

身体を触るのも気分が悪くなるわね……。あ…私があげた眼鏡も無くして…全くもう…。

『ソノ少年、モハヤ死ニ体ト見ルガ』

「あら、あの時のクロウも治したのよ？それにこんなに血が通っているんだもの。まだ死んでいないなら治せるわ。だって——」

彼の身体の傷口から断続的にプシュっ…プシュっ…と血が吹き出している。こんなにも心臓が脈動し、生きたいと叫んでいる身体くらい治せる。なぜなら——

「だって私は魔女だもの！」

オルディーネの視界には年齢不相応な茶目つき気に満ちた笑顔が映っていた。

*

目を覚ませば地下水路の入口にいた。エマが一人先行して俺の元へ、他のものたちも後ろからやってきていた。皆必死の形相で俺の元へ駆け寄っては口々に良かったと言っていた。

俺からしてみれば夜危機に陥って目を覚ませば海の底。死闘を乗り越え言葉通り死んだと思えば真昼間。みんなに状況を聞かれても俺もわけが分からないとしか言えな

かった。

それに、袖やストラックスが破けているのも不格好で、血が滲んでいるのも皆からの、特に女性陣からの視線を鋭くさせた。

「君は……全く……。僕達と離れている間に何をしてたんだ」

「そつちはそつちで、結構スツキリしたと言わんばかりの顔だな？」

「む、フン……。僕も僕なりの成長があつたのだよ、あまり舐めないで貰いたいな」

マキアスは俺がいない間に一つ壁を乗り越えたようだ。ガイウスは何も言つてこないが、心配を超えた包み込むような温かい目でこちらを見ていた。同年代としては小つ恥ずかしい。エマは、エマは……？ なんとか頑なに目を合わせようとしな

「ねえ」

「……っ!? ど、どうした？」

「前回のあれ、まだ謝ってもらつてないしなんなら今回、その服見る感じもつと酷かつたんでしょ? ……次の実習でまた無茶したら」

「……無茶、したら?」

「……ぶつ飛ばすから」

「……こつわ……怖すぎる……。アリサの琴線に何が触れたのか分からない。今回だつて過程はどうあれ無傷で帰つてきたのだ。それで手打ちにならないのか……?」

その後ホテルに戻り服装を整えれば時刻は十七時。帰りの列車の時間が近づいていた。たった二日間——まあまともに参加したのはたった一日だが——あまりにも濃密すぎた。トリスタに戻るまでの三、四時間、ぐっすりと眠らせてもらおう。

「…ねえ、ジエイル。今回、貴方は何と戦ったの？」

「さあ。海、なのかな」

「海い？…はあ…エマは呪いなんだとか何とか言うし、貴方は街全体を探し回っても居ないと思ったら、一度回ったはずの場所にいるし。こんなの教官二年目に任せるクラスじゃないわよ…」

「いや悪かったって…。教官は良くやってるさ、今回は俺の不注意が原因。あんまり気にしないでくれ」

言われてみれば二ヶ月連続だ。今回は被害は無かったが間違はなく迷惑はかけていた。…でも、なんというか…これ、当分終わらない気がするんだよなあ。俺だけじゃない。ラインが爆弾を抱えたままだし、このクラスそのものが不発弾のたまり場というか。

「でも、出来れば俺は教官と一緒に成長していきたいと思ってるよ。だってまだ二回目だぞ？これで終わるわけがないじゃないか」

「…調子のいいこと言っちゃって。まったく、良いわよ。あなた達くらいこの私が引張ってあげるんだから！」

「その調子だ」

列車での時間は緩やかに過ぎていった。

後日、臍脂色のスーツを着、頬にタトウを入れた少年（少女？）が箱いっぱい眼鏡を第三学生寮に届けに来たのは別の話。

VII組レポート：あれほどやつれた顔をしたミスティさんは初めて見た（リイン談）

またおいで！

ここは海都オルデイス。仮初の英雄よ、またのお越しをお待ちしております。

幕間2 選定／独白1

「おい」

「あら、何かしら？」

「オルディーネの脚に砂がこびりついてたんだが、お前メンテナンスとか言って何したんだよ」

「それはメンテナンスよ。あんなの公衆の場で見せれるわけじゃないでしょう？近くの海岸に人払いを張ってメンテナンスをしていた。それだけよ？」

「……ほーん」

クロウは面白くなさそうに返事をしていた。

…この子と出会ったのはいつ頃だったか。確か、彼と出会って半年後くらい、盟主様に下り結社に入ったあとと帝国中を旅をして回っていた頃…久しぶりにカイエン公爵の屋敷に立ち寄った時鍛錬場でただ一人、濁った目の中で一つだけ曲げられないものを秘めた男の子に出会ったのが懐かしい。

名前を聞いてみれば、その子の名前はクロウ・アームブラストと言うようだった。聞き覚えはないけれど、ジュライの市長のお孫さんらしい。彼はカイエン公の誘いを受け、あの歳にして帝国解放戦線のリーダー……大したものだ。

出会って半年、彼の雰囲気は柔らかくなり他の解放戦線のメンバーとも打ち解けるようになった。私もよく見かけたという理由で声をかけてきていた。とてもいい兆候だ。

出会って一年、カイエン公爵の勧めにより彼を、起動者ライザーにすることになった。あまり望ましくはないが……帝国に蔓延る呪いをどうにかする足がかりになるかもしれない。目の前の男の子は私の悩みや葛藤も知らないで……新たな力を手に入れることに歓喜している。こうなったら散々扱いてやるんだから。

あれからもう一年経った。出会って早二年。騎神での戦闘訓練のことも考えると

う刻限はすぐそこまで来ていた。

今日は予定を繰り上げ、最終試練に向かつてもらう。クロウは独学でダブルセイバー双刃剣を準達人級と打ち合えるレベルまで仕上げていた。それでも…心配なものは心配なのだ。私にとってクロウはもはや弟や息子のような、いや、そんな役割を超越したもうひとつの『家族』。同然の彼を私は谷底へ突き落とすのだから。

クロウが挑んでもらっていたのは蒼の騎神の試練。蒼を選んだのにもしつかりと理由がある。

騎神は灰、蒼、紫、緋、銀、金そして、黒。騎神は初代の起動者以降、彼らを導いた魔女によって試練を課せられて封印された。そう、騎神には、騎神が求める能力に対応してそれぞれに固有の試練が設定されている。

まず紫。紫の初代起動者は矜恃を重んじていたという。そして紫の起動者を導いた魔女は矜恃を試す試練を課して封印したらしい。場所は不明。

次に金。歴史の表舞台に出ることは全くと言っていいほど少なかったが幸い情報は得られた。あの騎神が起動者に求めるは純粋な力。今も尚地脈をさまよっているため、正しい手順で儀式を行えば任意の場所に試しの場を建て、容易に金の騎神を得られることだろう。——力を試す試練を簡単に突破できるなら、だが。

今度は緋の騎神。この騎神の初代がそうだったのもあって、求められるのは血統。皇

族でなければ起動者になれないというあまりにも高い敷居がある代わりに試練が備えられていない。生まれこそが最大の試練と言うわけだ。

そして銀。かつてからずっとそう。この騎神を乗りこなした者達はその命が擦り切れるまで忠義を尽くしたという。試練の場所はローエングリン城。もうあそこは空っぽで、今の起動者は、まあ…何となく察してはいる。

そろそろ彼らの話をしなくてはならない。灰だ。灰が求めるものは絆。これはかの大帝の頃からだったと言うが、動乱の時代を仲間たちと駆け抜けた大帝は次に灰を継ぐものが、同様に支え合える仲間がいることを望んでいた。

正直、この灰に選ばれた者は可哀想と言わざるを得ないだろう。多くの絆を紡ぐという条件があるせいで試練を乗り越えるための期間に目安が付けられないのだ。せつかく騎神に認められたのに戦闘訓練も出来ないまま実戦、なんて笑えないだろう。

同様に異端であるもの、黒。居場所、試練の形式、存在、過去、全てが不明。分かっているのは、奴にこの帝国にかかった呪いの秘密がある可能性が高いことだ。いち早く究明し、帝国を救ってみせる。

最後に、これからクロウが挑む蒼。蒼の騎神の試練に認められるために必要な素質は信念。矜持とも、正義とも違う。矜持と言えるほど大したプライドをクロウは持ち合わせていない。正義なんておこがましい。クロウは自分がやろうとしていることは普通

ではないことを分かっている。ただそこにあるのは自分が彼を食い止めるというエゴ、それはまさに信念と言えるもの。そんなクロウだからこそ私は蒼の起動者へと導いたのだ。

「いい？クロウ。場に入るまでは私も共に行くわ。だけど、結局この戦いを決めるのは貴方。私がどれだけ力を奮つても試しは終わらないわ。貴方が死にそうになれば私が勝手に回収するけれど…それが私たちの終わりだと、分かっているわね？」

「…ああ」

「フフ、そんなに緊張しないで？これで失敗しても貴方は切り札を一つ掴み損ねるだけ。貴方の努力次第では騎神に並ばないにしてもそれなりの力は得られるはずよ。それとも、貴方が信じるそれはそんなに薄っぺらかったの？」

「はあ…、そんな挑発されなくても。ちよつと強ばってただけだ。お前こそ自分が手塩をかけて育てた倒れるかもって心配なのか？」

「あら、言うじゃない」

「そつちこそ」

彼の顔の強ばりは軽減された。これなら少しはマシになったかしら…。

私は彼に蒼に選ばれる条件を伝えていない。試しは潜在的な部分まで感知する。候

補者の思いが魔女によって意識的に誘導されたものだとするならば試練の抹殺対象となる。いくら私でも瞬きする間に殺されるなら、魔術の起こりを許されないそれは必殺。そんな形で死ぬのは私としても不本意だ。

ようするに彼が戦いの中で自分の信念を再認識、確立させなければ試練は突破できない。本人の本質、人間性そのものを試すものこそが試しなのだ。

「これが…最後の試し——！」

「実物は初めて見るけれど…圧倒されるとはまさにこれこの事ね」

蒼色のチカラが顕現する。文献でしか知らない蒼の騎神に一致する形の影。地下水路のずっと深く、水底のような暗い場所に鎧や剣の残骸が突き刺さった陰鬱とした場だ。悠然と存在するエネルギーの奔流はこの世のものでは無い感覚がした。

ここから私が出ることはほぼと言ってもいいほどない。私が出せばその分だけ相手にダメージを与えられるのだけど、それで勢い付かれて大切なものを見失われても困る。

まずはクロウに補助の魔術でもかけて——

G u o o o o —— !

「あ」

「バック！」

突然の横薙ぎは私の半身をお別れさせようとしたところでクロウが割って入り、双刃剣で受け止めきれず吹っ飛ばされたことにより無事で済んだ。

正直、自分の実力を信じすぎていた。相手は尋常ならざる存在だ。気を抜けばどんな存在であろうと塵殺されることが私の頭からは抜けていた。

「あ……ありが」

「——おい、散々俺に言つときながら開戦数秒にあの世行きしそうになったバカ魔女」

「なっ……そんな言い方ないじゃない！」

それがこれまで面倒見てやってきた人間に言う言葉か？

「つべこべ言うな。心配して俺に変な気を回されたつて邪険にする気はないがな、目の前で死なれるのは気分悪いもんなんだよ。いいか——黙って俺を導け」

——本当に、大した子に成長したと思う。これは一本取られた、導き手とかそういうの以前に、歳上として負けた気分。いいわ、そんなに言うならちよつとだけ本気出しちゃうんだから——！

随分と追い詰められた。いつものドレスのような格好で来るんじゃないかなと後悔している真つ最中。触媒としても利用しているドレスは破れ血が滲み、杖を握るのも手がビリビリと痺れて難しい。

後ろで援護や攻撃をしていただけの私よりもクロウはもつと重傷だ。治癒魔術で傷と回復を繰り返したせいか痛みで頭が働いていないのだろうか、覚束無い動きが増えてきた。私の魔術が追いつかないせいか肩の肉は裂け左脚も震えている。

蒼色のチカラ自体はかなり追い追いつめているのだ、あと一歩、最後の決め手が足りていない。もう、潮時なのだろうか…。

「もう、終わりだ。武器もまともに握れないのどうしろと?」

彼の心ももはや折れている。離脱だ。生きて帰れば戦う力は蓄えられる。騎神の試練への挑戦権を失うがそれでも人生は終わりじゃない。あの鉄血に一矢報いる方法はいくらだつてある。

「すまん、ヴィータ。お前に選ばれても結局、ただのガキの地団駄だったのかもしれない」

「いいえ、いいえ…貴方はもう十分頑張ったわ…!ただ一人でここまで…っ!」

「でも」

頭の傷から流れた血が目に入り、彼の目を濁らせていた。だけど、その目に残る、秘められた光はまるで出会いのようで――。

「それでも……諦めたくないんだ……ッ！」

「――そう、だからこそ貴方を選んだの。自分の間違いを受容し、その上で前に進む意志を持つ貴方を！だから、行つて！」

そうだ。私は彼のまさにこの信念を見込んで選んだのだったな。

余っている魔力をフルで廻らせて彼の肉体に最大限のブーストをかける。クロウの身体が壊れる寸前まで魔力を注いだら残りの魔力は対概念存在の武装刻印を急造で組み上げ、双刃剣に焼き付ける。信念の火が点つた今最も警戒すべきは体力の消耗による臂力の減衰。その穴は、この導き手私が埋める――！

「――ありがとうヴィータ。今決めてくるから治療の準備をしてくれると助かる」

クロウが腰を低くして双刃剣を構える。片方を身体の前、もう片方を踵の方へ。前側の刃がすんでのところで避けた横薙ぎ一閃を受け止める。柄を腰骨に当てて踵側の刃に伝わる力を利用して跳び上がる。

「本命はその先だ…死ぬ、騎士擬き…ッ！」

振り抜いた双刃剣は綺麗に蒼色のチカラの頭部を貫いた。蒼の騎神はクロウの信念を受け入れて晴れて起動者に認められたのだった。

クロウが起動者に認められてから一年と少しが経った。あともう少しで出会って四年が経とうとしている。今彼は何をしているのかと言うと…。

「……………うーん……………」

「ク、クロチルダ様っ…クロウ様がダウンなされました…！」

「いいえ、それはブラフよ。さっさと叩き起して教えこんでちょうだい」

トールズに入学するための試験勉強の真っ最中。市長のお孫さんだということもあり基礎知識は詰まっていたのだが、あの学校に入るにはまだまだ足りない。あの男に頼るのは癪だが、カイエン公のお抱えの教師を利用してもらおうとしよう。

願わくば彼が日常の一端を思い出せますように——

あの後クロウが学院に入ったあと、コンタクトは最低限にした。本当に大事な時は彼の方から連絡してくるし、私は私で別の仕事もあるし。存外普通に生活を楽しんでいるように安心したものだ。

終わりが来るその日までを、目いっぱい楽しんで欲しい。

このようなことがあつたからこそ、いざ久しぶりにあの地に戻つた時、変容したチカラと彼が相對していたのを目にした時は焦りを隠せなかつた。

そして何より、■の■、その■である彼が、いくら変容したにしても信念を持つものにはか斃せないアレを殺した時、驚愕は危惧へと変わったのを今でも覚えている。

「…深淵サマ？これは…」

「これをトリスタの第三学生寮まで渡してきてくれるかしら？道化師サマ？」

臍脂色のスーツを着た者が納得いかないと言わんばかりの顔で箱を持って部屋を去つた後、ヴィータは部屋でパタリと倒れ、席を外していたクロウが本気で心配したらしい。

*

「これは……」

「ああ、覚えてる。これは」

これは一つ目の失敗。あの蒼色の影は紛れもなく俺を殺し得る存在だった。確かに死の恐怖から逃れようと必死になっていた。俺の力があれだと言うのにだ。

あの時、俺はもつと弱者で居られただろうか。目の前の存在を滅ぼそうとするよりも先に、無様にも生き残っていられればいいと思いつけられたら。猫を噛み殺そうと虎視眈々と機会を伺う窮鼠になれるほど、大胆な人間でもなかったはずなだけだな。

結局、何をどう足掻いても結末は変わらず、あそこに至っていたのだろうさ。自分から枷を外し昇華するか、周りから望まれて墮とされるか……どちらにせよ時期が少し違うだけでどうせこうなる。その枷を外していいものかどうかも知らないで……本当に愚か過ぎて振り返るだけで頭が痛くなる。

「まあ駄目でしょう。そのせいで——」

「あー分かった分かった。今から変えようとしたって限度あるだろ、それくらいにしてくれ」

「……………では、次は？」

「次か。次は、湖と霧の町、レグラムだ。第二の失敗、今振り返るとこの失敗はかなり致命的だったと思う」

「致命的…貴方の失敗はいつも致命的でしたがね」

「うるさい。ほら——」

ゆらゆらゆらゆら。夜は更ける。